

西I遺跡・祇園原I遺跡
石橋I遺跡・高瀬城北遺跡

古墳時代後期集落等の調査

2003年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

西I遺跡・祇園原I遺跡
石橋I遺跡・高瀬城北遺跡

古墳時代後期集落等の調査

2003年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

序

山陰自動車道鳥取益田線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の開発に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち宍道～出雲間につきましては、平成14年3月から鋭意建設を進めております。これに先立ち、路線敷地内にある遺跡について鳥根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である斐川町における西Ⅰ遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査がはるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を、時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来の道しるべとなるとともに、今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は鳥根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成15年3月

日本道路公団中国支社 松江工事事務所

所 長 竹 下 幸 次

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成12年度から山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このほど当該区間において初めての報告書を刊行する運びとなりました。

本報告書は、いずれも簸川郡斐川町に所在する西Ⅰ遺跡、祇園原Ⅰ遺跡、石橋Ⅰ遺跡、高瀬城北遺跡についての調査成果をまとめたものです。なかでも西Ⅰ遺跡では、古墳時代後期に営まれた集落跡が調査され、出雲平野南部における古墳時代集落の一端が明らかになりました。

本報告書が、地域の歴史を解明する手がかりとなり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御協力いただきました地元の方々、日本道路公団中国支社、斐川町教育委員会、その他関係機関、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会

教育長 広 沢 卓 嗣

例 言

1. 本書は日本道路公団中国支社の委託を受けて、鳥根県教育委員会が平成13年度に実施した、山陰自動車道鳥取益山線（穴道～出雲間）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

鳥根県簸川郡斐川町大字三絡字武部西2184他	西 I 遺跡
同 直江町3429-2 他	祇園原 I 遺跡
同 直江町3475他	石橋 I 遺跡
同 神庭1558-2 他	高瀬城北遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 鳥根県教育委員会

（平成13年度）現地調査

【事務局】 穴道正年（埋蔵文化財調査センター所長）・内田 融（同総務課長）・松本岩雄（同調査第1課長）・川原和人（同調査第2課長）・今岡 宏（同総務係長11月まで）

【調査員】 川原和人・大庭俊次（同文化財保護主事）・岩橋孝典（同主事）・福場康芳（同教諭兼文化財保護主事）・奥村昌子（同教諭兼文化財保護主事）・赤木 努（同教諭兼文化財保護主事）・横木尚文（同教諭兼主事）・植田寿子（同講師兼主事）・糸賀伸文（同調査補助員）・露梨靖子（同調査補助員）・伊藤啓郎（同調査補助員）・松崎恵美子（同調査補助員）

【遺物整理】 河野真由美（同内業作業員）・小豆沢美貴（同内業作業員）

（平成14年度）報告書作成

【事務局】 穴道正年（埋蔵文化財調査センター所長）・卜部吉博（同副所長）・内田 融（同総務課長）・川原和人（同調査第2課長）・坂本淑子（同総務係長）

【調査員】 川原和人・大庭俊次（同文化財保護主事）・岩橋孝典（古代文化センター主任研究員）横木尚文（埋蔵文化財調査センター教諭兼文化財保護主事）・松崎恵美子（同調査補助員）

4. 発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については、日本道路公団・社団法人中国建設弘済会、鳥根県教育委員会の三者協定に基づき、鳥根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

（現場担当） 矢野秀夫（技術員）・藤原 恒（技術員）・加本宏文（技術員）

（事務担当） 飯塚春美（事務員）

5. 現地調査及び資料整理に際しては、文化財課・古代文化センター・埋蔵文化財調査センター各職員および以下に記す方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。

陰山 昇（斐川町教育委員会文化財課長）・穴道年弘（斐川町ふるさとデザイン課）

陰山真樹（斐川町教育委員会）・江角 健（斐川町教育委員会）・阿部賢治（斐川町教育委員会）・池田敏雄（斐川町文化財保護審議会委員）

6. 挿図中北は、測量法による第3座標系 X 軸方向を指す。平面直角座標系 XY 座標は、日本測

地系による。レベル高は海拔高をがす。

7. 第1図、第3図は国土交通省国土地理院発行のものを使用した。
8. 本書に掲載した写真のうち空撮は株式会社ジェクトが撮影し、その他の遺構・遺物写真は岩橋、大庭、横木、広江耕史（文化財課主幹）が撮影した。
9. 本書に掲載した実測図は川原、岩橋、横木、露梨、伊藤が作成し、露梨、松崎、河野、小豆沢、横木、岩橋、赤木のほか、西 郁子（埋蔵文化財調査センター内業作業員）、田中路子（同内業作業員）が浄書した。題字は横木が作製した。
10. 本書の執筆は岩橋、大庭、川原、福場、横木が分担して行い、その文責を目次に記した。編集は横木が行った。
11. 本書掲載の遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

本文目次

第1章	調査に至る経緯	(横木)	1
第2章	遺跡の位置と歴史的環境	(福場)	3
第3章	西I遺跡の調査	(岩橋・大庭)	12
第4章	祇園原I遺跡の調査	(大庭)	67
第5章	石橋I遺跡の調査	(大庭)	72
第6章	高瀬城北遺跡の調査	(川原)	75

表目次

第1表	山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)ルート上の遺跡一覧	2
第2表	本吉掲載遺跡と周辺の遺跡	4
第3表	西I遺跡 段状遺構1ピット計測表	16
第4表	西I遺跡A-3区 掘立柱建物1計測表	16
第5表	西I遺跡A-2区 掘立柱建物2計測表	16
第6表	西I遺跡A-3区 段状遺構1掘立柱建物1付近出土遺物観察表	22
第7表	西I遺跡A区 段状遺構1中央部出土遺物観察表	22
第8表	西I遺跡A-2区 段状遺構1掘立柱建物2付近出土遺物観察表	22
第9表	西I遺跡A-2区 段状遺構1掘立柱建物2付近出土石製品観察表	23
第10表	西I遺跡A-2区 段状遺構1掘立柱建物2付近出土鉄製品観察表	23
第11表	西I遺跡A区 段状遺構1西側出土遺物観察表	23
第12表	西I遺跡A区 段状遺構1西側出土石器観察表	23
第13表	西I遺跡A区 段状遺構1西側出土銀貨観察表	23
第14表	西I遺跡A区 段状遺構1西側出土鉄滓観察表	23
第15表	西I遺跡A-2・3区 段状遺構1下方包含層出土遺物観察表	23
第16表	西I遺跡A-2・3区 中段包含層出土鉄製品観察表	23
第17表	西I遺跡A-2区 段状遺構1(掘立柱建物2付近)出土遺物構成表	24
第18表	西I遺跡A-3区 段状遺構1(掘立柱建物1付近)出土遺物構成表	24
第19表	西I遺跡A-1区 段状遺構2ピット計測表	24
第20表	西I遺跡A-1区 段状遺構2掘立柱建物3計測表	24
第21表	西I遺跡A-1区 段状遺構2出土遺物観察表	28
第22表	西I遺跡A-1区 段状遺構2出土石器観察表	28

第23表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 2 及び周辺出土遺物構成表	29
第24表	西 I 遺跡 A-1 区	上・中段包含層出土遺物観察表	29
第25表	西 I 遺跡 A-1 区	上・中段包含層出土石器観察表	29
第26表	西 I 遺跡 A-2・3 区	段状遺構 3 ビット計測表	30
第27表	西 I 遺跡 A-2・3 区	段状遺構 3 古段階出土遺物観察表	32
第28表	西 I 遺跡 A-2・3 区	段状遺構 3 古段階出土鉄製品観察表	32
第29表	西 I 遺跡 A-2・3 区	段状遺構 3 新段階出土遺物観察表	34
第30表	西 I 遺跡 A-2・3 区	段状遺構 3 出土石器観察表	34
第31表	西 I 遺跡 A-2・3 区	段状遺構 3 古段階出土遺物構成表	34
第32表	西 I 遺跡 A-2・3 区	段状遺構 3 新段階出土遺物構成表	34
第33表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 4 ビット計測表	35
第34表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 4 出土遺物構成表	37
第35表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 4 出土遺物観察表	38
第36表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 4 出土鉄製品観察表	38
第37表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 5 ビット計測表	38
第38表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 5 出土遺物構成表	43
第39表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 5 床面出土遺物観察表	44
第40表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 5 床面出土鉄製品観察表	44
第41表	西 I 遺跡 A-1 区	段状遺構 5 覆土出土遺物観察表	45
第42表	西 I 遺跡 A-1 区	小規模ビット群ビット計測表	47
第43表	西 I 遺跡 A-3 区	構列 1 付近ビット計測表	47
第44表	西 I 遺跡 A-3 区	構列 1 計測表	47
第45-1 表	西 I 遺跡 A-1 区	下段・下段斜面出土遺物観察表 1	50
第45-2 表	西 I 遺跡 A-1 区	下段・下段斜面出土遺物観察表 2	51
第46-1 表	西 I 遺跡 A-2・3 区	下段・下段斜面出土遺物観察表 1	52
第46-2 表	西 I 遺跡 A-2・3 区	下段・下段斜面出土遺物観察表 2	53
第47表	西 I 遺跡 A-2・3 区	下段・下段斜面出土石器観察表	53
第48表	西 I 遺跡 A-2・3 区	下段・下段斜面出土鉄製品観察表	53
第49表	西 I 遺跡 A-2・3 区	下段・下段斜面出土鉄滓観察表	53
第50表	西 I 遺跡 A-2・3 区	下段・下段斜面出土石製品観察表	53
第51表	西 I 遺跡 A 区	包含層出土遺物構成表	53
第52表	西 I 遺跡 A 区	奈良・平安時代の遺物観察表	56
第53表	西 I 遺跡 A 区	奈良時代の遺物構成表	57
第54表	西 I 遺跡 A 区	平安時代の遺物構成表	57
第55表	西 I 遺跡 B 区	遺物構成表	60
第56表	西 I 遺跡 A 区	出土須恵器杯蓋構成表	63
第57表	鳥根県内出土三輪玉一覽		63
第58表	祇園原 I 遺跡	土坑規模計測表	71
第59表	祇園原 I 遺跡	出土遺物観察表	72

挿図目次

第1図	山陰自動車道鳥取益田線(六道～出雲間)ルート上の遺跡 (S=1/50,000)	2
第2図	本書掲載遺跡位置図	3
第3図	本書掲載遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/50,000)	5
第4図	西I遺跡・石橋I遺跡周辺図 (S=1/2,000)	13
第5図	西I遺跡A・B区 調査前地形図 (S=1/400)	14
第6図	西I遺跡A・B区 調査後地形図 (S=1/400)	15
第7図	西I遺跡A区 区割図 (S=1/400)	16
第8図	西I遺跡A-3区 段状遺構1東側・掘立柱建物1実測図 (S=1/60)	17
第9図	西I遺跡A-2区 段状遺構1西側・掘立柱建物2実測図 (S=1/60)	18
第10図	西I遺跡A区 段状遺構1出土遺物実測図 (S=土器1/4・金属製品1/3・石製品2/3)	20
第11図	西I遺跡A区 段状遺構1遺物出土状況図 (S=1/120・土器1/6・石製品 鉄製品1/2)	21
第12図	西I遺跡A区 段状遺構1下方包含層出土遺物実測図 (S=土器1/4・鉄製品1/3)	22
第13図	西I遺跡A-1区 段状遺構2・掘立柱建物3実測図 (S=1/60)	25
第14図	西I遺跡A区 段状遺構2出土遺物実測図 (S=土器1/4・石製品2/3)	26
第15図	西I遺跡A区 段状遺構2遺物出土状況図 (S=1/20・土器1/6・石製品1/1)	27
第16図	西I遺跡A区 段状遺構2周辺出土遺物実測図 (S=土器1/4・石製品2/3)	28
第17図	西I遺跡A-2・3区 段状遺構3実測図 (S=1/60)	31
第18図	西I遺跡A-2・3区 段状遺構3出土遺物実測図 (S=土器1/4・石製品2/3・鉄製品1/3)	32
第19図	西I遺跡A-2・3区 段状遺構3遺物出土状況図 (S=1/20・土器1/6)	33
第20図	西I遺跡A-1区 段状遺構4出土遺物実測図 (S=土器1/4・鉄製品1/3)	35
第21図	西I遺跡A-1区 段状遺構4実測図 (S=1/60)	36
第22図	西I遺跡A-1区 段状遺構4遺物出土状況図 (S=1/60・土器1/6・鉄製品1/4)	37
第23図	西I遺跡A-1区 段状遺構5実測図 (S=1/60)	39
第24図	西I遺跡A-1区 段状遺構5床面出土遺物実測図 (S=土器1/4・鉄製品1/3)	40
第25図	西I遺跡A-1区 段状遺構5覆土出土遺物実測図 (S=1/4)	41
第26図	西I遺跡A-1区 段状遺構5遺物出土状況図 (S=1/20・土器1/6)	42
第27図	西I遺跡A-1区 下段小規模ピット群・A-2・3区 中段構列1実測図 (S=1/60)	46
第28図	西I遺跡A-1区 下段・下段斜面包含層出土遺物実測図 (S=1/4)	48
第29図	西I遺跡A-2・3区 下段・下段斜面包含層出土遺物実測図 (S=1/4)	49
第30図	西I遺跡A-1・2・3区 下段・下段斜面包含層出土遺物実測図 (S=石製品2/3・鉄滓1/3)	49
第31図	西I遺跡A-2区 下段包含層出土遺物実測図 (S=1/3)	50
第32図	西I遺跡A区 奈良・平安時代遺物実測図 (S=1/4)	54
第33図	西I遺跡A区 奈良時代の遺物分布状況図 (S=1/400・土器1/6)	55

第34図	西 I 遺跡 A 区	平安時代の遺物分布状況図 (S=1/400・土器1/6)	57
第35図	西 I 遺跡 A 区	石製品・鉄製品分布状況図 (S=1/400・石製品1/2・金属製品 磁石1/4)	58
第36図	西 I 遺跡 A 区	手摺ね土器分布状況図 (S=1/400・土器1/4)	59
第37図	西 I 遺跡 C 区	出土土師器実測図 (S=1/2)	60
第38図	西 I 遺跡 C 区・D 区	位置図 (S=1/800)	61
第39図	西 I 遺跡 A 区	煮沸具類分布状況図 (S=1/400)	64
第40図	祇園原 I 遺跡	調査区位置図 (S=1/2,000)	67
第41図	祇園原 I 遺跡	焼土溜まり土層断面図 (S=1/50)	68
第42図	祇園原 I 遺跡	遺構及び遺物分布平面図 (S=1/100)	69
第43図	祇園原 I 遺跡	土坑実測図 (S=1/40)	71
第44図	祇園原 I 遺跡	出土遺物実測図 (S=十師質土器1/4・黒曜石剥片2/3)	72
第45図	石橋 I 遺跡	遺構実測図 (S=1/100)	73
第46図	石橋 I 遺跡	土層実測図 (S=1/50)	74
第47図	高瀬城北遺跡	遺跡周辺の地形図 (S=1/1,000)	75
第48図	高瀬城北遺跡第 1 調査区	調査前地形測量図 (S=1/200)	77
第49図	高瀬城北遺跡第 1 調査区	調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1/120)	78
第50図	高瀬城北遺跡第 1 調査区	土層図 (S=1/60)	79
第51図	高瀬城北遺跡第 1 調査区	第 1 土坑実測図 (S=1/30)	80
第52図	高瀬城北遺跡第 1 調査区	出土遺物実測図 (S=1/3・16のみ2/3)	81
第53図	高瀬城北遺跡第 2 調査区	調査前地形測量図 (S=1/200)	83
第54図	高瀬城北遺跡第 2 調査区	調査後地形測量図・遺構配置図・土層図 (S=1/60)	83
第55図	高瀬城北遺跡第 2 調査区	第 1 土坑実測図 (S=1/30)	84
第56図	高瀬城北遺跡第 2 調査区	第 2 土坑実測図 (S=1/30)	84

図版目次

図版 1	西 I 遺跡	全景(南東上空より)
図版 2	西 I 遺跡(中央)・石橋 I 遺跡(左上)	遠景
図版 3 上	西 I 遺跡	遠景(西側上空より)
図版 3 下	西 I 遺跡	全景(東側上空より)
図版 4 上	西 I 遺跡 A 区	全景(上空より)
図版 4 下	西 I 遺跡 A 区	段状遺構 1・3・4・5(北側より)
図版 4 下	西 I 遺跡 A 区	段状遺構 2(北西側より)
図版 5 上	西 I 遺跡 A 区	段状遺構 1・3・4(北西側より)
図版 5 下	西 I 遺跡 A 区	段状遺構 1・3・4・5(北西側より)
図版 6 上	西 I 遺跡 A 区	段状遺構 1・掘立柱建物 1
図版 6 下	西 I 遺跡 A 区	段状遺構 1・掘立柱建物 2
図版 7 上	西 I 遺跡 A 区	段状遺構 2・掘立柱建物 3

図版7下	西I遺跡A区	小規模ピット群	
図版8上	西I遺跡A区	段状遺構3(西側より)	
図版8下	西I遺跡A区	段状遺構3(東側より)	
図版8下	西I遺跡A区	段状遺構3新段階・遺物出土状況	
図版9上	西I遺跡A区	段状遺構3新段階・遺構検出状況(南西側より)	
図版9中	西I遺跡A区	段状遺構3新段階・遺構完掘状況(北東側より)	
図版9下	西I遺跡A区	段状遺構5・床面検出状況(北西側より)	
図版10上	西I遺跡A区	段状遺構4・遺構完掘状況(北西側より)	
図版10下	西I遺跡A区	段状遺構4・遺構完掘状況(東側より)	
図版10下	西I遺跡A区	段状遺構3(西側より)	
図版11上	西I遺跡A区	段状遺構5(西側より)	
図版11下	西I遺跡A区	段状遺構5(北西側より)	
図版12上	西I遺跡A区	段状遺構5・床面検出状況(北西側より)	
図版12中	西I遺跡A区	段状遺構5・土層堆積状況(北側より)	
図版12下	西I遺跡A区	段状遺構5・遺物出土状況(北側より)	
図版13	西I遺跡A区	古墳時代後期遺物群	
図版14	西I遺跡A区	段状遺構1出土遺物	
図版15	西I遺跡A区	段状遺構1及び下方斜面包含層出土遺物	
図版16上	西I遺跡A区	段状遺構1下方包含層出土遺物	
図版16下	西I遺跡A区	段状遺構2出土遺物	
図版17上	西I遺跡A区	段状遺構2出土遺物	
図版17下	西I遺跡A区	段状遺構2周辺出土遺物	
図版18上	西I遺跡A区	段状遺構2周辺出土遺物	
図版18下	西I遺跡A区	段状遺構3出土遺物	
図版19	西I遺跡A区	段状遺構3・4出土遺物	
図版20上	西I遺跡A区	段状遺構4出土遺物	
図版20下	西I遺跡A区	段状遺構4・5出土遺物	
図版21	西I遺跡A区	段状遺構5床面出土遺物	
図版22上	西I遺跡A区	段状遺構5床面上出土遺物	
図版22下	西I遺跡A区	段状遺構5覆土出土遺物	
図版23	西I遺跡A区	段状遺構5覆土出土遺物	
図版24	西I遺跡A区	段状遺構5覆土・A-1区下段包含層出土遺物	
図版25	西I遺跡A区	A-1区下段・下段斜面包含層出土遺物	
図版26上	西I遺跡A区	A-1区下段・下段斜面包含層出土遺物	
図版26下	西I遺跡A区	A-1区下段・下段斜面包含層出土遺物	
図版27上	西I遺跡A区	A-1区下段・下段斜面包含層出土遺物	
図版27下	西I遺跡A区	A-2区下段・下段斜面包含層出土遺物	
図版28	西I遺跡A区	A-2区下段・下段斜面包含層出土遺物	
図版29	西I遺跡A区	A-2区下段・下段斜面包含層出土遺物	奈良・平安時代の出土遺物
図版30上	西I遺跡A区	奈良時代の出土遺物	
図版30下	西I遺跡A区	平安時代の出土遺物	

- 図版31 西 I 遺跡 A 区 出土石器
- 図版32上 西 I 遺跡 A 区 出土金属器
- 図版32下 西 I 遺跡 A 区 出土鍛冶関連遺物
- 図版33上 祇園原 I 遺跡 遠景(東から)
- 図版33下 祇園原 I 遺跡 完掘状況(南から)
- 図版34上 祇園原 I 遺跡 焼土坑 SK06・同08
- 図版34下 祇園原 I 遺跡 土師質土器
- 図版35上 石橋 I 遺跡 山頂部調査前(東から)
- 図版35下 石橋 I 遺跡 山頂部柱穴列(東から)
- 図版36上 石橋 I 遺跡 山頂部柱穴列(東から)・同(西から)
- 図版36下 石橋 I 遺跡 完掘状況空中撮影
- 図版37上 高瀬城北遺跡第 1 調査区 遠景
- 図版37下 高瀬城北遺跡第 1 調査区 近景(北から)
- 図版38上 高瀬城北遺跡第 1 調査区 近景(南から)
- 図版38下 高瀬城北遺跡第 1 調査区 焼土検出状況
- 図版39上 高瀬城北遺跡第 1 調査区 第 1 土坑検出状況
- 図版39下 高瀬城北遺跡第 1 調査区 第 1 土坑完掘状況遠景
- 図版40上 高瀬城北遺跡第 1 調査区 第 1 土坑完掘状況近景
- 図版40下 高瀬城北遺跡第 1 調査区 遺物(須恵器)出土状況
- 図版41上 高瀬城北遺跡第 1 調査区 東西畦土層
- 図版41下 高瀬城北遺跡第 1 調査区 南北畦土層
- 図版42上 高瀬城北遺跡第 2 調査区 近景(南から)
- 図版42下 高瀬城北遺跡第 2 調査区 近景(西から)
- 図版43上 高瀬城北遺跡第 2 調査区 第 1 土坑
- 図版43下 高瀬城北遺跡第 2 調査区 第 2 土坑
- 図版44 高瀬城北遺跡 出土遺物

第1章 調査に至る経緯

山陰自動車道鳥取益田線は、中国横断自動車道尾道松江線・山陽自動車道・中国縦貫自動車道・西瀬戸自動車道（通称しまなみ海道）と接続し、日本海側地域と瀬戸内海地域の広域的な高速交通ネットワークを形成することにより沿線地域の産業・経済・文化の発展と活性化を図ることを目的に、昭和62年に予定路線が決定した。宍道～出雲間18.1kmについては平成3年12月に基本計画が、そして平成8年12月には整備計画も決定した。

この計画にともなう埋蔵文化財調査（トンネル予定地を除く八東郡宍道町・簸川郡斐川町・出雲市市内にかかわるもの）については、平成9年2月7日付で県土木部より県教育委員会に分布調査の依頼があった。これを受け、同年3月後半から分布調査を開始し、6月に調査結果を回答した。しかしこの調査は樹木の繁茂した中でのものであり、路線決定（用地杭設置）後及び立木伐採後の各段階での再調査が必要であると確認された。なお、斐川町では県高速道路事務所の依頼を受け、この年8月から9月にかけて祇園原遺跡のトレンチ調査を行い、結果を9月末に回答している。12月には日本道路公団に対して施行命令があり、翌平成10年1月には工事実施計画も認可された。再調査は条件の整った平成11年2月に行われた。

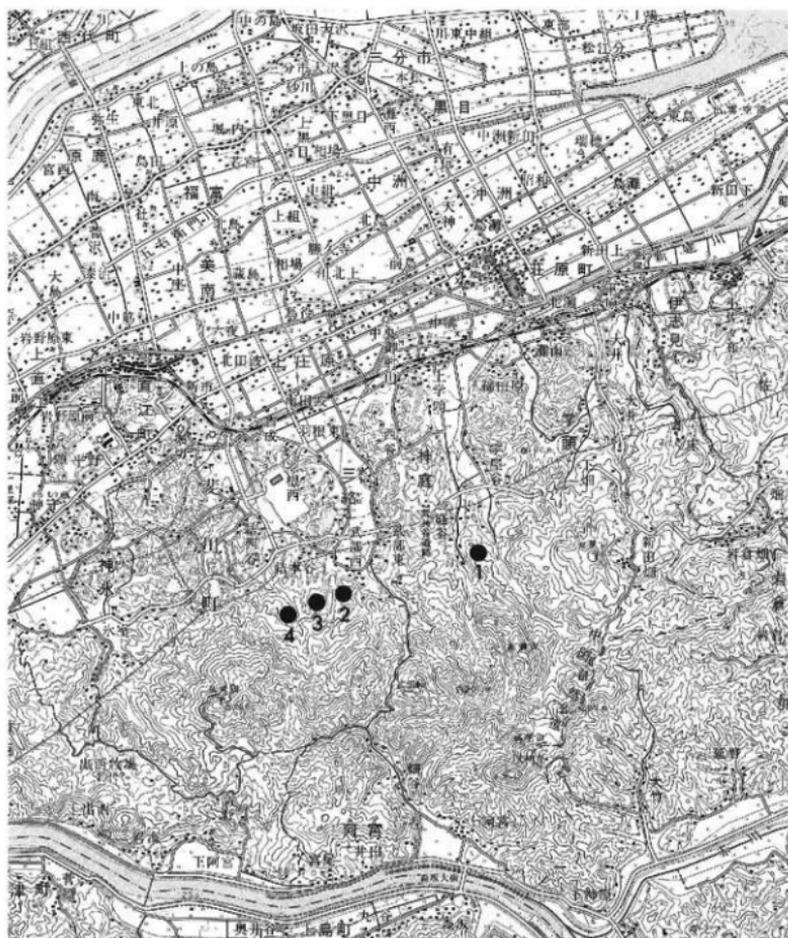
平成12年4月1日、県教育委員会は日本道路公団との間に「平成12年度埋蔵文化財発掘調査」の契約を結び、山陰自動車道建設予定地内の調査を本格的に開始した。5月には、社団法人中国建設弘済会に調査補助業務を委託するための契約も結ばれた。

平成12年度は6月から1パーティで斐川町の3遺跡を調査した。大井Ⅱ遺跡・大井Ⅰ遺跡・畑谷Ⅰ遺跡を対象としたこの年の調査は9月6日に終了、道路公団には10月2日付で結果を通知した。これに並行して8月には次年度を見据え、ルート上の同町学頭～神庭に所在する遺跡の調査範囲も決定された。

平成13年度は4パーティでの調査体制となった。4月25日に開始した西Ⅰ遺跡の調査を皮切り、23遺跡を調査対象とした。斐川町内では学頭地区3遺跡、神庭地区5遺跡、三格地区5遺跡、直江地区4遺跡、さらに出雲市内では上津地区6遺跡を調査し、12月に調査は終了した。調査結果は翌平成14年3月20日付で道路公団へ通知した。

平成14年度は2パーティの体制となる。調査は出雲市内のみとなり、上津地区6遺跡、神門地区12遺跡を対象とした。調査は4月18日に開始し、翌年1月に終了した。

今回報告する遺跡は、平成13年度に調査した西Ⅰ遺跡、祇園原Ⅰ遺跡、石橋Ⅰ遺跡、高瀬城北遺跡であり、いずれも斐川町内に所在する。



第1図 山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)ルート上の遺跡 (S=1/50,000)

第1表 山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)ルート上の遺跡一覧

番号	遺跡名	調査年度	主な内容	報告書シリーズ名
1	高瀬城北遺跡	平成13年度	性格不明の上坑3基、焼土溜まり3か所	山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
2	西 I 遺跡	平成13年度	加工段5、掘立柱建物3、須恵器、土師器、三輪玉、白玉、鉄器	山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
3	石橋 I 遺跡	平成13年度	柱穴3、小規模ピット1、遺物なし	山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
4	祇園原 I 遺跡	平成13年度	焼土・灰土坑6基、焼土・灰溜まり3か所、土師質土器多く出土	山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

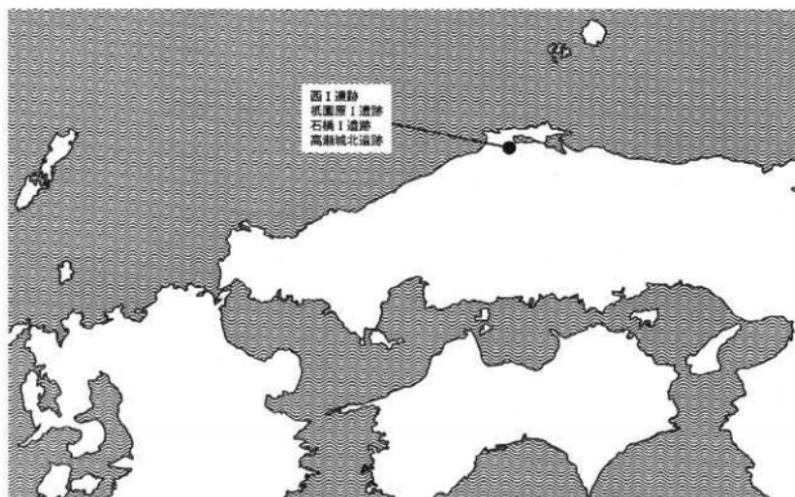
(西I遺跡・祇園原I遺跡・石橋I遺跡・高瀬城北遺跡)

【はじめに】本書で扱う4つの遺跡は、荒神谷遺跡で知られる鳥根県菟川郡斐川町に所在し、各遺跡はこれと至近の距離にある。斐川町はその名の通り、中国山地に源を発する一級河川斐川が南から時計回りに迂回しつつ穴道湖に注ぐ、その蛇行の内側に位置する町である。町の北部、いわば時計の上半分は近世に至って漸く現在の形となった沖積平野であり、南部すなわち下半分がこれらの遺跡を擁する丘陵や山麓で占められ、円の中心近くに荒神谷遺跡があるといえよう。この山麓には『出雲国風土記』に書かれた古代出雲郡の神名大山にも比定される仏経山(標高366m)をはじめ、高瀬山(314m)・大黒山(315m)などがあり、こうした山々からは低丘陵がいくつか北に伸びている。遺跡はこれら南側の山麓や丘陵周辺に集中しており、長らく入海(穴道湖)であった北側の平野部では発見されていない。

目を転じて斐川左岸の出雲平野を俯瞰してみよう。この平野は斐川と神戸川という二つの河川によって形成された沖積平野であり、この地に住む人々は時には豊かな土壌の恩恵を蒙り、時には氾濫という災害にも見舞われてきた。稲作の始まる弥生時代以降、肥沃なこの地域は高い生産力を保ち続け、しばしば政治的・文化的発信地となってきた。この左岸の動向は、当然斐川の地にも大きな影響を与えたであろうし、同一地域と考えるのがむしろ相応しい場合も多々であろう。こうした点も踏まえ、上記の4遺跡を取り巻く地理的・歴史的環境を概観したい。

1. 旧石器時代以前

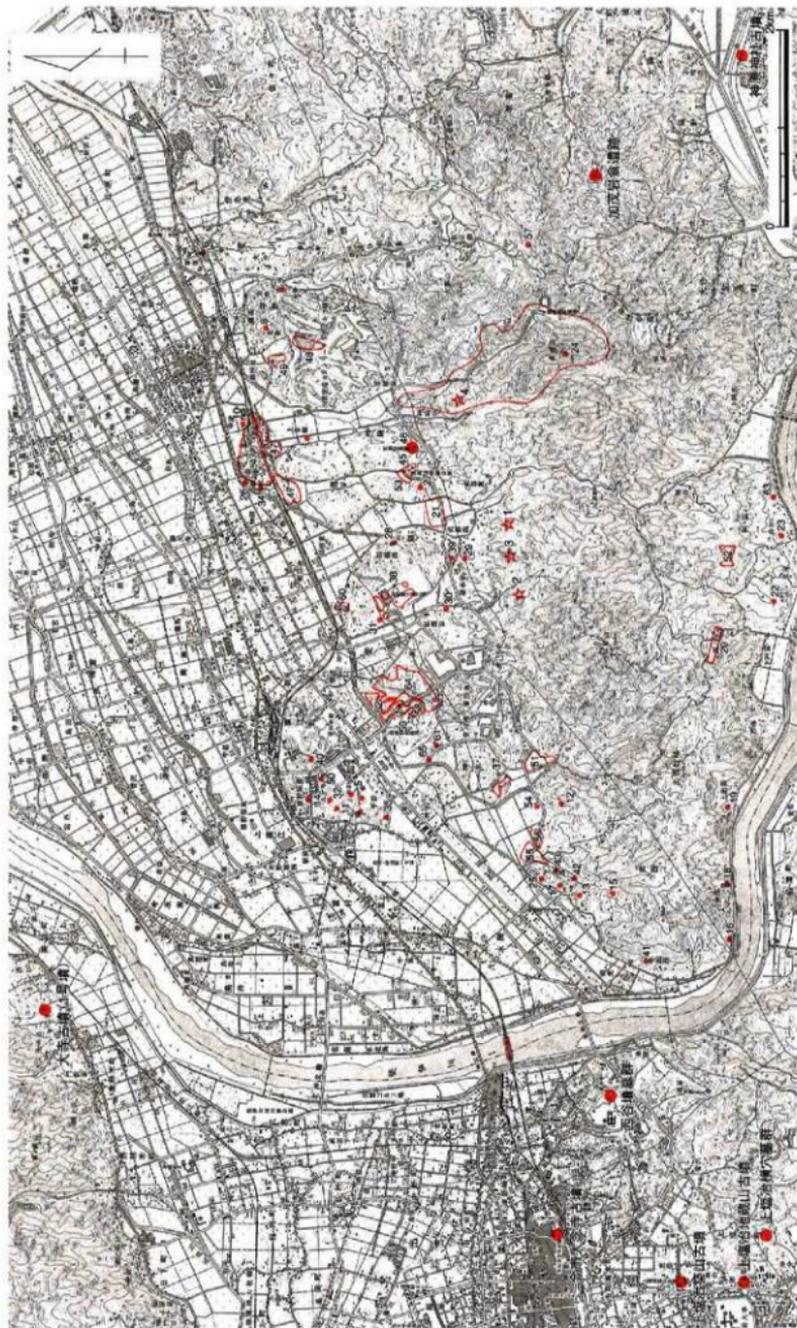
最終氷期(12万年前から1万2千年前)は地球の規模で海が後退した時代で、最も寒冷な時期といえる2万年前には、100m以上海面が低かった。従って現在の穴道湖・中海は存在せず、そこには東西に長く伸びる深い谷があり、谷の底には松江市あたりを分水嶺とした「古穴道川」が流れていた。またその両岸には河岸段丘が広がっていた¹⁾。穴道湖周辺部ではこうした段丘面を中心に旧



第2図 本書掲載遺跡位置図

第2表 本書掲載遺跡と周辺の遺跡

名称	種別	所在地	主な遺構	主な遺物
1 西1遺跡	集落跡	武部	段状遺構、独立柱建物、溝列	土師器、須恵器、三輪瓦、白瓦、石鏡、銅製品、漆器
2 祇園原1遺跡	散布地	直江	土坑	中国陶磁器、土師瓦土器、須恵器
3 石橋1遺跡	城跡	直江	柱穴	
4 高瀬城北遺跡	散布地	神庭	土坑	須恵器、土師器、石鏡
5 平野1遺跡	散布地	上直江 平野		弥生土器、土師器、須恵器
6 草原古墳	古墳	宇須 草原	(前方後)円墳	直刀、貝輪、管玉、小札
7 大井城跡	城跡	宇須 大井	山城・郭5、土塁1、空堀1	鉄釘、陶磁器
8 大倉横穴群	横穴群	宇須 大倉	6穴以上	須恵器
9 小丸下山古墳	古墳	宇須 上学池	円墳、竪穴2	直刀、土師器、須恵器
10 神庭岩船山古墳	古墳	神庭 中流	前方後円墳、舟形石棺	円筒埴輪
11 剣山横穴群	横穴群	上直江 平野	4穴	直刀、須恵器
12 外ヶ市古墳	古墳	神水 外ヶ市	横穴式石室	須恵器
13 山西小丸古墳群	古墳群	山西 隨心	3基(横穴式石室2)	「井」状溝列の簡蓋石、子持蓋
14 若野原横穴群	横穴群	上直江	3穴	
15 山ノ奥横穴群	横穴群	出西 山ノ奥	23穴以上	
16 海の平塚横穴群	横穴群	出西 上出西	3穴	
17 八幡宮横穴	横穴	出西		
18 岩輪上横穴	横穴	山西 上出西		
19 岩海横穴群	横穴群	山西 上出西	4穴	
20 高野古墳群	古墳群	阿宮 高野	3基(円墳1、横穴式石室3)	
21 武部遺跡	散布地	三輪 武部西~東	柱穴	縄文土器、須恵器、土師器、石鏡
22 布子谷古墳	古墳	阿宮 下阿宮	横穴式石室	
23 豊田横穴群	横穴群	阿宮 井田	3穴	
24 高瀬城跡	中世山城跡	神庭~宇須	山城・甲の丸、二の丸、鉄砲立	
25 沢田横穴群	横穴群	出西 沢田		
26 御射山古墳群	古墳群	莊原 御射山	3基(円墳2)	須恵器、刀、耳環
27 鍛冶屋横穴	横穴	三輪 武部東		須恵器
28 西光院横穴群	古墳	三輪 羽根西	横穴式石室	
29 武部西古墳群	古墳群	三輪 武部西	円墳2基、横穴式石室	
30 新城古墳	古墳	直江 新木古	横穴式石室	
31 長船古墳	古墳	三輪 長船	横穴式石室	
32 コモロ山横穴群	横穴群	上直江 八瀬	2穴	須恵器、埴輪
33 稲城横穴	横穴	出西 後谷		須恵器
34 御射山横穴群	横穴群	莊原 御射山	2穴	須恵器、直刀、刀子、鉄鏃、金環
35 亀山横穴	横穴	上直江 平野		須恵器
36 水蔵古墳	古墳	阿宮 下阿宮	横穴式石室	
37 城山古墳群	古墳群	神水 城山	15基(方墳7・円墳2他)	銅片、砥石
38 結遺跡	古墳群、住居跡	直江~三輪	円形29基(方墳1・雑郭、円墳2・制竹形木棺)、建物3ヶ所	穴内鉄製刀、鉄鏃、刀子、小別、円筒埴輪、須恵器、縄文土器、石鏡、石匙、石斧
39 西古墳群	古墳群、土塚墓	三輪 西	2基(方墳2)、土塚墓	須恵器、土師器、直刀、刀子、管玉、土師瓦
40 新市横穴群	横穴群	直江 新市	3穴以上	
41 剣先横穴群	横穴群	山西 剣先	2穴以上	
42 後谷横穴群	横穴群	山西 後谷	3穴	
43 後谷町遺跡古墳	古墳	山西 後谷	横穴式石室	
44 斐伊川鉄橋遺跡	散布地	伊川神立~出市東		弥生土器、古式土師器
45 西谷遺跡	散布地	神庭 西谷	溝状遺構	弥生土器、古式土師器、須恵器
46 荒神谷遺跡	青銅器埋納地	神庭 西谷		銅釘、銅鐻、銅子、須恵器
47 神庭丘陵北遺跡	散布地	神庭~莊原		
48 大倉IV遺跡	散布地	宇須 大倉	溝状遺構	須恵器、土師器、習玉、砥石
49 穂田原I遺跡	散布地	宇須 穂田原		須恵器、青磁
50 平野横穴群	横穴群	上直江 平野	19穴	直刀、鉄製刀、鉄鏃、金環、玉、須恵器、土師器
51 水牢IV遺跡	散布地	神水 水牢		弥生土器、須恵器、土師器
52 天寺平塚寺	寺院跡	阿宮 下阿宮	基壇2	唐石、唐瓦、軒瓦、瓦葺、瓦葺の土瓦、瓦葺
53 西谷IV遺跡	散布地	神庭 西谷	溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器
54 小野遺跡	散布地	神水 小野		須恵器、土師器、土師瓦、白磁
55 後谷(田後谷V)遺跡	宮跡跡	山西 後谷	礎石建物2ヶ所、竪穴住居	縄文土器、弥生土器
56 稲城遺跡	散布地	山西 稲木谷		縄文土器、弥生土器、土師器、土師瓦、白磁
57 新田畑I遺跡	散布地	宇須 新田畑	集落遺構	縄文土器、黒曜石
58 杉沢I遺跡	住居跡	直江 杉沢	段状遺構、竪穴住居	弥生土器
60 宮谷遺跡	散布地	三輪		弥生土器、石鏡、円筒埴輪、陶磁器
61 ミナ(ミナタン)遺跡	散布地	神水 ミナ田	掘立柱建物	須恵器、土師器、土師瓦、唐製石斧
62 杉沢II遺跡	住居跡	直江 杉沢	掘立柱建物跡、掘立柱建物跡	土師器、土師器、須恵器、石鏡
63 井田横穴群	横穴群	阿宮 井田	2穴	
64 三井II遺跡	住居跡	直江 三井	竪穴住居、掘立柱建物	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、土師瓦、白磁
65 上ヶ谷(アダダ)遺跡	散布地	神水 上ヶ谷	掘立柱建物跡、溝状遺構	縄文土器、土師器、須恵器、石鏡、唐製石斧、唐瓦葺



第3図 本書掲載遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/50,000)

石器時代の遺跡が20か所以上見つかっている。また、近隣では大黒山の東麓にあたる穴道町首谷で玉髄質角錐形細石核が表採されている¹⁹⁾。しかし、斐川町域ではまだ旧石器時代の遺物・遺構は見つかっていない。

2. 縄文時代

著しく海水面が上昇したいわゆる「縄文海進」期には、出雲平野にあたる部分に大きく海が入り込み、古穴道湾を形成していた。海進が鈍化すると、斐伊川と神戸川による河川堆積が進み、高根半島と陸続きになった。つまり東に古穴道湖、西に神門水海^{かんどのみづうみ}の成立を見ることになる(約5,000年前)²⁰⁾。しかし斐川町域では平野部の大部分はまだ水面下であった。その後沖積作用を受け陸地が広がってくるものの、基本的にこの地勢は江戸初期まで変わらない。

早期の遺跡としては、赤変した集石遺構と、200点を超える石罫(石罫・スクレーパー・石楯など)を検出した新田畑^{しんたはた}Ⅰ遺跡がある。丘陵の奥深い谷にある結^{むすび}遺跡でも早期末から前期初頭の刺突文土器・条痕文土器が出土した²¹⁾。中期に属する遺跡に上ヶ谷^{かみかや}遺跡があり、ほぼ完形に近い深鉢(船元Ⅰ式)が出土している²²⁾。また後谷^{あごぼ}遺跡(旧後谷Ⅴ遺跡)からは晩期の竪穴住居跡のほか、後期前葉の磨消縄文を施す土器(中津Ⅲ式~福田Ⅱ式古段階)・突帯文土器・打製石斧などが見つかった。さらには武部^{たけべ}遺跡からも後・晩期の縄文土器が出土している。

3. 弥生時代

昭和59年に神庭^{かみだに}西谷で銅剣358本が、また翌60年にはその出土地からわずか東へ7mの地点で銅矛16本と銅鐔6個が発見され、全国に衝撃をもたらした(荒神谷遺跡)。銅鐔と銅矛の同所埋納も例のないことであった。埋納時期は銅剣・銅矛の型式などから、ほぼ弥生時代中期後半とされている。しかし、そもそも誰が何のためにこれだけ大量の青銅器を一括埋納したのかについては、いまだに学界の定説を得るに至っていない。隠匿説、祭祀説、一時保管説等それぞれに論拠を示すものの、各々確定できる材料を得るには至っていないのが現状である²³⁾。ところでこの荒神谷遺跡から西に3kmの地点にある杉沢Ⅰ遺跡では、標高15~36mの丘陵斜面上に加工段が1数箇所見つかっており、中期後半の土器類が出土している。荒神谷遺跡との関連もむしろ耳目を引くところであるが、いずれにせよ一定の規模を持つ弥生時代集落そのものが町内では未発掘であり、調査の進展に期待したい。

この他の遺跡の分布状況²⁴⁾を広く見てみよう。斐伊川左岸の現出雲市域では、中期以降、天神遺跡や古志本郷遺跡といった大溝を伴う拠点集落が出現する。しかし、右岸にあたる斐川町域では、依然として丘陵の縁辺部に散見される程度である。町内で最も早い時期の遺跡は後谷遺跡である。ここでは縄文時代晩期から継続して弥生時代前期、中期末から後期と、断続的に集落が営まれている。中期中葉からこうした居住地は広がりを見せ始め、丘陵地の神庭丘陵北遺跡、平野Ⅰ遺跡、ないし丘陵縁辺部の宮谷遺跡、水室Ⅳ遺跡等でも、集落が形成されていたようだ。また、荒神谷遺跡に近接する西谷^{さいや}遺跡や西谷Ⅱ遺跡では後期の遺跡が確認されている。一方この頃(後期後半)、斐伊川左岸では西谷墳墓群が現れる。大型の四隅突出型墳丘墓を含む大小約20基の墳墓群で、ここから出土した、古備地方との交流を示す特殊器台や特殊壺、丹後・北陸系の土器などは、この時代の広汎な政治的繋がりを示すものとして注目される。

4. 古墳時代

周辺域の重要古墳と斐川

古墳時代、斐伊川中流域は早くから有力な政治勢力が存在したようである。加茂町の神原神社古墳（方墳・前期）からは景初三年銘の三角縁神獸鏡が出土し、全国的に脚光を浴びた。畿内ないし瀬戸内との関連が指摘される古墳である。また、平野北部にも大きな勢力があったようで、出雲最古の前方後円墳とされる大寺古墳（大寺1号墳、前期末～中期初め・出雲市東林木町）が築造されている。（時期はややずれるがこの北東2kmには、馬具などの秀逸な副葬品で知られる後期前半の円墳上島古墳がある。）中期に入ると、宍道湖縁に中小の政治的勢力が育ち始めてくる。斐川地域では丘陵北縁に所在する重原古墳、神庭岩船山古墳、小丸子山古墳がその証である。平原古墳（全長50m余の前方後円墳と推定）出土の、南海産テングガイ製腕輪等の副葬品、組み合わせ式家形石棺は、この地と九州との繋がりを窺わせる。神庭岩船山古墳（推定長57m、前方後円墳）は、副葬品が散逸しているものの、舟形石棺は身の縁が印籠口式に加工された全長2.7mの見事なものである。町内最大の円墳である小丸子山古墳（直径32m、高さ5.3m）では、剣・甲・須恵器等が出土している。

群集墳と蛇行状鉄剣

中期の後半から後期の中頃にかけて、1辺（径）10m内外の古墳が10～30基群集して築造されてゆく。これらは前述の古墳のいわば下位に属する古墳群と考えられる。その1つ、結古墳群（方墳14基と円墳20基）の中の11号墳（方墳、疎塚）からは、国内の出土数が40本に満たない蛇行状鉄剣（全長53cm）が出土している。5世紀代の畿内、及び6世紀代の南九州に偏在していることから、九州出土のものは「中央から将来されたもの」⁹⁰⁻¹とする見解もある。呪術性を持ったものとする見方もある^{90-2,90-3}が、今後の研究が待たれる。このほか三絡の西古墳群のうち西1号墳（木棺直葬・調査後消滅）からは、茎にコノ字状の切り込みを持つ全長108cmの直刀が出土している⁹⁰。直刀は出雲西部で数例を数えるものの、1mを超えるものは近隣では後述の上塩冶薬山古墳に類例を見るのみである。

後期古墳の特徴

この地域の後期古墳を調べてみると、横穴墓が斐川町西側にあたる出西、上直江に集中しているのに対し、横穴式石室が全町域に渡って築かれていることがわかる。平野横穴群など、この地の横穴は、出雲西部の出雲市上塩冶横穴墓群と同じ奥行き長い妻入り構造を呈しているものが大半である。しかし横穴式石室のなかには、出雲東部の石棺式石室の影響を受けたと思われる石室構造をもつものがある。また、出西小丸1号墳の石室入口の閉塞石には、九州地方に起源をもつと考えられている円状の浮き彫りが施されているが、このような陽刻は宍道町から松江市にかけて6例が知られている⁹⁰。このように斐川町に所在する後期古墳が、出雲西部と出雲東部の古墳のいずれの特徴をも示していることは興味深い事実である。

出雲の大型古墳

ところでこうした斐川町の古墳の被葬者たちは、斐伊川左岸の地に盤踞する広汎な勢力、すなわち今市大念寺古墳、上塩冶薬山古墳、上塩冶地蔵山古墳等の被葬者と関係があったと思われる。6世紀後半から7世紀初めに築かれたこれらの古墳のなかでも、とりわけ前二者に取められた副葬品

は、金銅製腹（大念寺古墳）、歩揺付金銅製冠（築山古墳）など全国的にも屈指の優品揃いであり、その勢力の大きさを偲ぶことができる。大念寺古墳は墳長92mという県内最大の前方後円墳であるが、これに先行する大型古墳が出雲平野で発見されていない点、また大陸・朝鮮半島に起源を持つとされる「版築」状の盛土土木技術を墳丘築造に用いている点など、注目すべき特異な古墳といえよう。自然石を巧みに組み合わせた現存長12.8mの横穴式石室、長さ3.3mという日本最大の切石式家形石棺も特筆に値する。一方土壇治築山古墳は、最近の再調査で幅15mの周溝を伴う円墳であることが確認された。横穴式石室の現存長は14.6mにも及び、2つの家形石棺も併せ、切石による高度な技術を目の当たりにすることができる。副葬品は冠の他にも銀環・銅鈴・鉄鏃・埴り環頭大刀・円頭大刀・多くの馬具等豪華なものである。

5. 奈良時代

郡衙跡と寺院遺跡

奈良時代前半に書かれた『出雲国風土記』（733年）によれば、斐川町域に当たる地には健甕郷、漆治郷、出雲郷、河内郷、神戸郷、美談郷の名が見える。また、これらが属した出雲郡は、他に宇賀郷（平山市の一部）、伊努郷（出雲市の一部）、さらには杵築郷（大社町）をも含む広大なものであった。斐伊川は「出雲大川」と呼ばれ、「流域が肥沃で五穀が豊かに実り、川魚も豊富である」と記されている。この時代の官衙跡としては、出雲郡衙の一部に比定される出西の後谷遺跡があり、調査が行われている。郡衙政庁跡は残念ながら発見に至っていないが、墨書土器や大量の炭化米、さらには大きな礎石を伴った大規模遺構が検出された。これは東西150m、南北120mに及ぶ倉庫群の可能性があり、郡衙付属の正倉跡と考えられている。後谷遺跡に隣接した2遺跡のうち、稲城遺跡からは出雲市の神門寺廃寺出土のものと同様の水切瓦、軒丸瓦や呪符木簡が、小野遺跡からは墨書土器、円面硯、鵝尾、軒丸瓦が出土している¹⁴⁾。これらの出土状況から、両遺跡は寺院の可能性も高いとされる。また、仏経山の東南、標高200mの山頂に広がる天寺平廃寺では塔および金堂の基壇と礎石が確認され、奈良時代後期～平安時代初期にかけての関連遺物（軒丸瓦、軒平瓦、埴など）が多数発見されている¹⁵⁾。

その他の遺跡

この時期の建物跡については、他にも次々と見つかった。武部西遺跡では主軸を整然と南北に向けた掘立柱建物5棟が、また三ノ田遺跡では丘陵上から3間四方の総柱建物跡が発見されている¹⁶⁾。同様な立地条件では、杉沢Ⅲ遺跡がある。ここからは2間四方の総柱建物跡が検出され、近くのピットから内側に赤色顔料が塗られた須恵器の高杯が、杯に蓋をする状態で出土した。付近の谷から「三井」と書かれた墨書土器も出土していることから、『風土記』にも登場する御井神社の元宮の可能性も指摘されている。

6. 平安～戦国時代

大倉Ⅳ遺跡や前述した小野遺跡からは、平安時代の掘立柱建物跡が発見されている。なかでも大倉Ⅳ遺跡からは、桁行7間、梁間6間の大型の建物跡が検出されており注目される¹⁴⁾。また、西古墳群中で発見された土壇墓は平安末期～鎌倉期のもので、副葬されていた土器器群は県内における中世土器編年の重要資料となっている¹⁵⁾。

さて、斐川の地でも律令制の崩壊と荘園制の進展は平安期以降確実に進んでいった。中でも出雲大社や鵜淵寺といった寺社勢力の浸透は顕著であり、すでに平安末期には杵築大社（出雲大社）領が斐川町西部に成立していた¹⁰⁶。『北島家文書』（康元元年 1256）によれば、鳥屋郷・求院村・北島村・富郷・千家村などが杵築大社領として見える。この杵築大社国造家は南北朝期に2家に分かれるが、斐川の地で各々が領する千家、北島両村の名を取って氏の姓としている。一方、鵜淵寺も平安期に延暦寺の末寺となり、漆治郷（直江）は近江の日吉神社（延暦寺守護社）領となっている。南北朝期にはまず南朝、ついで北朝から当郷の知行を安堵され、次第に鵜淵寺の支配が確立していく。神仏習合思想の浸透の中で二者はさらに連携を強め、「杵築と鵜淵は二にして二ならず」¹⁰⁷と謳われたごとく、寺社勢力の双璧として密接な関係を築いていったのである。

信濃国桑原・武蔵国泉の両氏は承久の乱後の恩賞としてか、それぞれ建部郷（三給）、宇屋新宮（神庭）の地頭に補せられている。その後戦国期に入ると、尼子氏の重臣米原氏が高瀬山に高瀬城を築き、拠点とした。経久をはじめこの地は尼子氏との因縁浅からぬ土地で、高瀬城は尼子氏の支城中、屈指の山城であった。遺構には「大高瀬（甲の丸）」、「小高瀬（二の丸）」、「鉄砲立」などがあり、城主、家臣の居館跡とされる平地の御坪谷（小局谷）近くには、今も五日市、殿ヶ市などの地名を残し、往時を偲ばせる¹⁰⁸。米原綱寛はこの城に籠り、毛利勢の猛攻をよく凌ぐが、敵方の兵糧作戦に屈し、元亀2年（1571）開城を余儀なくされる¹⁰⁹。一方支配権を得た毛利輝元による徳国検地（天正19年 1591）は、寺社勢力には大打撃となる。この結果、鵜淵寺の漆治郷に対する支配は終焉し、現斐川町における杵築大社領はわずかに千家・北島郷を残すだけとなるのである。

7. 江戸時代

江戸初期、斐川の地は神門・出東・榎の3郡に分かれていたが、寛文年間（1661～1673）には「出雲郡」33か町村が分立したと見られる。また、遡って幕藩体制草創期の寛永15年（1638）、松江藩は千家・北島・富の3か村を含む2730石を杵築大社に寄進している。これら「社領3ヶ村」はやはり村内でも特別な地歩を占めていた。

土地にまつわり特筆すべきは、寛永12年（1635）の大洪水で斐伊川が流れを東に変え、穴道湖に注ぎ始めたことだった¹¹⁰。ここに沖積作用が進み、藩の「川邊」（新川開削）も相俟って新田開発が急速に進展することとなる。こうして現在の湖岸線に近い形が現れる¹¹¹のであるが、創り出された鏡川平野の未熟地（反新田）を熟田化させ、租税の増収を図ろうとする松江藩の熱意は、文政3年（1820）に書かれた農政書¹¹²にも如実に現れている。この地の作物としては米作のみならず、出雲国の特産物の最上位を占めた木綿も名高かった。また出西を中心とした生姜、新川土手でほろの栽培なども盛んに行われた。

8. 明治以降

斐伊川とその支流新川は、農業用水を提供する貴重な役割を果たしてきたが、十年に一度は大洪水をおこす荒れ川でもあった。大正12年（1923）には斐伊川水系の改修事業が始まり、その過程で新川は昭和14年（1939）廃川となった。跡地は戦時中海軍の飛行場用地にもなったが、現在は新川旧河道の東部が県営出雲空港として利用されるに至っている。

□古文獻にみるこの地域

○『**出雲国大祝職給歴名帳**』（正倉院文書・天平11年〈739〉）には、当時の出雲郡津治郷・河内郷・出雲郷などの村落構成が明示されている。本書の4遺跡がある斐川町東部は出雲郡健甕郷に属していた。この郷の名については、『**出雲国風土記**』（733年）に、以下のような興味深い記述がある。宇夜都辨命が峰に天降ったので、そこを宇夜の里といった、とした後「しかるに後に改めて健部と號する所以」は、景行天皇が「朕が御子、健命の御名を忘れじ」とのりたまひて、健部を定め給ひき」と記し、神門臣古禰を健部と定めたとし、「故、健部といふ」とある。天皇の命による名代の設置と地名起源の説き起こしという、異例ずくめの記述である。本報告書所収のⅡ遺跡の所在地は武部であり、「健部」姓を多く残す。また、所収4遺跡から日鏡の距離にも宇屋谷という地名を見ることが出来る。

○『**日本書紀**』の崇神紀には、出雲振根たちの極力争いの場として止屋の淵（塩治郷）が役場する。振根は自分が留守の間に、朝廷に神宝を献じてしまった弟飯入根を深く怨み、「頃者（このごろ）、止屋の淵に多に妻生ひたり。願はくは共に行きて見欲はし」と誘ひかけ、清らかな淵で共に沐浴した後、殺害してしまう。時代や人物の特定は困難ではあるが、往事出雲の中核勢力がこの界隈にいたことを窺わせる内容である。振根は入根を殺害した後、逆に朝廷から誅せられる。その結果、「出雲臣等、是の事に畏りて、大神を祭らずして間有り。」とところがその後丹波に住む小思が、出雲の御家について神慮りのように唱えたという不思議な事件が起こり、それを機に朝廷は出家区に再び大神を祭らせることとなる。出雲振根は神門臣古禰に比定される存在でもあるが⁽²⁾、崇神紀のこうした記述はこの地について考えるよすがを示してくれる⁽³⁾。

○「宇夜の里」が、当時入海（宍道湖）に面していたことは前述の通りであるが、『**新撰姓氏録**』（815年）にも、「新 出雲國宇夜江、捕獲之」（出雲國宇夜の江に詣りて、捕へて之を貢ぐ）と記されている。「之」とは、鶴（白鳥）のことであり、垂仁天皇の皇子磐津別がこの鳥を見て初めて言葉を発し、天皇は之を梶び、鶴の行方を探させたという記述に続く場面である。「出雲大神」の祟りが暗示され、「記紀」共に紙数を割くこの件は、読めいていて奥の深さを感じさせる⁽⁴⁾。なお『**日本書紀**』垂仁紀では上記の部分について「出雲に詣りて、捕獲へつ。」と記すのみである。

【註】

- (1) 『宍道町史【通史編上巻】』宍道町史編纂委員会 2001
- (2) 『鳥根県斐川町遺跡分布調査報告書』斐川町教育委員会 1992
- (3) 林 正久「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』第4号 鳥根県古代文化センター 1996
- (4) 『荒神谷遺跡発掘調査概報（2）』鳥根県教育委員会 1986
- (5) 『上ヶ谷遺跡発掘調査報告書』斐川町教育委員会 1998
- (6) 岩永省三『歴史発掘7 金属器登場』講談社 1997/『出雲神庭荒神谷遺跡』鳥根県教育委員会 1996
- (7) 『弥生時代のひかわ』斐川町教育委員会 1999
- (8) -1 田中 茂「地下式横穴出土の蛇行刻について」『日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨』日本考古学協会 1976
-2 宍道年弘「結11号墳出土の蛇行状鉄刻」『八雲立つ風土記の丘』No.73 鳥根県八雲立つ風土記の丘 1985
-3 田中 茂「南九州出土の蛇行刻」『宮崎県史研究』第2号 宮崎県 1968
- (9) 斐川町教育委員会「斐川の文化財 鉄製大刀出土 西1号墳」『広報ひかわ』斐川町 1987.10.21
- (10) 山本 清「山陰古墳文化の研究」報光社 1971
- (11) 『出雲郡家岡遺跡群第9次発掘調査概報』斐川町教育委員会 2001/『後谷遺跡第5次発掘調査概報』同 1997
- (12) 斐川町教育委員会「斐川の文化財 天寺平庵寺」『広報ひかわ』斐川町 1987.8.21 ただ、この地は郡跡とされる後谷遺跡からは東南に4キロの位置であるが、『風土記』には「郡家の正南十三里一百歩（約7キロ）」とあり、食い違いを残している。
- (13) 『三ノ田遺跡』斐川町教育委員会 1999
- (14) 『大倉IV遺跡 織田原I遺跡』斐川町教育委員会 1997
- (15) 川原和人・桑原真治「鳥根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢』第18集 九州古文化研究会 1987
- (16) 『日本歴史地名大系33 鳥根県の地名』平凡社 1995 その他平安～江戸期の土地所有に関する記述の多くは

これに負う。

- (17) 『出雲国 浮浪山跡遺跡』浮浪山跡遺跡 1997
- (18) 『日本城郭大系第14巻』新人物往来社 1980 なお、遺構の呼称については山根正明氏（松江市高校）より御教示を得た。
- (19) 『新修島根県史・通史編』臨川書店 1968／『斐川町史』斐川町史編纂委員会 1972
- (20) 『島根県歴史大年表』郷土出版社 2001／『しまね史記』読賣新聞社 1974 なお後述の川違は鉄穴流しによる川床の上昇を抑制する狙いもあった。特に天保3年（1832）から五年間を費やした川違は流路10kmにも及んだ。
- (21) 横田寿子「郷土地理教材としての築地松」『高知大学地理第4号』高知大学教育学部地理学研究室 1999 には、斐川町域をほぼ東西に二分する新田・本田の分布図・境界域が示されている。
- (22) 『神門・出雲・福徳郡反新田出精仕様書（日本農業全書9）』農山漁村文化協会 1978 審の訪問に応えた具申の書で、施肥から農家経営まで微細に亘る。
- (23) -1 高嶋弘志『出雲国造の成立と展開』『古代工権と交流7 出雲世界と古代の山陰』名著出版 1995
-2 井上光貞『国造制の成立』『井上光貞著作集』第4巻 岩波書店 1985（初出は『史学雑誌』60-11 山川出版社 1951）
これらの論文は森田啓久男（古代文化センター）の教示による。
- (24) 上記の著作集第3巻（1985）で井上は『出雲国大祝版絵巻名帳』（p10に既出）の健部郡での氏族構成を論じ、『風上記』の遺存地でもあるこの郷を服属地帯と捉え、「ここに氏族構成と、神宝の物語とがふれあっていることはたしか」（p268）であり、キズキ勢力（後出のカムドとはほぼ同義）は畿内と結んだオウ勢力に征討され、祭祀権の収奪が行われたとする。
大谷晃二「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター 1999 第7章第6節 大谷は出雲の東西で飾大刀の系統が明確に異なることから論を起し、物部氏と蘇我氏の対立、ひいては物部氏の滅亡がこの古墳のキ（「カムド」勢力）の衰亡の原因であると論じる。つまり「オウ」「カムド」両勢力とも畿内勢力と緊密な関係を持った中での盛衰と捉えている点、井上と立場を異にしている。
- (25) 菊池照夫『出雲国造神賀祠祭上儀礼の意義』『古代工権と交流7 出雲世界と古代の山陰』名著出版 1995 では、この白鳥献上譚は先に配した神宝献上譚と同じく、「天皇への靈威付与」という意味を持つとする。従来の「服属関係としての出雲対畿内」という見方への問題提起があり、興味深い。

参考文献

- 『島根県大百科事典上・下』山陰中央新報社 1982
- 坂本太郎他校注『日本古典文学大系 日本書紀』岩波書店 1965
- 秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風上記』岩波書店 1958
- 加藤義成『修訂 出雲風上記参究』今井書店 1992
- 西宮一民校注『新潮日本古典集成 古事記』新潮社 1979
- 佐伯有清『校訂 新撰姓氏録の研究』古川弘文館 1962
- 『古代出雲文化展』島根県教育委員会 1997
- 『斐川町文化財所在地名一覧表』斐川町教育委員会 2001
- 『後谷V遺跡』斐川町教育委員会 1996
- 『光神谷遺跡銅剣発掘調査概報』島根県教育委員会 1985
- 『石棺式石室の研究』山雲考古学研究会 1987
- 前島己基編著『古代出雲を歩く』山陰中央新報社 1997
- 山本 清福『風土記の考古学③ 出雲風上記の巻』同成社 1995

第3章 西Ⅰ遺跡の調査

第1節 調査の経過

西Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡の周辺は山陰自動車道・斐川インターチェンジ予定地となっており、調査対象地には西Ⅱ・Ⅲ遺跡の一部も含まれていた。しかし、確認調査の結果、西Ⅱ・Ⅲ遺跡では顕著な遺構・遺物は確認されなかったため、インターチェンジ予定地では西Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡が本調査の対象となった。

西Ⅰ遺跡は中国山地から派生する低丘陵の北側緩斜面に位置している。遺跡は谷川を挟んで東西に分かれるため、谷の西側をA区・B区とし、東側をC区・D区として調査を実施した。確認調査は4月25日～5月27日まで実施し、表土下で遺物包含層が確認された範囲について本調査を実施した。確認調査は川原和人、奥村昌子、横木尚文、松崎恵美子が担当した。

A区は立木伐採を実施した後、5月28日から本調査を開始し、10月24日に空撮を実施し、10月25日に現地調査を終了した。途中、10月14日には斐川町民を対象とした現地説明会を実施し77人の参加を得た。A区の調査面積は1,550㎡、B区は200㎡、C区は110㎡、D区は120㎡である。

A区の本調査は岩橋孝典、福場旗芳、植田寿子、露梨靖子が担当し、B・C・D区は大庭俊次、赤木努、植田寿子、糸賀伸文、伊藤悟郎が担当した。また、調査3係職員が随時応援にあたった。

第2節 A区の概要

A区は標高48～59mの北東に開けた斜面に位置するが、中央に南西から北東に下る埋没谷が入っており、周辺と比較すると傾斜の緩い緩斜面となっている。調査前の段階から地表向の各所に平坦面や小規模な土饅頭が確認され、集石も見られたことから段状遺構や石室を持つ古墳の存在が想定されていた。

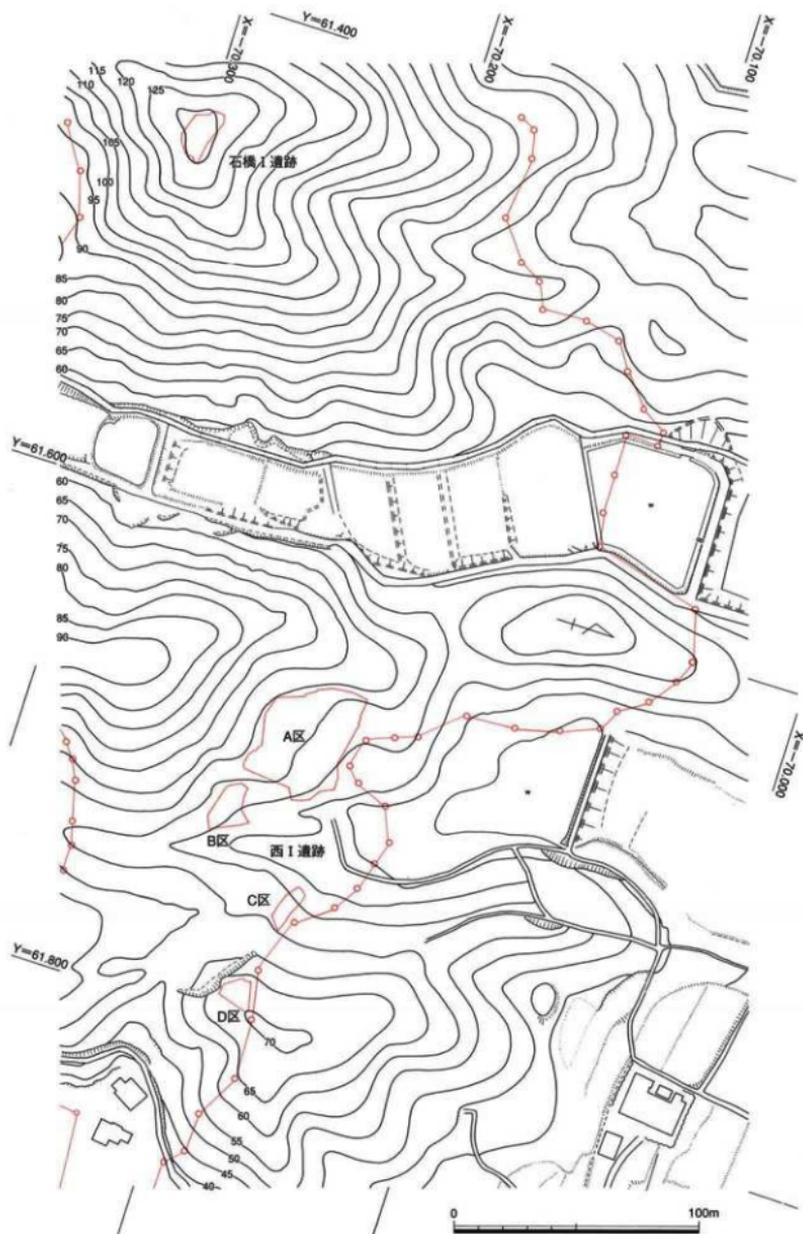
調査区の設定ではコンターラインに直交する大セクションベルトを2本設定し、最も西側の区画をA-1区、中央区画をA-2区、東側区画をA-3区とし、さらに各区を標高により上段・中段・下段・下段斜面の4段階に区分して大まかな区分けとした(第7図)。

基本的な土層は上から表土・暗黄褐色土層・地川となり、堆積厚は50～70cmであった。

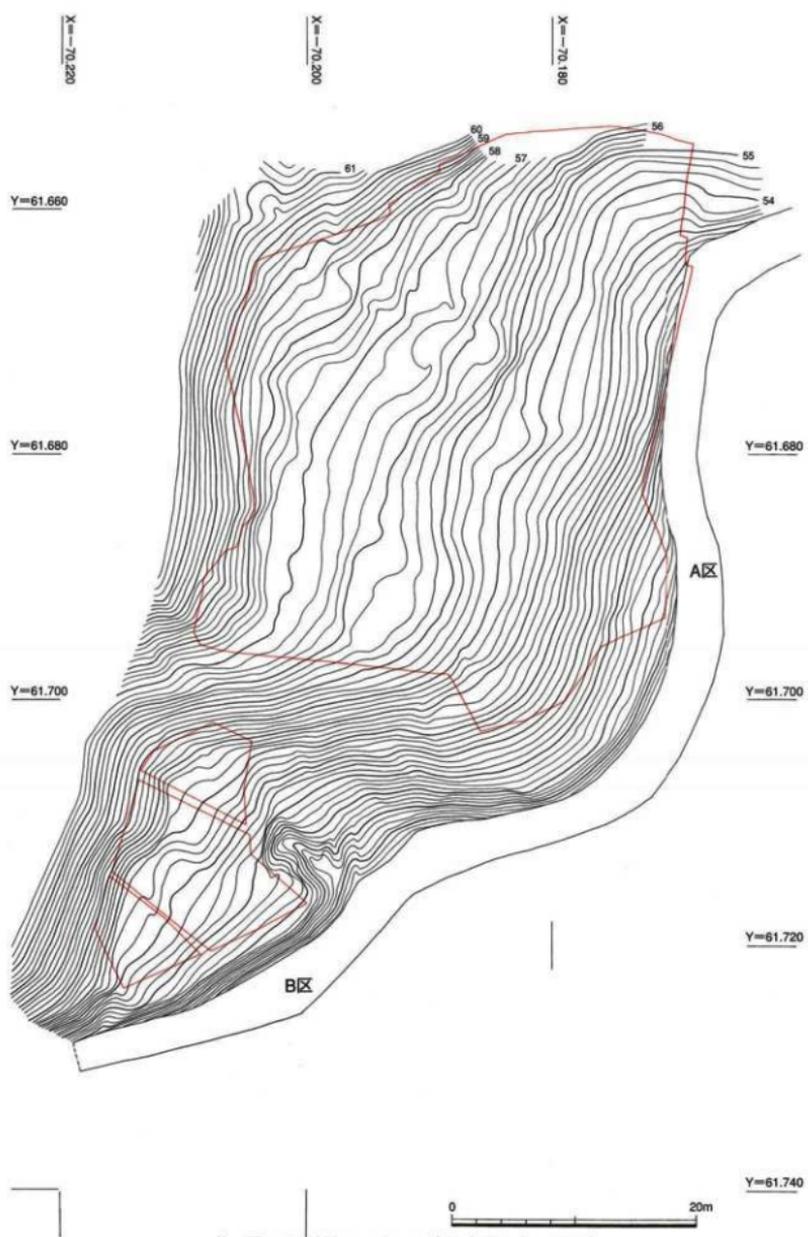
調査前から確認されていた土饅頭状のマウンドは、調査を進める過程で、土層の検討などから谷の傾斜変換点に堆積した土砂であることが判明した。そのため、当遺跡の性格は集落遺跡である可能性が強まり、竪穴建物・段状遺構・掘立柱建物の検出に努めた。

結果的に調査区内では2段にわたって段状遺構が確認されたが、調査対象地の北側にも平坦面が見られることから、実際には3段以上にわたる段状遺構が存在するものと考えられる。これらの段状平坦面に掘立柱建物等を連ねた6世紀末～7世紀初頭の集落跡が主な検出遺構であるが、遺構に伴わない8世紀後半～11世紀の遺物も一定量存在することから、奈良～平安時代においてもなんらかの人間活動があったものと考えられる。

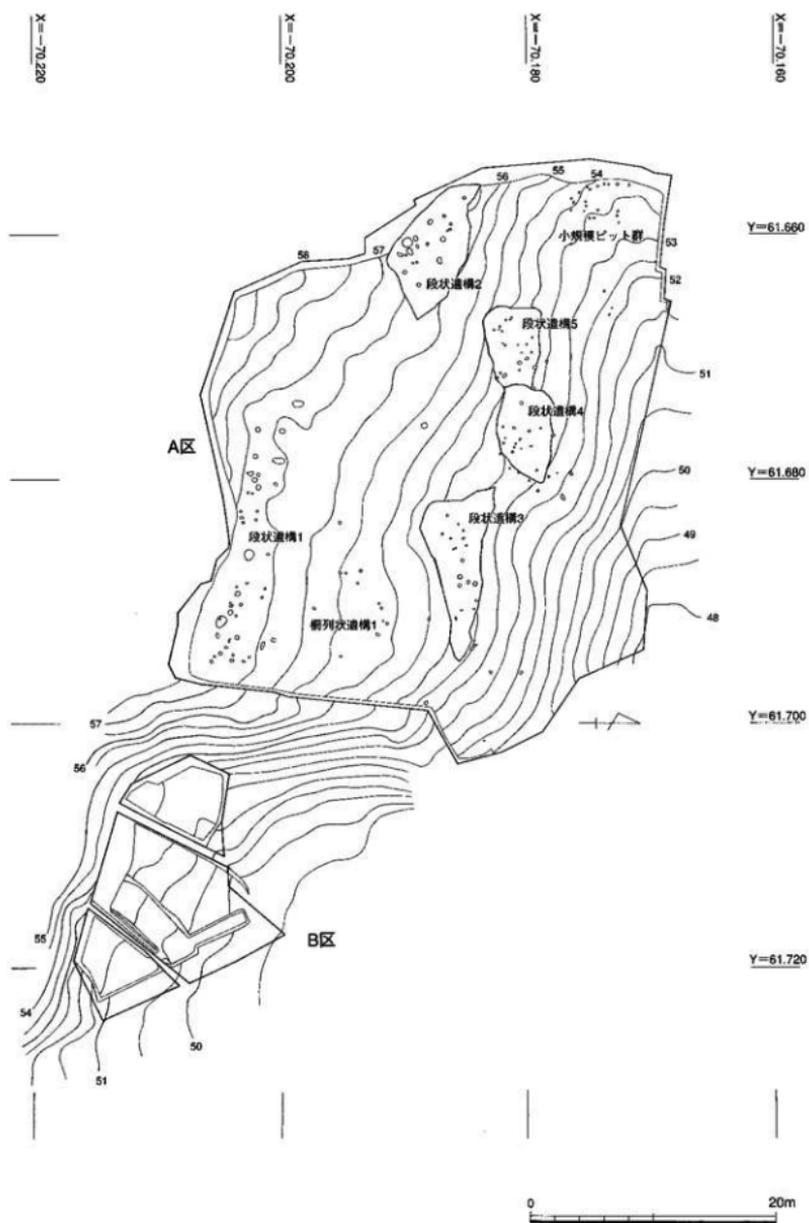
調査区より南側は急斜面となっており、頂上部などにもトレンチを設定したが遺構・遺物は確認できなかった。また、北側も上記の平坦面より北では急斜面となり遺構は確認できないことから、集落としては3000～4000㎡ほどの範囲に収まるものと考えられる。



第4図 西I遺跡・石橋I遺跡周辺図 (S=1/2,000)



第5図 西I遺跡A・B区 調査前地形図 (S=1/400)



第6図 西I遺跡A・B区 調査後地形図 (S=1/400)

第3表 西I遺跡 段状遺構1ピット計測表

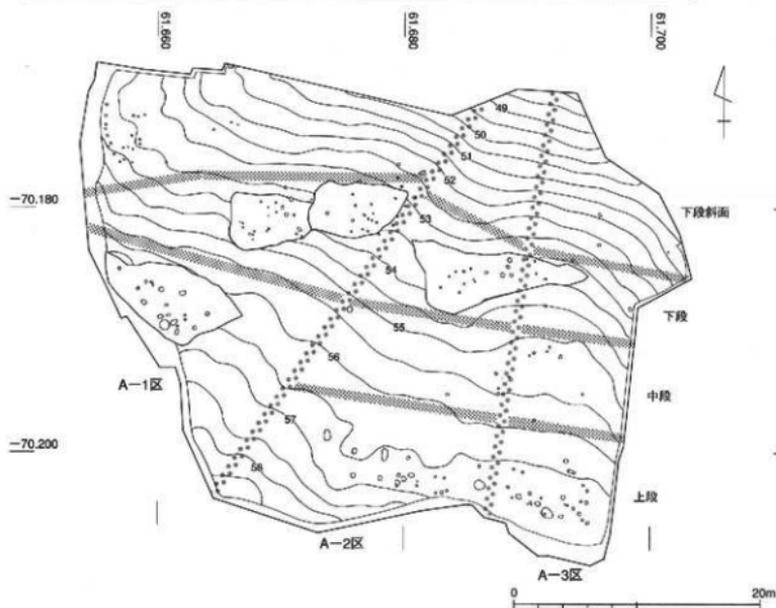
ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面積高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面積高(m)
P1	P18	0.78	0.72	0.34	56.62	P24	P23	0.19	0.19	0.13	56.71
P2	P8	0.49	0.41	0.33	56.6	P25	P39	0.3	0.22	0.32	56.44
P3	P2	0.48	0.41	0.25	56.55	P26	P25	0.26	0.26	0.34	56.29
P4	P4	0.27	0.25	0.23	56.54	P27	P26	0.25	0.2	0.34	56.27
P5	P9	0.46	0.39	0.28	56.57	P28	P41	0.29	0.23		
P6	P1	0.37	0.35	0.27	56.59	P29	P42	0.37	0.23		
P7	P3	0.33	0.31	0.31	56.58	P30	P43	0.35	0.24		
P8	P5	0.29	0.25	0.23	56.58	P31	P44	0.24	0.18		
P9	P6	0.17	0.14	0.16	56.51	P32	P46	0.29	0.23		
P10	P7	0.26	0.26	0.26	56.45	P33	P45	0.22	0.16		
P11	P15	0.36	0.19	0.1	56.63	P34	P27	0.21	0.16	0.26	56.31
P12	P16	0.18	0.15	0.08	56.75	P35	P28	0.28	0.2	0.18	56.42
P13	P17	0.2	0.17	0.08	56.75	P36	P37	0.29	0.19	0.15	56.54
P14	P10	0.27	0.24	0.18	56.75	P37	P38	0.19	0.13	0.14	56.53
P15	P11	0.38	0.41	0.46	56.45	P38	P29	0.47	0.36	0.15	56.48
P16	P12	0.3	0.25	0.16	56.7	P39	P33	0.33	0.33	0.22	56.43
P17	P21	0.39	0.2	0.12	56.79	P40	P31	0.6	0.43	0.31	56.57
P18	P22	0.19	0.17	0.17	56.74	P41(壁敷2-P1)	P40	0.38	0.46	0.14	56.32
P19	P13	0.31	0.28	0.21	56.2	P42(壁敷2-P2)	P35	0.5	0.5	0.3	56.19
P20	P14	0.55	0.4	0.23	56.55	P43(壁敷2-P3)	P30	0.41	0.32	0.21	56.32
P21	P19	0.33	0.16	0.24	56.09	P44(壁敷2-P4)	P36	0.43	0.43	0.28	56.12
P22	P20	0.28	0.19	0.11	56.09	P45(壁敷2-P5)	P34	0.45	0.41	0.35	56.4
P23	P24	0.21	0.17	0.13	56.75	P46(壁敷2-P6)	P32	0.49	0.45	0.25	56.39

第4表 西I遺跡 A-3区 掘立柱建物1計測表

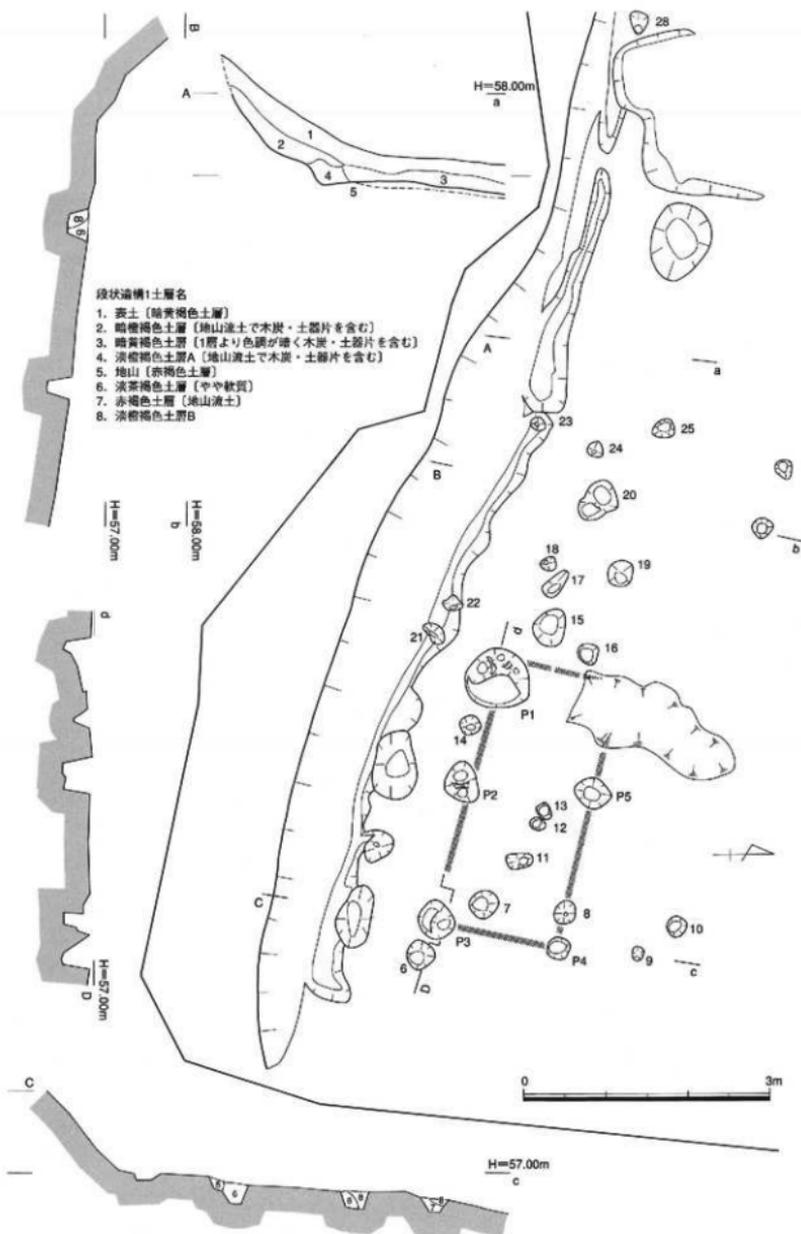
規模(m)	桁行2間×梁間1間 (3.17×1.4) 面積4.44㎡				
柱間距離(m)	P1-P2	P2-P3	P3-P4	P4-P5	P2-P5
	1.55	1.62	1.4	1.9	1.62

第5表 西I遺跡 A-2区 掘立柱建物2計測表

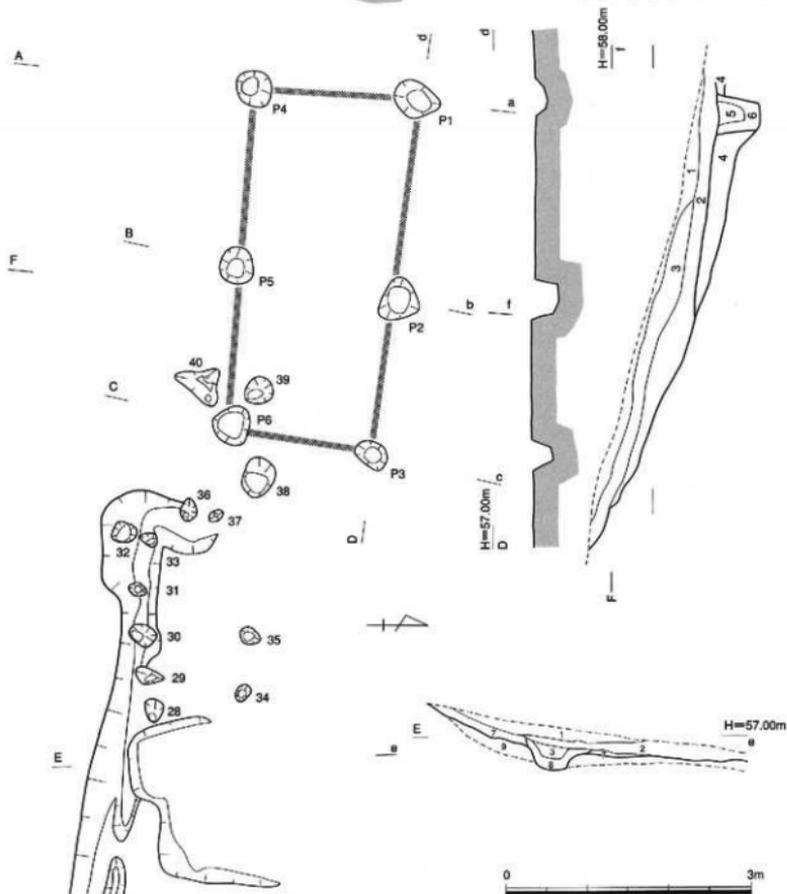
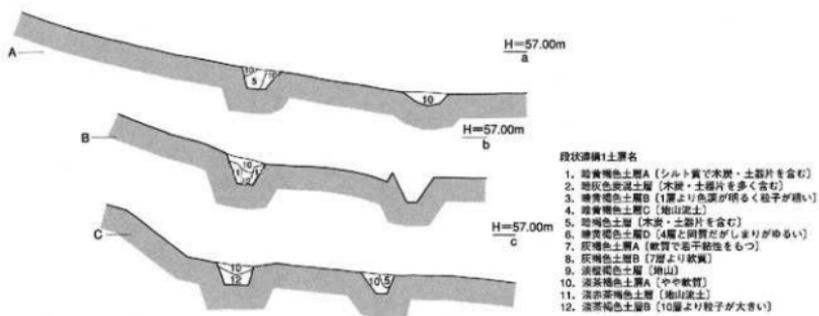
規模(m)	桁行2間×梁間1間 (4.34×2.1) 面積9.114㎡						
柱間距離(m)	P1-P2	P2-P3	P4-P5	P5-P6	P1-P4	P2-P5	P3-P6
	2.4	1.9	2.2	1.92	2.1	2	1.8



第7図 西I遺跡 A区 区断面(S=1/400)



第8図 西I遺跡A-3区 段状遺構1東側・掘立柱建物1実測図 (S=1/60)



第9図 西I遺跡A-2区 段状遺構1西側・掘立柱建物2実測図 (S=1/60)

段状遺構 1

段状遺構 1 の確認床面は標高 56.50～56.90m である。段の掘削は地形に影響されているため、遺構の軸線は N-71°-W、規模は調査区の東端から西北西に向かって 22m の長さを持つ。背後には排水溝が巡っているが、掘立柱建物 2 までは排水溝がおよんでいない。幅については、段状遺構の床面から斜面に移り変わる明確な傾斜変換点を求めることが困難なため、明示し難いが約 4m 程度と考えられる。

段状遺構 1 は排水溝の形状から 3 ブロック程度の空間に分かれるが、東端の掘立柱建物 1 付近では背後を全長 5.4m の排水溝が掘削されている。また、その西側に連続して長さ 7.6m の排水溝があるが、その前面には明確な建物痕跡は確認できなかった。

掘立柱建物 1

段状遺構 1 内の東端に立地する桁行 2 間×梁間 1 間の小規模な掘立柱建物跡である。建物の軸線は N-77°-W であり、段状遺構のカットラインと平行になっている。柱穴十層断面の観察からも柱痕は確認できないため、建物廃絶時に柱も抜かれているものと考えられる。遺構確認面での柱穴掘形は不整形であり、地山の岩盤を掘削して掘り込んでいる。

掘立柱建物 1 周辺では遺物の出土量が少なく（第 18 表）、廃絶時に片付けが行われた可能性が高い。須恵器杯蓋型式は出雲 4 期である¹⁾。

掘立柱建物 2

段状遺構 1 の西端に立地する桁行 2 間×梁間 1 間の小規模な掘立柱建物跡である。建物の軸線は N-83°-W である。建物の背後には地山のカットが及んでおらず、排水溝も付帯していない。遺構確認面での柱穴掘形は不整形・略円形であり、堆積土中に柱穴を掘り込み、岩盤までは達していない。柱穴確認面では柱痕は確認できなかったが、P5 では土層断面で柱痕跡が確認された。その他の柱穴では柱痕が確認できなかった。

掘立柱建物 2 周辺では比較的遺物量が多く（第 17 表）、三輪玉や金属製品なども残されていたことから、建物廃絶時には道具類は放置された可能性が考えられる。また、移動式甕・土師器甕など煮沸具も多く出土していることから、掘立柱建物 2 付近で炊飯行為が行われたと考えられる。

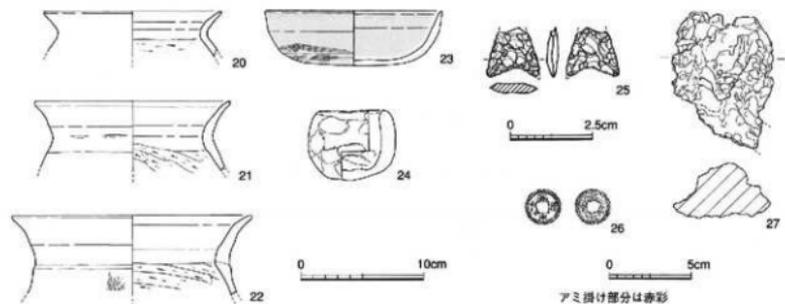
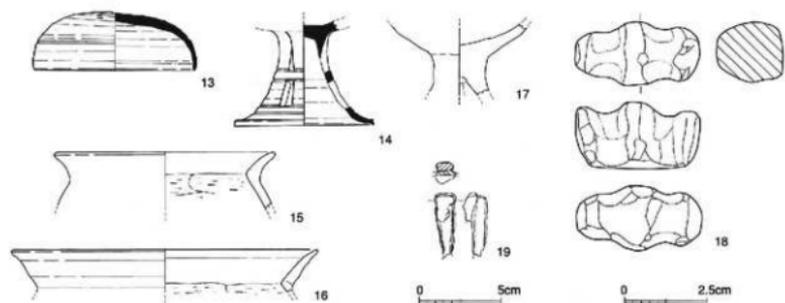
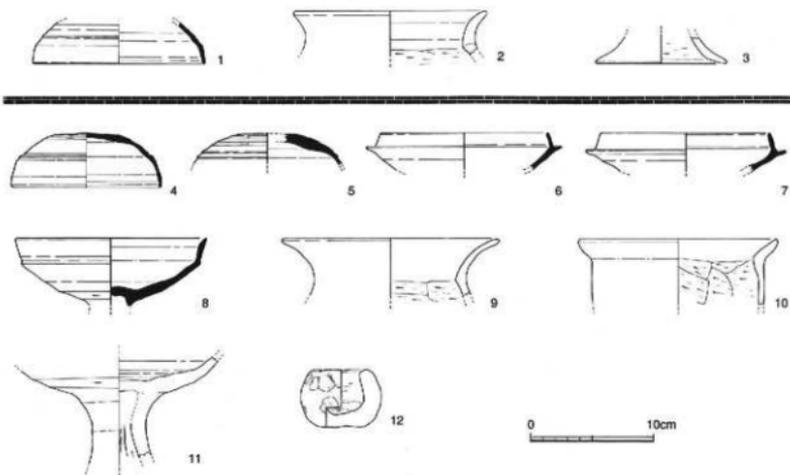
段状遺構 1（掘立柱建物 1・2）の遺物

須恵器は杯蓋・杯身・高杯・小型壺・提瓶・大甕などが出土しており、いずれも出雲 4・5 期に比定されるものである。土師器も移動式甕・甌・甕などの煮沸具以外に、高杯・甌など供膳形態の土器が出土している。

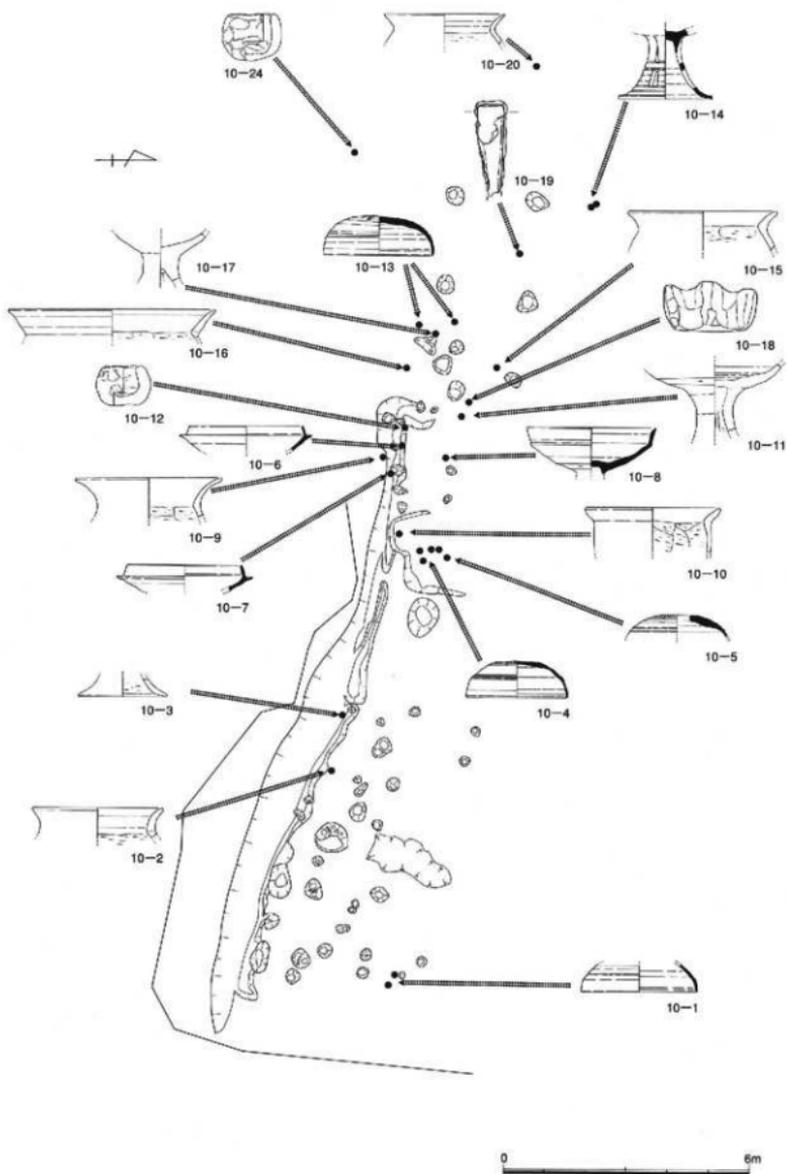
また、手捏ね土器や赤彩の施された土師器の高杯・甌・甕なども確認されており、祭祀的な一面も認められる。

掘立柱建物 2 東から発見された水晶製三輪玉は、東出雲町島田池 1 区 2 号横穴墓²⁾、玉作遺跡である玉湯町平床Ⅱ遺跡³⁾、同町堂床遺跡⁴⁾、松江市福富Ⅰ遺跡⁵⁾ など県内でも 5 遺跡 11 例目となるもので、一般的な集落遺跡からの出土は県内では初例といえる。当初から単品で保有されていたものか不明であるが、玉類の所有層を検討する上でも貴重な資料といえよう。

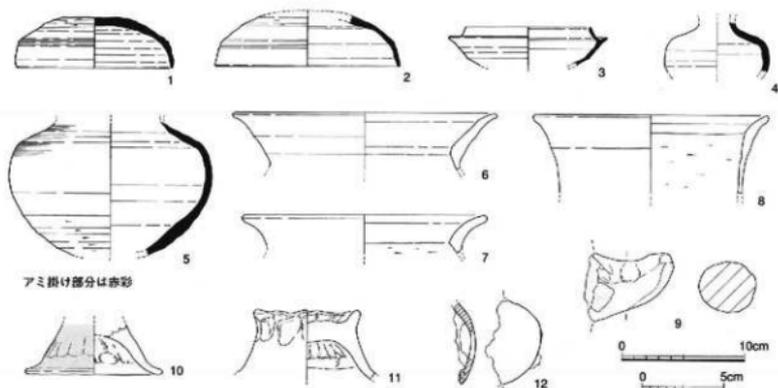
段状遺構 1 西端からは鍛冶操業に起因すると考えられる椀形滓が 1 点確認されているが、鍛冶炉と考えられる被熱土坑などは周辺で確認されておらず、他に鉄滓や炉壁なども未発見のため、段状遺構 1 で鍛冶操業が行われた可能性にはわかに首肯できない。



第10図 西I遺跡A区 段状遺構1出土物実測図 (S=土器1/4・金属製品1/3・石製品2/3)



第11図 西1遺跡A区 段状遺構1遺物出土状況図 (S=1/120・土器1/6・石製品 鉄製品1/2)



第12図 西1遺跡A区 段状遺構1下方向包層層出土遺物実測図 (S=土器1/4・鉄製品1/3)

第6表 西1遺跡A-3区 段状遺構1掘立柱建物1付近出土遺物観察表

探検番号	部 種	寸法 (cm)			土 質	焼 成	調 査	色 調	残存度	備 考
		高さ	口径	底径						
1006-1	土器部 杯蓋A4	残高	3.1	13.7	黄 (1.5m以下の石灰等を 含む)	良好	体部: 黒鉛ヨコナデ 外周部: 黒鉛ヘラケズリ	内・外面: 淡灰色 外周: 淡灰色-淡 灰色	1/3	出土4期 TK239
1006-2	土器部 早期口縁部	残高	3.7	13.4	やや黄 (1.5m以下の石 灰・長石を含む)	やや良好	口縁部: ヨコナデ 内面: ヨコ方向のヘラケズリ	内周: 淡灰色 外・外面: 淡褐色	口縁部1/6	
1006-3	土器部 高杯	残高	2.2	10.4	やや黄 (2.5m以下の石 灰・長石を多く含む)	やや不良	全体的に磨滅が強く調査不明 跡部内面: ヨコ方向のヘラケズ リ?	内・外面: 淡灰色 外周: 淡褐色	胴部1/5	

第7表 西1遺跡A区 段状遺構1中央部出土遺物観察表 (太字数字は確定値: 明朝体数字は復元値)

探検番号	部 種	寸法 (cm)			土 質	焼 成	調 査	色 調	残存度	備 考
		高さ	口径	底径						
1006-4	土器部 杯蓋A4	残高	4.5	11.8	普通 (2.5m以下の石灰等 を含む)	良好	天舟部: 丁寧な磨滅ヘラケズリ 大舟部内面: 黒鉛ヨコナデ後、不 定方向ナデ 体部: 黒鉛ヨコナデ	内・外面: 淡灰色 外周: 明灰色	2/3	出土4期 TK239 器壁が厚 い
1006-5	土器部 杯蓋A4	残高	2.5		黄 (1.5m以下の石灰等を 含む)	良好	天舟部: 浅くて薄な磨滅ヘラケズ リ 大舟部内面: 黒鉛ヨコナデ後、不 定方向ナデ 体部: 黒鉛ヨコナデ	内周: 明灰色 外周: 黄灰色 胴部: 淡灰色	大舟部1/4	出土4期 TK239
1006-6	土器部 杯蓋A4	残高	3.1	13.4	黄 (0.5m以下の石灰等 を含む)	良好	天舟部: 黒鉛ヨコナデ 外周: 茶褐色の磨滅あり	内周: 淡灰色 外周: 淡灰色 胴部: 灰白色	口縁部1/5	出土4期 TK239
1006-7	土器部 杯身A4	残高	3.1	13.5	黄 (1.5m以下の石灰等を 含む)	良好	口縁部: 黒鉛ヨコナデ	全面: 淡青灰色	口縁部1/6	出土4期 TK239
1006-8	土器部 杯身A4	残高	5.5	13.3	普通 (1.5m以下の石灰・ 長石・黒色灰を含む)	不良	杯蓋下部: 黒鉛ヘラケズリ 杯身内面: 磨滅の認め難い	全面: 灰白色	杯蓋部	
1006-9	土器部 早期口縁部	残高	4.9	17.0	やや黄 (1.5m以下の石灰・ 長石・金雲母を含む)	やや良好	口縁部: ヨコナデ 胴部内面: 磨滅の認め難い	内周: 淡青灰色 外・外面: 淡灰色	口縁部1/6	
1006-10	土器部 早期口縁部	残高	5.1	13.8	粗 (3.5m以下の石灰・長 石等を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナデ 胴部内面: 磨滅の認め難い	全面: 淡青灰色	口縁部1/5	
1006-11	土器部 土器部高杯	残高	8.9		普通 (1.5m以下の石灰・ 長石・黒色灰・赤色灰を 含む)	良好	体部: 黒鉛ヘラケズリ 磨滅: 黒鉛ヨコナデ 杯蓋内面: 黒鉛ヨコナデ	内・外面: 明灰色 胴部: 淡褐色	杯蓋・口縁 部は欠損	
1006-12	土器部 手揉ね土器	残高	5.7	3.6	やや黄 (1.5m以下の石 灰・長石を含む)	やや良好	外周・口縁部内面: 磨滅の認め 難いによるナデ 内面: ユビナデ	内周: 黄褐色 外周: 黄褐色-暗 褐色 胴部: 黄褐色	2/3	

第8表 西1遺跡A-2区 段状遺構1掘立柱建物2付近出土遺物観察表

(太字数字は確定値: 明朝体数字は復元値)

探検番号	部 種	寸法 (cm)			土 質	焼 成	調 査	色 調	残存度	備 考
		高さ	口径	底径						
1006-13	土器部 杯蓋A4	残高	4.8	12.8	黄 (0.5m以下の石灰等 を含む)	良好	大舟部: 黒鉛ヘラケズリ 内面天舟部: 黒鉛ヨコナデ後、不 定方向ナデ 体部: 黒鉛ヨコナデ	内・外面: 明灰色 外周: 淡灰色-淡 灰色	3/4	出土4期 TK239
1006-14	土器部 高杯	残高	8.5	11.2	軟弱 (0.5m以下の石灰 を含む)	良好	体部内面: 黒鉛ヨコナデ後、不定 方向ナデ 跡部: 黒鉛ヨコナデ	内・外面: 黄褐色 外周: 灰白色	胴部1/2	出土5期 TK237
1006-15	土器部 早期口縁部	残高	4.8	17.5	粗 (3.5m以下の石灰・長 石等を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナデ 胴部内面: 磨滅の認め難い	内・外面: 淡青灰色 外周: 淡褐色	口縁部1/6	
1006-16	土器部 早期口縁部	残高	3.6	24.4	やや黄 (2.5m以下の石灰 ・金雲母を多く含む)	やや良好	口縁部: ヨコナデ 胴部内面: ヨコ方向のヘラケズリ	全面: 淡褐色	口縁部1/6	
1006-17	土器部 高杯	残高	6.0		普通 (1.5m以下の石灰・ 長石・赤色灰を多く含 む)	やや良好	胴部内面: 磨滅の認め難い 体部・胴部: ヨコナデ 跡部底面: ヘラケズリによる粗い ヨコ方向のケズリ	内周: 黄褐色 外周: 黄褐色 胴部: 灰褐色	杯蓋部	

第9表 西I遺跡A-2区 段状遺構1掘立柱建物2付近出土土製品観察表

(太字数字は確定値；明朝体数字は復元値)

探検番号	種別	寸法 (cm)			石 材	重量	特 徴	色 調	残存度	備 考
		全長	最大巾	高さ						
1006-18	土製瓦	3.76	1.906	1.965	水石	20.50g		平造形	ほぼ正形	

第10表 西I遺跡A-2区 段状遺構1掘立柱建物2付近出土鉄製品観察表

探検番号	種別	寸法 (cm)			残存度	備 考
		全長	最大巾	高さ		
1006-19	不明鉄製品	残長	3.3	0.9		

第11表 西I遺跡A区 段状遺構1西側出土遺物観察表 (太字数字は確定値；明朝体数字は復元値)

探検番号	器 種	寸法 (cm)			胎 土	焼 成	調 整	色 調	残存度	備 考
		器高	口径	底径						
1006-20	土製鉢 黒縄口縁式	残高	3.8	14.1	やや粗 (2mm以下の石灰・灰石等を多く含む)	やや良好	内縁部：ロコナテ打痕 内底：ヨコ方向のヘラズリ	内面：淡褐色 外面：淡灰褐色 新底：淡褐色	口縁部1/4	
1006-21	土製鉢 平縁口縁式	残高	5.8	15.7	やや粗 (2mm以下の石灰・灰石等をやや多く含む)	普通	内縁部：ロコナテ 調整：やや強いロコナテ 打痕；ナゲテ 調整内面：ヨコ方向のヘラズリ	内面：軽褐色向 外面：淡褐色 新底：淡褐色-黒 褐色	口縁部1/2	
1006-22	土製鉢 黒縄口縁式	残高	6.6	18.3	やや粗 (2mm以下の石灰・灰石等を多く含む)	普通	内縁部：ヨコナテ 調整：やや強いロコナテ 打痕；6.6cm/27.4cmヘラズリ 調整内面：ヨコ方向のヘラズリ	内：黒褐色；底面淡褐色 外面：淡褐色	口縁部4/5	
1006-23	土製鉢 赤糸刷	4.5	14.2	7.8	やや粗 (2mm以下の石灰・灰石；赤土等を多く含む)	やや良好	内縁部：ロコナテ 調整：やや強いロコナテ 打痕；ナゲテ	内：赤褐色 外面：淡褐色	1/3	
1006-24	土製鉢 赤糸刷	5.15	5		やや粗 (2mm以下の石灰・灰石等を多く含む)	やや良好	外面：ユビナテ 調整；ナゲテ	外面：淡褐色 内面：淡褐色	定形	

第12表 西I遺跡A区 段状遺構1西側出土石器観察表

探検番号	種別	寸法 (cm)			石 材	重量	残存度	備 考
		全長	最大巾	厚さ				
1006-25	内面磨面 二角形器	1.55	1.62	0.315	黒燐石	0.67g		先端は欠損

第13表 西I遺跡A区 段状遺構1西側出土銭貨観察表

探検番号	種別	寸法 (cm)			残存度	備 考
		径	内径	孔		
1006-26	裏面磨面 一角形器	2.15	1.75	0.62	定形	新貨水

第14表 西I遺跡A区 段状遺構1西側出土鉄滓観察表

探検番号	器 種	寸法 (cm)		特 徴	残存度	備 考
		幅	厚さ			
1006-27	輪形鉄	6.2×8.3	4.3	メタル質なし		

第15表 西I遺跡A-2・3区 段状遺構1下方包含層出土遺物観察表 (太字数字は確定値；明朝体数字は復元値)

探検番号	器 種	寸法 (cm)			胎 土	焼 成	調 整	色 調	残存度	備 考
		器高	口径	底径						
1206-1	磁器鉢 赤糸 A 1	4.2	12.5		骨 (1mm以下の石灰を含む)	良好	尖角部：細粒ヘラズリ 内面中央部：細粒ロコナテ状、不定方向ナゲテ 底面：細粒ロコナテ	内：黒褐色 外面：暗褐色	95%	出雲 4号 TK300
1206-2	磁器鉢 赤糸 A 3a	測定	4.6	14.9	骨 0.5mm以下の石灰・灰石等を多く含む	良好	水石部：目録ヘラズリ 穴縁内面：細粒ロコナテ後、不定方向ナゲテ 底面：細粒ロコナテ	内：黒褐色	1/6	出雲 3号 TK42
1206-3	磁器鉢 赤糸 A 5	残高	3.2	10.0	新産 (0.5mm以下の石灰をわずかに含む)	良好	調整：細粒ロコナテ	内：黒褐色；底面淡褐色 外面：淡褐色	口縁部1/6	出雲 4号 TK300
1206-4	磁器鉢 赤糸 A 5	残高	4.2		骨 (0.3mm以下の石灰をわずかに含む)	良好	調整：細粒ロコナテ	内：黒褐色 外面：暗褐色	胴部1/6	
1206-5	磁器鉢 赤糸 A 5?	残高	11.0		やや粗 (1.5mm以下の石灰・灰石等を多く含む)	良好程度	調整内面：8.5cm/26.5cmナゲテ 調整中環：細粒ロコナテ 外底：細粒ヘラズリ 内面：細粒ロコナテ	内面：黒褐色 外面：暗褐色 新底：淡褐色	胴部1/3	
1206-6	土製鉢 赤糸 A 2	残高	4.7	21.0	やや粗 (2mm以下の石灰・灰石；赤土等を多く含む)	やや不良	内縁部：ロコナテ 調整：調整のための調整不明	内面：赤褐色 外面：淡褐色 新底：淡褐色	口縁部1/6	
1206-7	土製鉢 赤糸 A 2	残高	3.2	19.3	やや粗 (2mm以下の石灰・灰石等を多く含む)	普通	内縁部：ロコナテ 調整内面：ヨコ方向のヘラズリ	外面：淡褐色 新底：淡褐色	口縁部1/3	
1206-8	土製鉢 赤糸 A 2	残高	6.4	18.7	やや粗 (1.5mm以下の石灰・灰石等を多く含む)	やや良好	口縁部：体径；ロコナテ 調整内面；ヘラズリ後、ナゲテ	外面：黒い砂状色	口縁部1/6	
1206-9	土製鉢 赤糸 A 2	残高	4.1	10.5	やや粗 (2mm以下の石灰・灰石；赤土等を多く含む)	やや良好	調整：ナゲテ調整	内：赤褐色 外面：淡褐色 新底：淡褐色	底下のA	
1206-10	土製鉢 赤糸 A 2	残高	4.1	10.5	やや粗 (1.5mm以下の石灰・灰石等を多く含む)	やや良好	調整：ユビナテ 調整；ロコナテ 調整内面；ユビナテ	内面：淡褐色 外面：淡褐色 新底：淡褐色	胴部1/5	外周赤部
1206-11	土製鉢 赤糸 A 2	残高	5.7	8.2	やや粗 (2mm以下の石灰・灰石；赤土等を多く含む)	やや良好	調整：ユビナテ 調整；ユビナテ 調整内面；ユビナテ	内面：淡褐色 外面：淡褐色 新底：淡褐色	1/2	

第16表 西I遺跡A-2・3区 中段包含層出土鉄製品観察表

探検番号	器 種	寸法 (cm)			残存度	備 考
		長	巾	厚		
1206-12	不明鉄製品	残長	5.2	3.5	1/2?	

第17表 西1遺跡 A-2区 段状遺構1 (掘立柱建物2付近) 出土遺物構成表

種別	器種	現 状 と 数 量					
		輪部	杯部	脚部	口縁部	踵部	
土師器	高杯	1	1	1		2	
	赤彩高杯				1	1	
	甌	1			1		
	赤彩甌		2				
	甕	2	19	21	16	42	
	移動式甕			2			
	平型土器	1	1				
	杯蓋	1	5	2	1		
	杯身	1	6	3	1		
	高杯			1	1	2	
須恵器	小型壺	1					
	椀	1	1	1	1		
	大壺					2	
	下瓶	1					
	煎釜	1					
	鉄製品	1					
	不明鉄製品	1					

第18表 西1遺跡 A-3区 段状遺構1 (掘立柱建物1付近) 出土遺物構成表

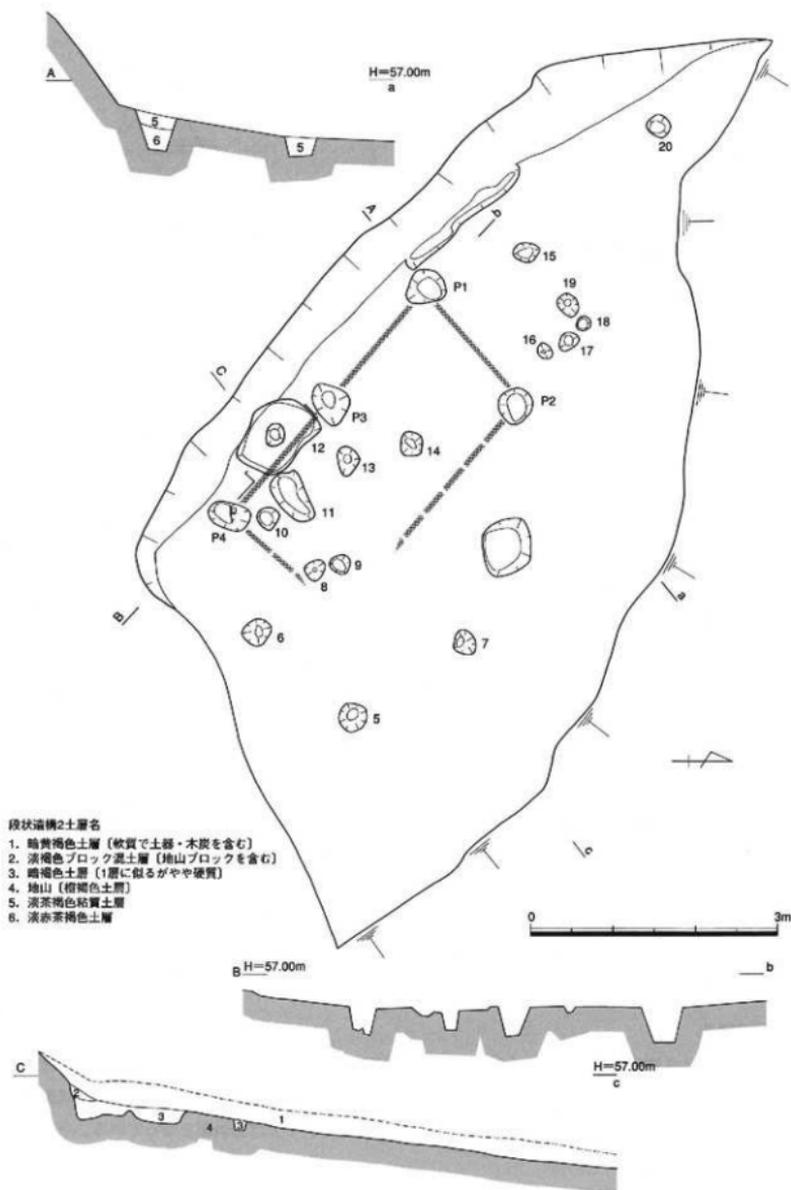
種別	器種	現 状 と 数 量					
		口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	椀部		
須恵器	杯蓋	1					
	大壺	1					
土師器	高杯	3	1		1	1	1
	甕	2					
	甌						
	赤彩甌	1					
	甌						
	甌						

第19表 西1遺跡 A-1区 段状遺構2 ビット計測表

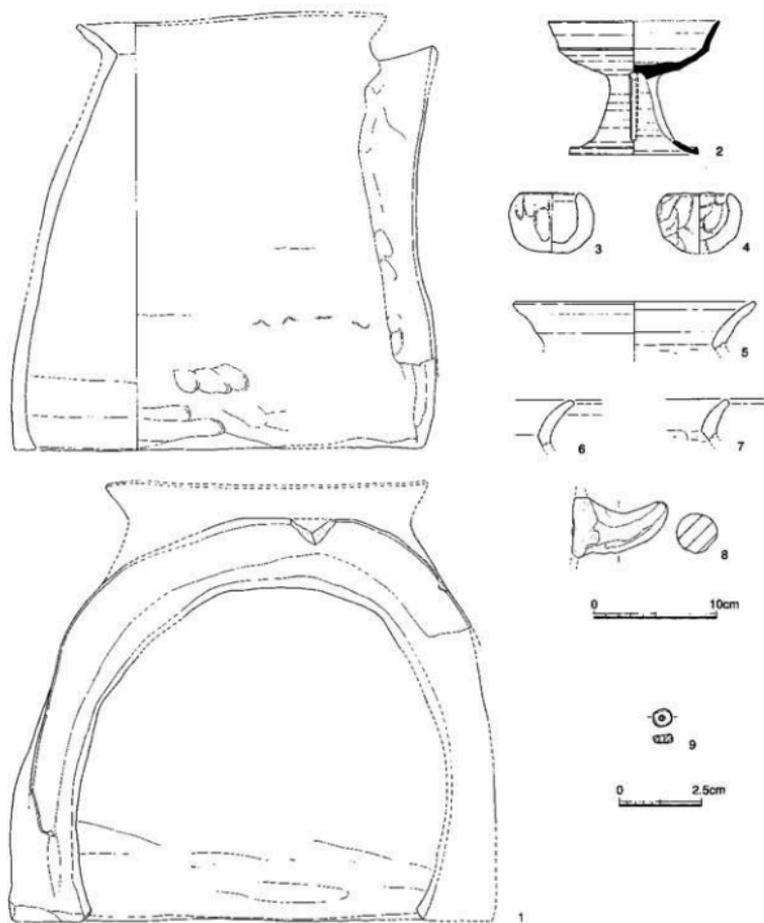
ビット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	表面積(m ²)	ビット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面積高(m)
P1	P9	0.49	0.47	0.41	56.24	P11	P4	0.67	0.4	0.11	56.41
P2	P10	0.47	0.42	0.22	56.07	P12	P20	0.97	0.7	0.22	56.29
P3	P5	0.36	0.31	0.3	56.29	P13	P6	0.35	0.25	0.11	56.46
P4	P1	0.49	0.31	0.31	56.32	P14	P8	0.29	0.25	0.15	56.34
P5	P7	0.36	0.35	0.12	56.29	P15	0.32	0.25	0.15	56.41	
P6	P2	0.34	0.29	0.08	56.42	P16	P11	0.22	0.17	0.15	56.2
P7	P19	0.32	0.27	0.06	56.18	P17	P12	0.25	0.21	0.14	56.18
P8	P3	0.28	0.24	0.14	56.36	P18	P16	0.19	0.18	0.05	56.3
P9	P18	0.25	0.23	0.13	56.33	P19	P13	0.31	0.22	0.2	56.19
P10	P17	0.28	0.28	0.17	56.38	P20	P14	0.3	0.28	0.12	56.47

第20表 西1遺跡 A-1区 段状遺構2 掘立柱建物3 計測表

規模(m)	桁行2間×梁間1間 (3.61×1.77) 面積6.39m ²		
柱間距離(m)	P1-P3	P3-P4	P1-P2
	1.83	1.78	1.77



第13図 西I遺跡A-1区 段状遺構2・掘立柱建物3実測図 (S=1/60)



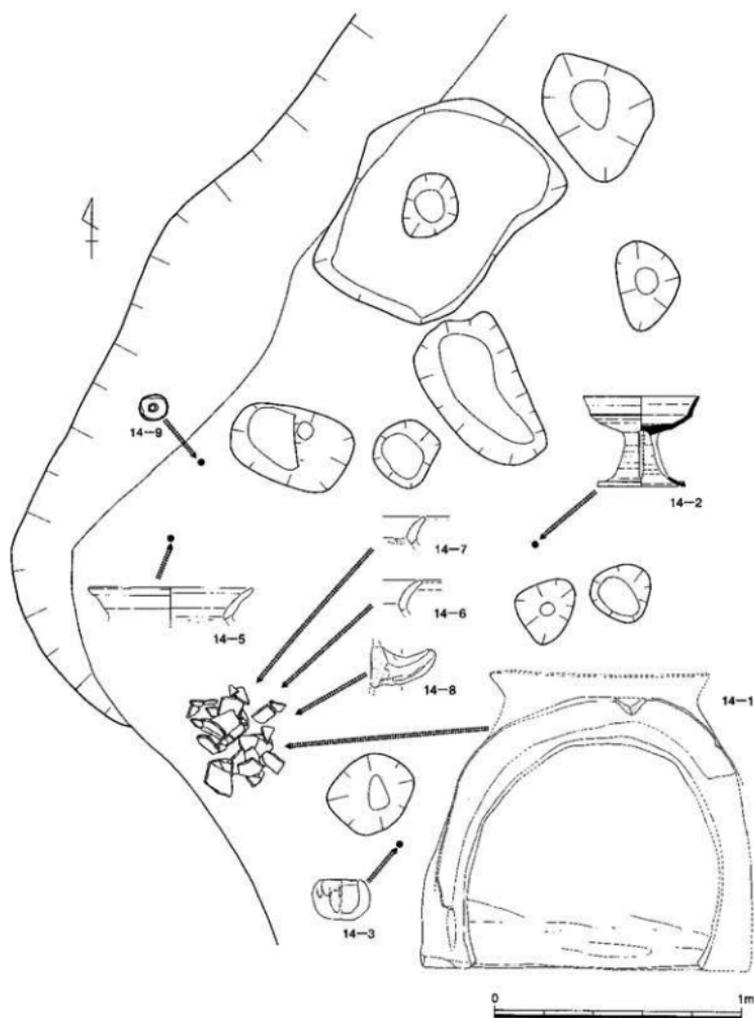
第14図 西1遺跡A区 段状遺構2出土遺物実測図 (S=土器1/4・石製品2/3)

段状遺構 2

段状遺構2は標高57.8m付近から掘削され、標高56.6m付近に床面レベルを持つもので、全長10.1m、幅5.9mの規模を持つ。軸線は自然地形に規制されN-51°-Wとなっている。段状遺構の平面形は略二等辺三角形を呈し、北西側は狭くなっており、下方は急斜面となっている。

掘立柱建物 3

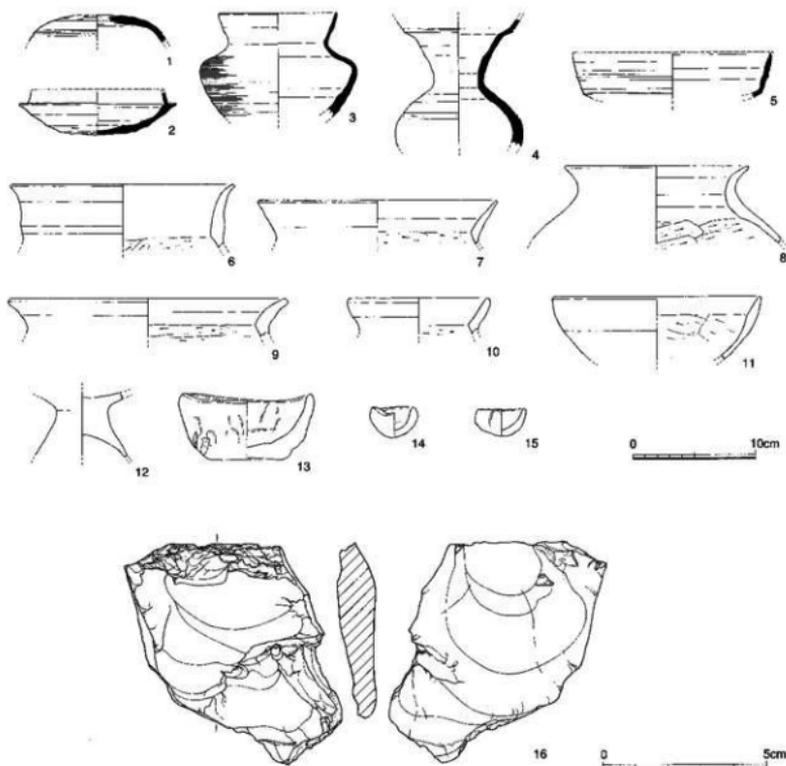
段状遺構2内の中央崖際に立地する桁行2間×梁間1間の掘立柱建物跡である。建物の軸線はN-50°-Wであり、段状遺構のカットラインとはほぼ平行になっている。柱穴上層断面の観察からも



第15図 西1遺跡A区 段状遺構2遺物出土状況図 (S=1/20・土器1/6・石製品1/1)

柱痕は確認できないため、建物廃絶時に柱も抜かれているものと考えられる。遺構確認面での柱穴掘形は不整形円形、略円形であり、地山の岩盤を掘削して掘り込んでいる。壁際には排水溝が巡っているが掘立柱建物3の背面では浅く、痕跡的な溝となっている。

掘立柱建物3周辺では建物の外側南東付近に遺物が集中しており、原位置を保つ移動式竈（第14図-1）の周辺に土器類が偏在していた。



第16図 西1遺跡A区 段状遺構2周辺出土遺物実測図 (S=土器1/4・石製品2/3)

第21表 西1遺跡A-1区 段状遺構2出土遺物観察表 (太字数字は確定値; 明朝体数字は復元値)

発掘番号	器種	寸法 (cm)			胎土	焼成	装飾	色調	残存度	備考
		器高	口径	底径						
14回-1	土器 移動六段	26.1	25.5	28.1	やや粗 (3cm以下の石英・長石等を多く含む)	普通	山形産; ヨコナテ 外周: 器底のため不明 内周下部: 器底のため不明 内周下部: ヨコ方向のヘラケズリ	全面: 淡褐色色	3/5	
14回-2	土器 底面有蓋 杯A4	10.9	13.6	10.2	粗 (1cm以下の長石・石英を含む)	良好	作型: 回転ヨコナテ	内面: 淡灰色 外面: 淡灰色 断面: 淡灰色・暗褐色	1/3	出土4期 TK259
14回-3	土器 平底の上器	4.8	4.4		やや粗 (2cm以下の石英・長石等を多く含む)	普通	外面: エビノテ	内・外面: 淡褐色 断面: 白褐色	2/3	
14回-4	土器 平底の上器	4.8	4.8		普通 (1.5cm以下の石英・長石を含む)	普通	外面: 全体的にエビノテ	内面: 暗褐色 外・断面: 淡褐色	1/4	
14回-5	土器 草鞋口縁器	4.1	19.2		やや粗 (1.5cm以下の石英・長石等を多く含む)	良好	口縁部: 斜転ヨコナテ 断面内周: ヨコ方向のヘラケズリ	内面: 淡褐色 外・断面: 淡褐色	1/8	口縁部1/8
14回-6	土器 草鞋口縁器	3.9			やや粗 (3cm以下の石英・長石等を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナテ 内周: ヨコ方向のヘラケズリ	全面: 淡褐色色	1/8	口縁部1/8
14回-7	土器 草鞋口縁器	4.8			やや粗 (3cm以下の石英・長石・赤色物を多く含む)	やや良好	口縁部: ヨコナテ 断面内周: ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面: 淡褐色 外面: 淡褐色	1/8	口縁部1/8
14回-8	土器 上器				粗 (2cm以下の石英・長石等を多く含む)	やや良好	外面: エビノテ 内面: ヨコ方向のヘラケズリ	全面: 淡褐色色		把手のみ

第22表 西1遺跡A-1区 段状遺構2出土石器観察表

発掘番号	器種	寸法 (cm)			石材	重量	色調	残存度	備考
		最大長	乳径	最大厚					
14回-9	石	0.06	0.015	0.035	准打石?	0.13g	淡褐色色	完整	

第23表 西I遺跡A-1区 段状遺構2及び周辺出土遺物構成表

種別	器種	現 状 と 数 量					
十姉器	甕	実形	口縁部	底部	把手(一方)	把手(片方)	
			1				2
	甕	実形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
			2			3	
	赤彩甕	実形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
			2				
	甕(周辺上)	実形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	肩部1/8以上	肩部1/9以下
			5			14	9
	甕(周辺下)	実形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	肩部1/8以上	肩部1/9以下
			6			22	4
高杯	実形	杯部	脚部	輪部	口縁部	脚端部	
		1				1	
赤彩高杯	実形	杯部	脚部	輪部	口縁部	脚端部	
		1				1	
移動式甕	実形	1/2以上	基部部				
		1		2			
手押ね土器	実形	1/2以上	1/2以下				
		2	2	5			
須臾器	杆蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天弁部	輪部	
			1				
	高杯	実形	杯部	脚部	輪部	口縁部	
		1	1	1		脚端部	
小型壺	実形	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下				
		1	1				
土類	灰土	1					
石器	スクレイパー	1					

第24表 西I遺跡A-1区 上・中段包層出土遺物観察表(太字数字は確定値・明朝体数字は推定値)

探検番号	器種	寸法 (cm)		胎土	構成	装 飾	色 調	残存率	備 考
		縦高	口径						
1600-1	深鉢型 赤彩A4	残高 2.4		黄 (1cm以下の長形・石 灰を含む)	良好	大弁形; 留輪ヘラズリ 痕跡; 留輪コナテ 天打形内面; 同輪コナテ 天打形?	内面: 黄灰色 外面: 黄灰色 脚部: 赤灰色	天打部1/4	出典4号 TK350
1600-2	浅鉢型 赤彩A4	残高 2.6	10.5	黄 (0.5cm以下の長石・石 灰を含む)	良好	表面: 同輪ヘラズリ; 中心も残る 痕跡; 天打コナテ 底打内面; 留輪コナテ後、不電 気内打?	内・外底: 黄灰色 脚部: 赤灰色	1/6	出典4号 TK350
1600-3	深鉢型 赤彩A4	残高 8.6	9.4	やや黄 (2cm以下の石 灰・長石を含む)	良好	口縁部: 留輪コナテ 外側: 10cmの巨輪キネメ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 脚部: 黄褐色	上半部1/4	
1600-4	深鉢型 赤彩A7	残高 10.3		黄 (2cm以下の石灰・石 灰を含む)	普通	杯部: 留輪コナテ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 脚部: 黄褐色	2/5	出典5号 TK370
1600-5	深鉢型 赤彩A7 赤彩?	残高 4.8	推定 16.1	黄 (1cm以下の石灰・石 灰を含む)	良好程度	杯部・口縁部: 留輪コナテ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 脚部: 黄褐色	口縁部1/8	
1600-6	土器型 赤彩土器	残高 3.2	17.8	普通 (2cm以下の石灰・ 長石等を含む)	普通	口縁部: ロウナテ 脚部内面: ヘラズリ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 脚部: 黄褐色	口縁部1/6	
1600-7	土器型 赤彩土器	残高 3.6	19.1	黄 (0.5cm以下の石灰・石 灰・黒色粒を多く含む)	普通	口縁部: ロウナテ 脚部内面: 口コ方向のヘラズリ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 脚部: 黄褐色	口縁部1/8	
1600-8	手押ね 赤彩土器	残高 6.4	14.7	やや黄 (1.5cm以下の石 灰・長石を多く含む)	やや良好	口縁部: コナテ 痕跡; 赤染のため調整不明 基部部内面: ココ方向のヘラズリ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 脚部: 黄褐色	口縁部1/5	
1600-9	土器型 赤彩土器	残高 3.2	22.0	黄 (0.5cm以下の石灰・長 石・黒色粒を多く含む)	良好	口縁部: コナテ 脚部内面: 口コ方向のヘラズリ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色 脚部: 黄褐色	口縁部1/8	
1600-10	土器型 赤彩土器	残高 3.0	11.1	やや黄 (2cm以下の石灰・ 長石・黒色粒を多く含む)	良好	口縁部: コナテ 痕跡; 赤染のため調整不明 基部部内面: ココ方向のヘラズリ	内・外底: 黄褐色 脚部: 黄褐色	7/8以上1/3	
1600-11	土器型 赤彩土器	残高 5.2	16.7	やや黄 (2cm以下の石灰・ 長石・黒色粒を多く含む)	普通	口縁部: コナテ 内面: ヘラズリ後、ナテ?	内・外底: 黄褐色 脚部: 黄褐色	1/4	
1600-12	土器型 赤彩土器	残高 5.4		黄 (2cm以下の石灰・石 灰・黒色粒を多量に含む)	普通	杯部内面: 留輪のため不明 調整; コナテ 基部部内面: 赤染のため不明	全面: 黄褐色	杯部部	
1600-13	土器型 赤彩土器	残高 5.4	10.2	やや黄 (2cm以下の石灰・ 長石を多く含む)	やや良好	基部部内面: コナテ	内・外底: 黄褐色 脚部: 黄褐色	1/3	
1600-14	手押ね 赤彩土器	残高 2.9	3.4	普通 (1.5cm以下の石灰・ 長石を含む)	やや良好	全体的にコナテ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色	口縁部実形	
1600-15	土器型 赤彩土器	残高 2.2	3.8	やや黄 (1.5cm以下の石 灰・長石を含む)	普通	全体的にコナテ	全面: 黄褐色	1/2	

第25表 西I遺跡A-1区 上・中段包層出土石器観察表

探検番号	器種	寸法 (cm)			重量	色 調	残存率	備 考
		長	巾	厚				
1600-16	刮削	6.8	6.6	0.16	ネット?	48.70g	黄褐色	実形

段状遺構2の遺物

段状遺構2の東南部にほぼ原位置で上圧により破損していた移動式甕のほか、遺構外ではあるが段状遺構2の東南側にはこれ以外にも2個体の移動式甕の存在が確認され、この場で煮沸行為がなされたことが想定できる(第39図)。

壺、甌など煮沸具は一定量見られるが、細片化していた。また、段状遺構2の遺構内に限れば須恵器の杯身・杯蓋が存在しないことから、建物の廃絶・移転時に片付けられたことも考えられる。白玉は移動式竈の破片に付着した状態で取り上げており、室内での泥落とし作業の際に1個体を確認したものである。

また、段状遺構2とその周辺では、A-1区内でも特に手捏ね土器が6個体と集中して出土することが特徴として挙げられる。

これらの遺物から段状遺構2の廃絶時期は出雲5期を下らないものと考えられる。

段状遺構3

段状遺構3は新・古2段階の時期が確認され、造り替えが行われている。

段状遺構3古段階

段状遺構3古段階の平面形は細長い三角形形状を呈しており、西側は床面幅3.3mの規模を持つが、東端は狭小となっている。段状遺構の全長は9.35m、床面での全長は9.2mであり、壁際には排水溝の痕跡は見られない。段状遺構内にビッドは11個確認されたが、規則的な配列は見られず掘立柱建物の復元は困難である。簡易な構造の建築物が存在した可能性がある。

段状遺構3古段階の遺物

古段階の遺構内には遺物が少量しか残存しておらず、段状遺構3新段階への造り替えの際に、移動・撤去されたものと考えられる。段状遺構3古段階に伴う遺物として特異なものとして、鎌が出土している。

段状遺構3新段階

段状遺構3新段階の遺構は古段階の遺構を埋めたのち、その西側コーナー部に一部重複する形で西側に位置をずらして設けられている。壁際には長さ4.27m、幅1.36m、深さ0.65mの若干湾曲する排水溝を設けている。他の段状遺構と比較して排水溝がやや大きく造られていることが特徴といえる。床面全長は4m、床面幅は4.15mである。遺構内には6個のビッドを確認したが規則的な配列は見られずやはり掘立柱建物の復元は困難である。

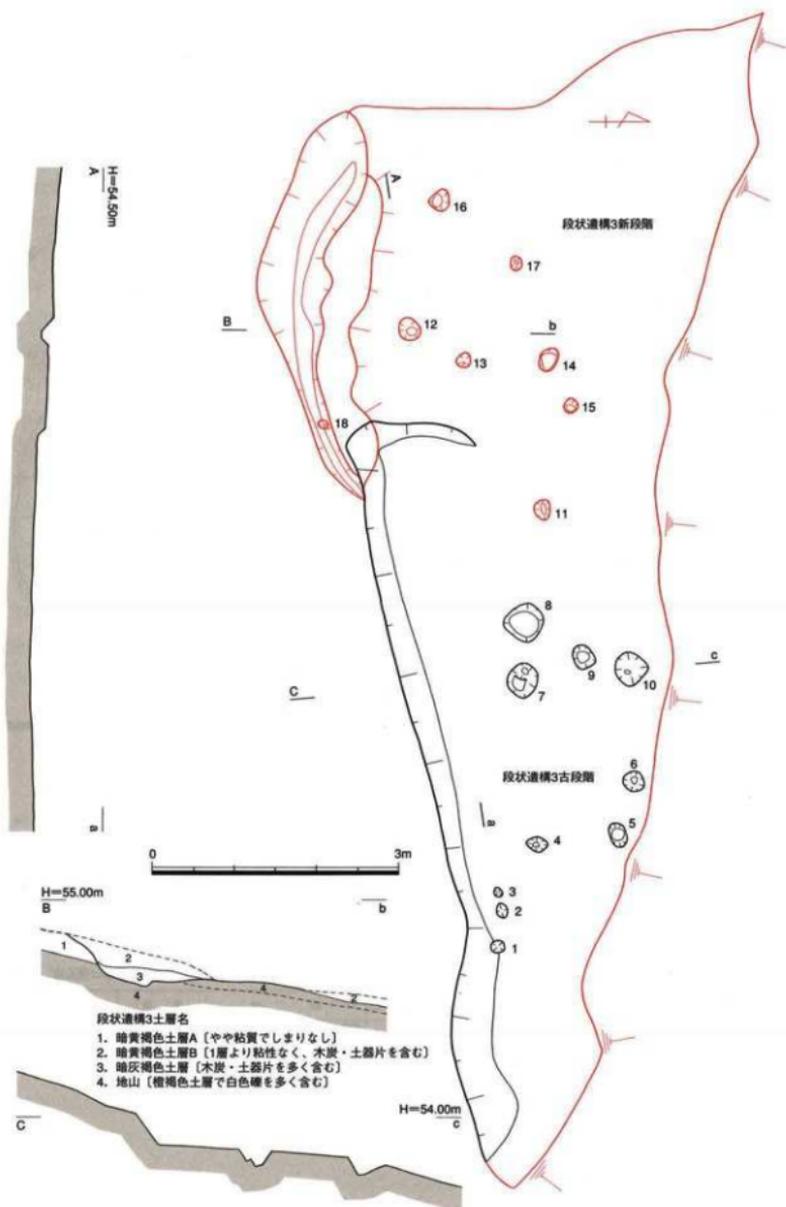
新段階の遺構床面からは細片の遺物しか出土していないが、排水溝内からは遺存状態の良い土器が出土している。

段状遺構3新段階の遺物

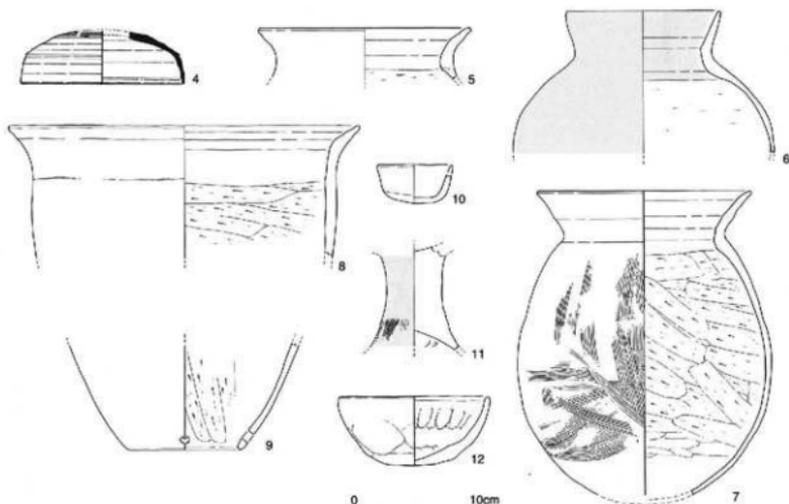
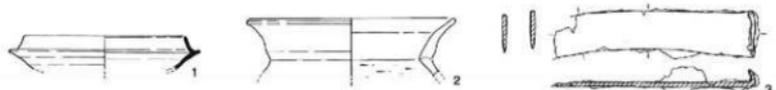
段状遺構3新段階の遺構面からは上述のとおり、遺存状態の良い遺物が出土している。土器は壺・甌など煮沸具があるほか、椀・赤彩高杯・手捏ね土器など供膳形態のものも存在する。しかし、須恵器は杯蓋が1個体のみ存在しており、須恵器の占める比率は7.7%ほどである(第32表)。遺物の出土状況が排水溝に偏在していることから、このセット関係が当初のものかどうか疑わしいが、やや特異な状況といえる。

第26表 西1遺跡A-2・3区 段状遺構3ビッド計測表

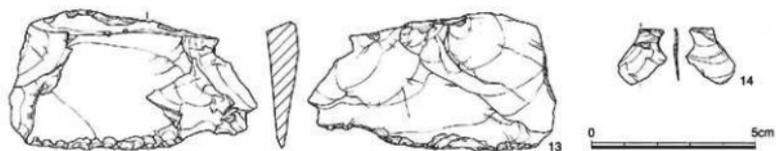
ビッド名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面傾高(m)	ビッド名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面傾高(m)
P1	P16	0.18	0.18			P10	P7	0.42	0.42	0.22	53.3
P2	P15	0.2	0.15			P11	P8	0.27	0.19	0.15	53.44
P3	P14	0.14	0.1			P12	P10	0.3	0.26	0.13	53.73
P4	P1	0.27	0.19	0.12	53.55	P13	P11	0.2	0.18	0.22	53.56
P5	P2	0.3	0.2	0.22	53.31	P14	P12	0.31	0.22	0.2	53.41
P6	P3	0.27	0.25	0.12	53.4	P15	P9	0.2	0.19	0.05	53.44
P7	P4	0.42	0.4	0.12	53.49	P16	P17	0.28	0.24	0.22	53.66
P8	P5	0.49	0.46	0.11	53.48	P17	P13	0.18	0.15	0.22	53.47
P9	P6	0.31	0.31	0.16	53.42	P18	P18	0.13	0.12		



第17図 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3実測図 (S=1/60)



アミ掛け部分は赤形



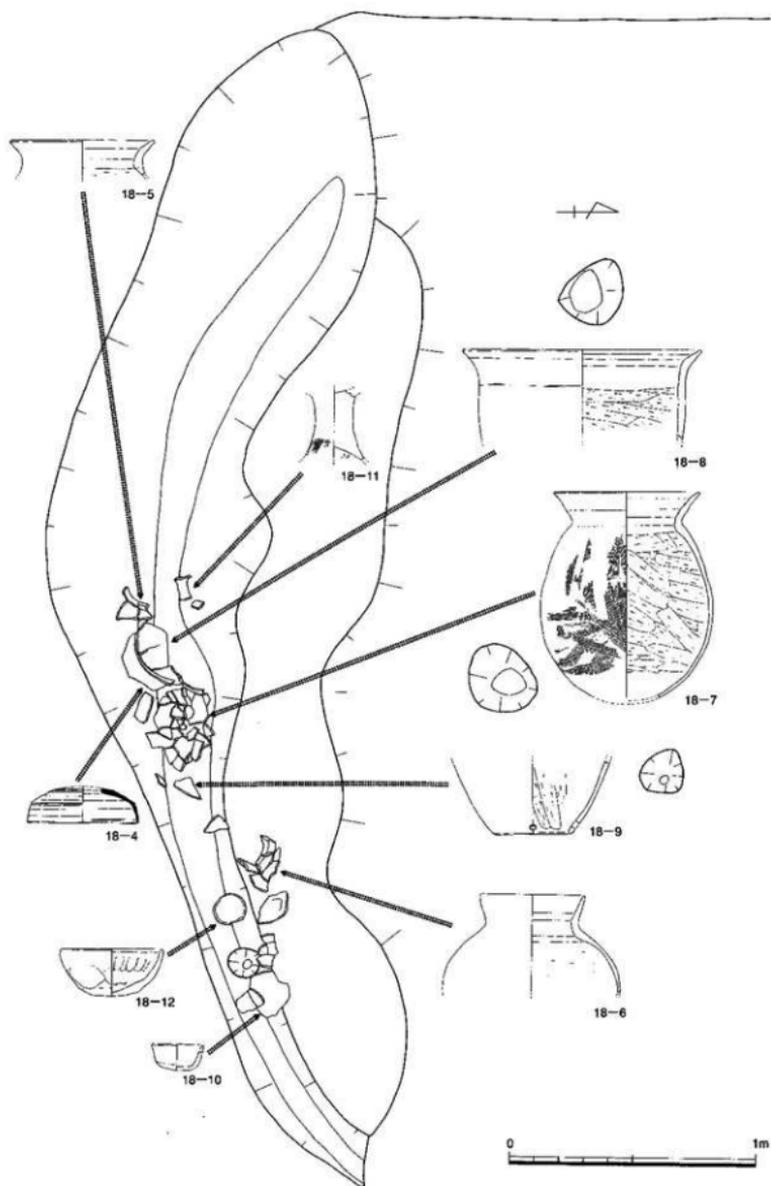
第18図 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3出土遺物実測図 (S=土器1/4・石製品2/3・鉄製品1/3)

第27表 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3古段階出土遺物観察表 (太字数字は確定値・明朝体数字は復元値)

検出番号	器種	寸法 (cm)			胎土	焼成	器型	色調	残存度	備考
		器高	口径	底径						
1830-1	深鉢型 杯之入S	現形	2.8	12.9	やや粗 (1cm以下の長石・石英を含む)	良好	胴部: 回転コナテ	外周: 灰紫灰色 内・底面: 赤灰色	胴部1/8	出雲4精 TK300
1830-2	土師器 単純口縁型	現形	4.8	16.4	やや粗 (2cm以下の長石・石英を多く含む)	やや良好	胴部: コナテ 履帯内面: マシ方向のヘラケズリ	全面: 灰褐色	胴部1/6	

第28表 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3古段階出土鉄製品観察表

検出番号	器種	寸法 (cm)			残存度	備考
		長	刃部長	刃巾		
1830-3	鉄	現存	現存	2.3	2/3	
		11.7	11.6	2.3		



第19图 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3遺物出土状況図(S=1/20・土器1/6)

第29表 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3新段階出土遺物観察表 (太字数字は確定値：明細体数字は推定値)

発掘番号	器種	寸法 (cm)			胎土	構成	調整	色調	残存度	備考
		高さ	口径	底径						
1804-4	須恵部 赤紫A3a	4.4	13.1		黄 (0.5cm以下の長石を含む)	良好磨面	天幕部：黄白ヘラケズリ 体部：黒紅コナダ	内面：緑灰色 外面：淡灰色 断面：暗褐色	1/5	出宝3副 TK43
1804-5	土師器 黒緑B1	残高	4.3	16.9	やや粗 (3cm以下の石灰・長石を多く含む)	やや不良	口縁部：黒コナダ 胴部内面：黒コナダのヘラケズリ	内：黒褐色 外・外面：暗褐色 断面：黒褐色	口縁部1/3	
1804-6	土師器 赤紫B	残高	11.6	12.2	普通 (2cm以下の長石・石灰・金鉄等を含む)	やや不良	口縁部：黒コナダ 胴部：暗褐色のため不明 胴部内面：黒コナダのヘラケズリ	全面：淡赤褐色	上半部1/3	外側及び 口縁部内 面が
1804-7	土師器 黒緑B1	高さ 25.7		17.1	普通 (2cm以下の石灰・長石を多く含む)	やや良好	胴部内面：黒コナダ 胴部外側：黒コナダのヘラケズリ 胴部外側：6条のハケ模様 口縁部：黒コナダを中心 上二部：タテハケが中心 胴部内面：ナダ 胴部断面：黒コナダ	全面：淡褐色	3/4	
1804-8	土師器 黒	残高	11.0	28.0	やや粗 (3cm以下の石灰・長石・赤色鉄等を多く含む)	良好	口縁部：黒コナダ 体部：タテハケを施した後、ナダ 断面：黒コナダのヘラケズリ	内・外側：暗褐色 断面：淡黄色	上半部1/2	
1804-9	土師器 黒	残高	8.6		やや粗 (3cm以下の石灰・長石・黒色鉄等をやや多く含む)	やや良好	外側：磨面不明 内側：部分的にタテ方向のヘラケズリ 断面：黒コナダ	内面：淡褐色 外面：淡褐色 断面：淡黄色	底部1/4	
1804-10	土師器 子粒の上器	高さ	3.2	5.8	やや粗 (1.5cm以下の石灰・長石を含む)	普通	断面：黒コナダ	内面：赤褐色 外面：淡黄色 断面：淡黄色	1/3	
1804-11	土師器 高杯(小形)	残高	8.5		やや粗 (3cm以下の石灰・長石・赤色鉄等を多く含む)	普通	胴部上半部：ナダ 下半部：8条のタテハケ	内面：暗褐色 外面：暗褐色 断面：暗褐色	胴上部	外側赤紫
1804-12	土師器 黒	高さ	6.7	12.0	粗 (3cm以下の石灰・長石・赤色鉄等を多く含む)	普通	外側：全体的に黒コナダ 内側：黒コナダ	全面：淡褐色	完全	

第30表 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3出土石器観察表 (太字数字は確定値：明細体数字は推定値)

発掘番号	器種	寸法 (cm)			石材	重量	備考
		長さ	幅	厚			
1804-13	スクレパター	4.3	7.82	1.0	安山岩	27.59g	
1804-14	刮片	1.7	1.9	0.15	燧石	0.29g	

第31表 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3古段階出土遺物構成表

種別	器種	現 状 と 数 量					
		元形	口縁部	底部	把手 (一對)	把手 (片方)	
土師器	飯		1				
	甕	元形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	胴部1/8以上	胴部1/9以下
	鉢	元形	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		4
	高杯	元形	杯部	脚部	1	口縁部	脚部
	赤彩高杯	元形	杯部	脚部	1	口縁部	脚部
須恵器	杯身	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	底部		
	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	柄部	
	横瓶	破片	2		2	1	1
	瓶	元形	1	1/2以上	口縁部1/8以上		
					1		

第32表 西I遺跡A-2・3区 段状遺構3新段階出土遺物構成表

種別	器種	現 状 と 数 量					
		元形	口縁部	底部	把手 (一對)	把手 (片方)	
土師器	瓶	元形	口縁部1/2以上	1			
	赤彩高杯	元形	杯部	脚部	1	口縁部	脚部
	飯	元形	口縁部	底部	1	把手 (一對)	把手 (片方)
	子粒ねじ器	元形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	2		
	赤彩甕	元形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	1	口縁部1/9以下	
	甕	元形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	1	口縁部1/9以下	
須恵器	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	柄部	

段状遺構 4

段状遺構 4 の平面形は谷側の辺の長い台形状を呈しており、西側の床面幅は4.05mの規模を持つが、東端は狭小となり細く収まっている。軸線は自然地形に従って、ほぼ座標の北に向いている。段状遺構の床面全長は7.3mである。段状遺構内にピットは11個確認されたが、いずれも小規模なもので規則的な配列は見られず、掘立柱建物の復元は困難である。また、段状遺構に隣接して6個のピットも検出しているが、その性格は判然としない。これらのピットの存在から簡易な構造の建築物が存在した可能性を考えたい。排水溝は壁際南西部には存在するが、東側では痕跡が確認できなかった。また、段状遺構 4 は掘削の際に、壁側1/2の範囲を床面より深く、標高53.2m付近まで掘り下げた後、改めて整地土を入れて標高53.5m付近に床面を整形している様子が確認できた。

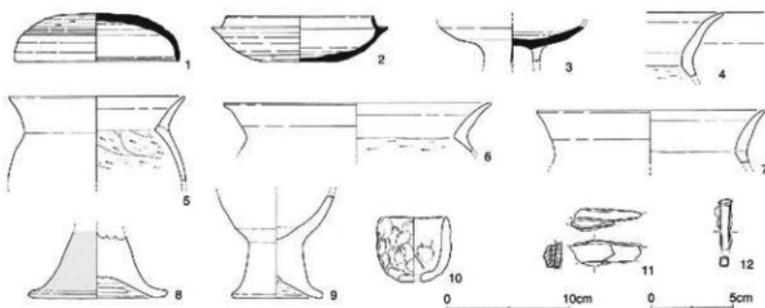
段状遺構 5 との先後関係は土層では確認できていないが、土器型式では段状遺構 4 が新しい。また、段状遺構 5 は上方に存在する段状遺構 2 に起源を持つと思われる暗褐色土が床面に堆積しているが、段状遺構 4 ではその影響を受けない暗黄褐色土が堆積している。このため、段状遺構 5 の廃絶後、段状遺構 4 に家屋移転しているものと考えられる。

段状遺構 4 の遺物

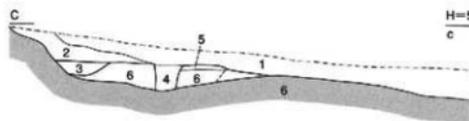
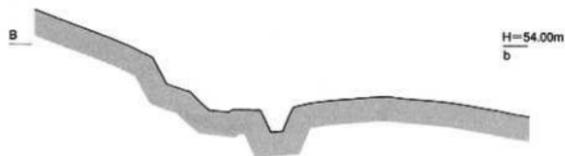
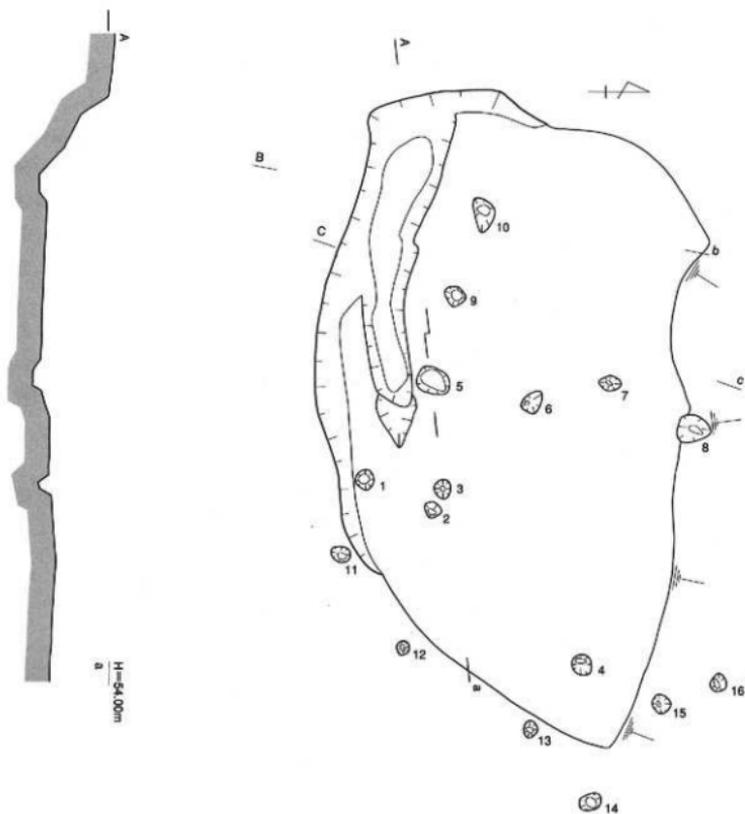
この遺構内では甕・甔・移動式竈などの煮沸具や須恵器の高杯・杯、土師器の高杯・手捏ね土器など一定量の遺物が確認されたが、いずれも床面よりやや浮いた破片の状態での出土であり、上方からの転落品が含まれている可能性が高い。

第33表 西 I 遺跡 A-1 区 段状遺構 4 ピット計測表

ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P1	P40	0.25	0.22	0.13	54.34	P9	P37	0.28	0.25	0.3	53.2
P2	P42	0.23	0.2			P10	P36	0.41	0.24	0.3	52.95
P3	P41	0.22	0.22	0.15	54.13	P11	P13	0.24	0.21	0.25	53.39
P4	P30	0.25	0.24	0.21	52.99	P12	P1	0.19	0.17	0.15	54.25
P5	P43	0.42	0.32	0.13	53.05	P13	P4	0.21	0.15		
P6	P29	0.3	0.23	0.21	53.38	P14	P33	0.29	0.19	0.4	52.47
P7	P44	0.29	0.18	0.14	52.57	P15	P31	0.25	0.24	0.34	52.55
P8	P2	0.4	0.32	0.14	52.98	P16	P32	0.22	0.2	0.26	52.47



第20図 西 I 遺跡 A-1 区 段状遺構 4 出土遺物実測図 (S=土器1/4・鉄製品1/3)



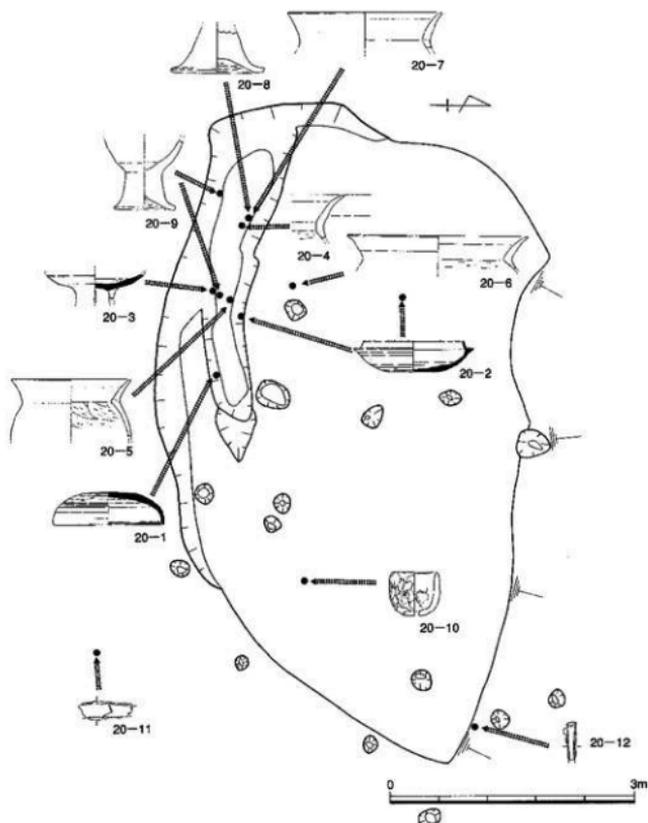
段状遺構4土層

1. 暗黄褐色土層〔やや粘性を持ち、木炭・土器片を含む〕
2. 暗黄褐色礫混土層〔1層より色調が暗く、地山ブロックを含む〕
3. 暗黄褐色礫混土層〔地山ブロックを多く含む〕
4. 暗褐色土層〔柱穴埋土、軟質〕
5. 暗褐色礫混土層〔粘り床〕
6. 地山〔淡黄褐色土層〕

H=54.00m
c

0 3m

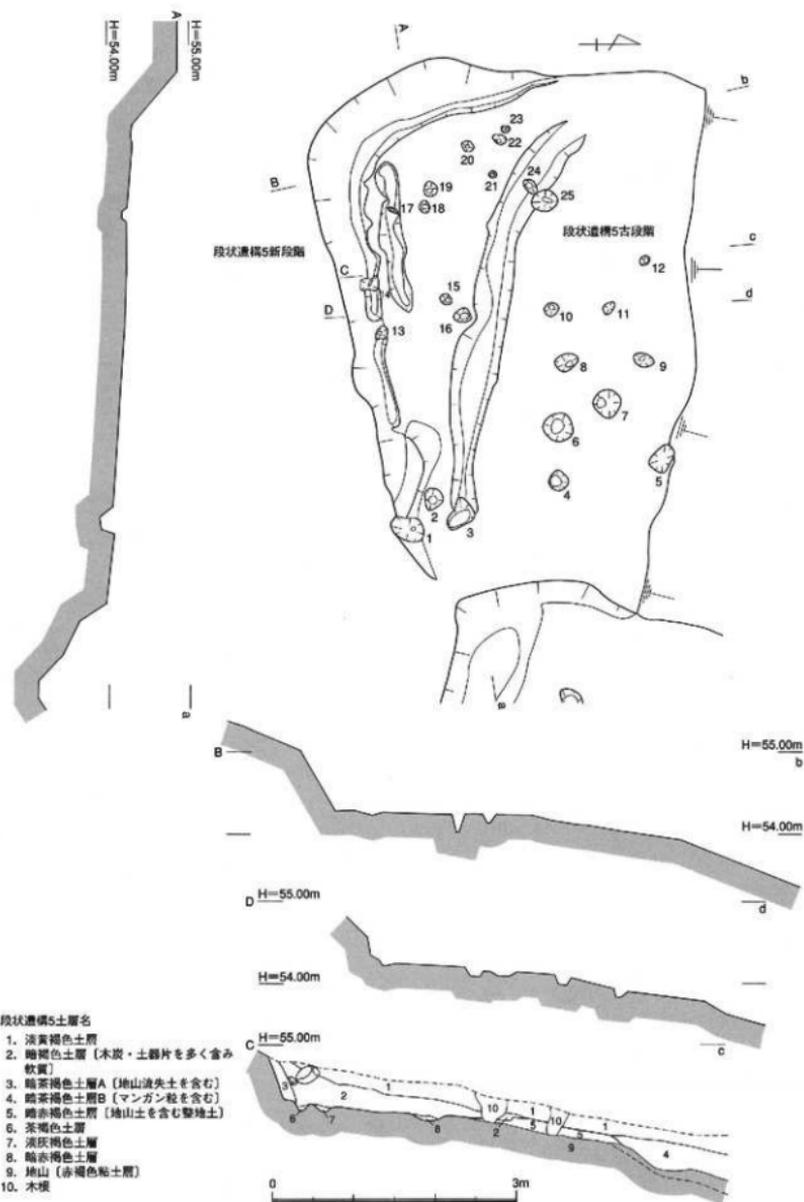
第21図 西1遺跡A-1区 段状遺構4実測図 (S=1/60)



第22図 西I遺跡A-1区 段状遺構4 遺物出土状況図 (S=1/60・土器1/6・鉄製品1/4)

第34表 西I遺跡A-1区 段状遺構4 出土遺物構成表

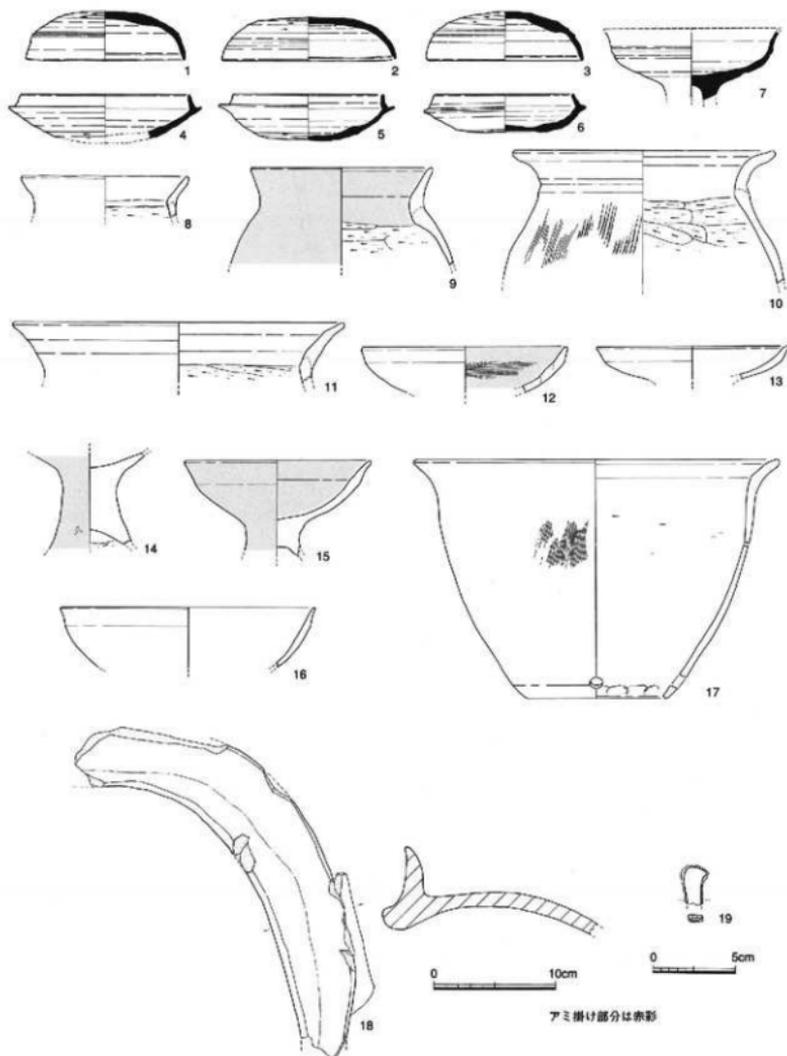
種別	器種	現状と数量				
		完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	
土器類	椀				1	
	赤彩椀	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
	赤彩高杯	完形	杯部	脚部	輪部	口縁部 脚端部
	高杯	完形	杯部	脚部	輪部	口縁部 脚端部
	瓶	完形	口縁部	底部	把手 (一対)	把手 (片方)
	手裡ね上器	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上		
	移動式甕	完形	1/2以上	基部部	口縁部・袋口部	
	赤彩甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/8以上 頸部1/9以下
	甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/8以上 頸部1/9以下
	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	縁部
須臾器	杯身	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	底部	
	高杯	完形	杯部	脚部	輪部	口縁部 脚端部



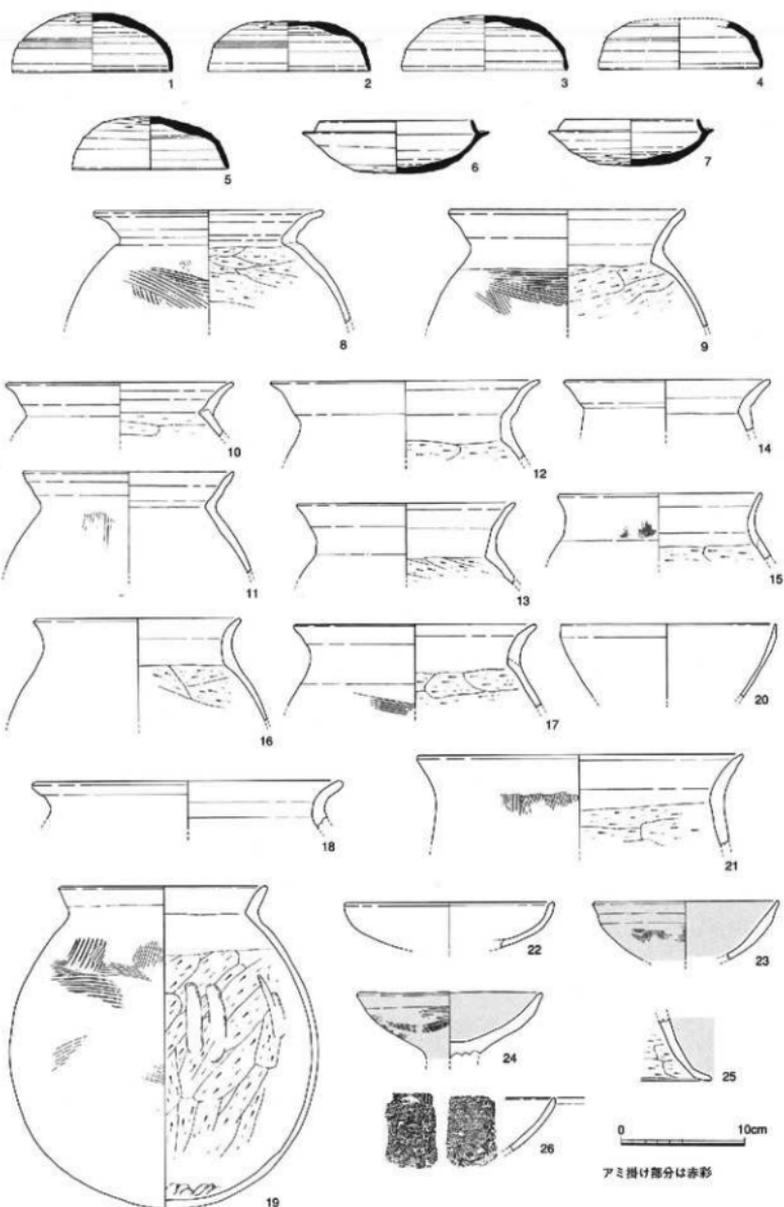
第23図 西1遺跡A-1区 段状遺構5実測図 (S=1/60)

痕か現状では判断しがたい。

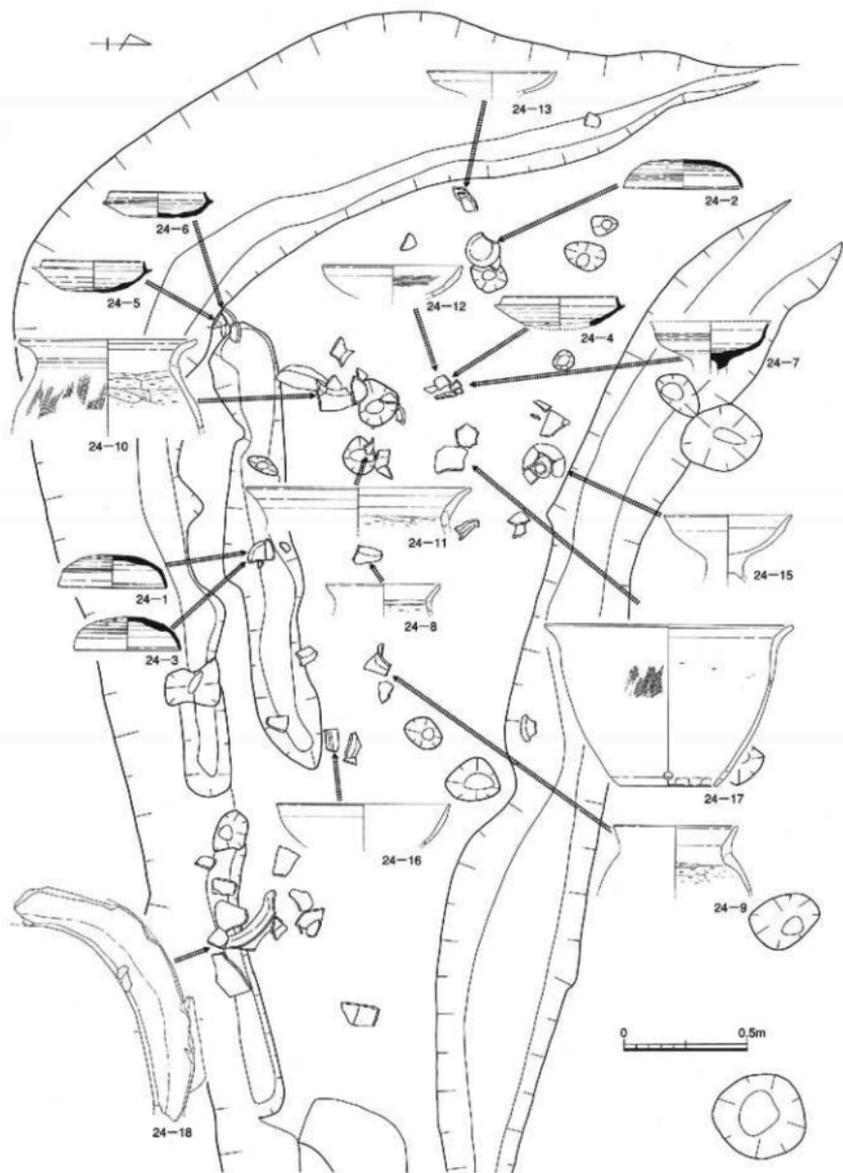
段状遺構内では25個のピットが確認されているが、規則的な配列は見られず、いずれも小規模なものである。ここでも掘立柱建物の復元は困難であり、簡易な構造の建築物が存在したことを考えたい。



第24図 西1遺跡A-1区 段状遺構5床面出土遺物実測図 (S=土器1/4・鉄製品1/3)



第25図 西1遺跡A-1区 段状造構5覆土出土遺物実測図 (S=1/4)



第26图 西I 遗迹 A-1 区 段状遺構 5 遺物出土状況図 (S=1/20・土器1/6)

段状遺構5の遺物

段状遺構5床面では多くの遺物が残存していたが、古・新段階の床面は同一レベルで確認しており、床面出土遺物は新段階絶時のものと考えられる。床面を覆う覆土は段状遺構3からの影響を受け、暗褐色土で黒味の強い上層が堆積している。ここでは、土師器の鉢・高杯や須恵器の杯身・杯蓋などの供膳具のほか、土師器の壺・甎など煮沸具が出土している。移動式竈も出土しているが底部がなく口縁部、焚口部など個体の上半部のみ出土していることから、上方からの転落と考えられる。その他の遺物も破片が多いことから、この床面出土遺物のセットが段状遺構5で本来使用された土器様式とは考えにくい。床面出土遺物に時期差は見出しがたく、混入品を抽出することも困難なため、時期比定には文障が無いものと考えられる。須恵器杯蓋は出雲人谷編年3期のものが2個体、4期のものが2個体である。

一方、覆土からも多量の土器が出土しているが、須恵器杯蓋は出雲3期のものが1個体に対して出雲4期のものが9個体と出雲4期の個体が大半を占めるため、段状遺構5が埋没した時期は出雲4期と考えられる。

また、この段状遺構の床面直上からは釘状の鉄製品も出土しており、鉄器を保有していたことがうかがわれる。

また、赤彩高杯が多く出土しており、床面・覆土合わせて口縁部片でカウントすれば10個体が出土していることが特筆される。

覆土中の遺物ではあるが、縄文時代晩期の粗製浅鉢の口縁が出土している。縄文時代の土器類はこの1点のみであるが、石鏝やスクレイパー、黒曜石剥片など縄文時代に属すると考えられる遺物が出土している。狩猟具が多いことから、西I遺跡付近は縄文時代には狩猟エリアとなっていた可能性が考えられる。

第38表 西I遺跡A-1区 段状遺構5出土遺物構成表

種別	器種	現 状 と 数 量					
		形状	口縁部	胴部	底部	天井部	脚部
土師器	鉢	完形	口縁部1/2以上				
		1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下			
	赤彩板			2			
	赤彩高杯	完形	杯部	脚部	輪部	口縁部	脚端部
			4			1	10
	高杯	完形	杯部	脚部	輪部	口縁部	脚端部
			1		2		4
	鉢	完形	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
					9		
	甎	完形	口縁部	底部	把手(一対)	把手(片方)	
				2			3
	赤彩壺	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	胴部1/8以上	胴部1/9以下
		1		1			
壺	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	胴部1/2以上	胴部1/8以上	胴部1/9以下	
	6	31	49	1	20	40	
移動式竈	完形	1/2以上	基部	口縁部・焚口部			
					1		
手捏ね土器	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上				
須恵器	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	脚部	
		5	4	2	1	2	
	杯身	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	底部		
		5	4	4		1	
	高杯	完形	杯部	脚部	輪部	口縁部	脚端部
		1					
	甎	完形	1/2以上	1/8以上	1/9以下		
			2			1	
大甎	完形	1/2以上	1/8以上	1/9以下			
縄文土器	晩期浅鉢	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下			
			1				
鉄釘		1					

第39表 西1遺跡 A-1区 段状遺構5床面出土遺物観察表 (太子数字は確定値: 明朝体数字は推定値)

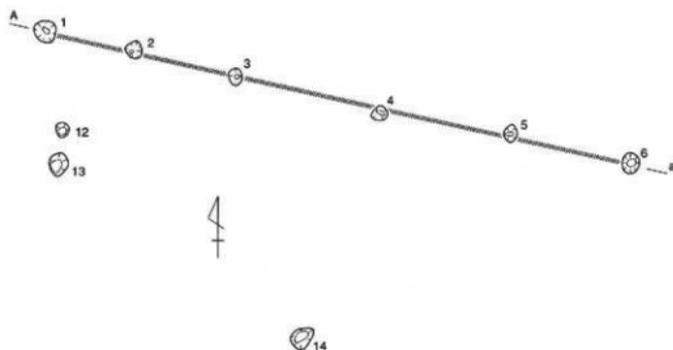
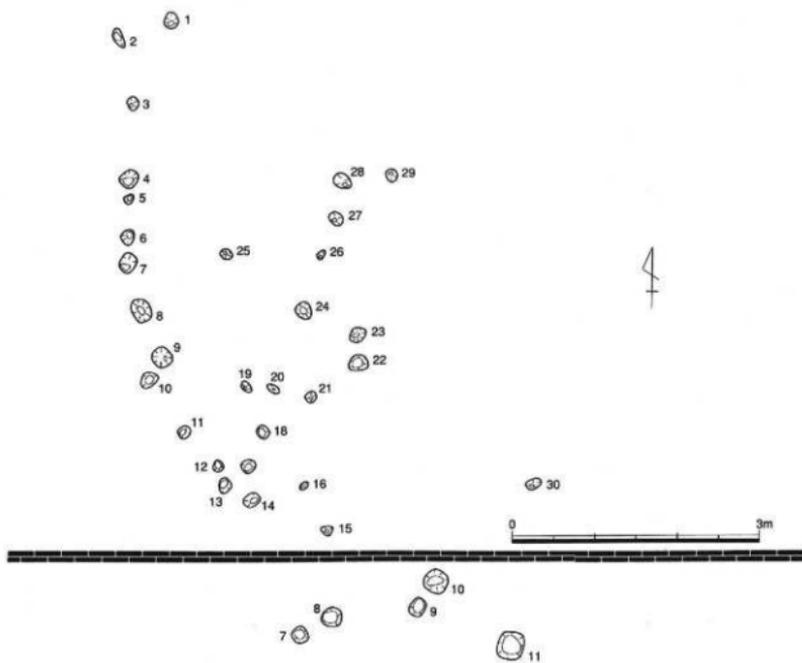
拝訪番号	器種	寸法 (cm)			出土	産成	調査	色調	残存度	備考
		長さ	幅	高さ						
2401-1	須山部 杯身 A4	4.0	12.8		普通 (1.5cm以下の石英・ 長石をやや多く含む)	良好	天弁部: 浅く風化した小い縦断ヘラケズリ 口縁部: 縦断コナテ	内: 青白・淡灰色 外面: 淡灰色	3/4	出雲4期 TK309
2401-2	須山部 杯身 A3a	3.6	14.0		密 (1cm以下の長石を含む)	良好	天弁部: 比較的中平な縦断ヘラケズリ 天弁部内面: 縦断コナテ後、不定方向テテ	全面: 淡青灰色	90%	出雲3期 TK43
2401-3	須山部 杯身 A3a	4.1	12.6		密 (1cm以下の長石を含む)	良好	天弁部: 比較的中平な縦断ヘラケズリ 口縁部: 縦断コナテ 天弁部内面: 縦断コナテ後、不定方向テテ	内面: 淡茶褐色 外面: 淡灰色 断面: 黄褐色	4/5	出雲3期 TK43
2401-4	須山部 杯身 A4	3.6	13.6		密 (1.5cm以下の石英・ 長石をわずかに含む)	良好程度	口縁部: 縦断コナテ 断面: 縦断ヘラケズリ 断面内面: 縦断コナテ後、不定方向テテ	全面: 明灰色	2/5	出雲4期 TK309
2401-5	須山部 杯身 A1	3.8	12.1		密 (1cm以下の長石・石 炭等を含む)	良好	口縁部: 縦断コナテ 断面: 中心まで縦断ヘラケズリ 断面内面: 縦断コナテ後、不定方向テテ	全面: 淡灰色	4/5	出雲4期 TK309
2401-6	須山部 杯身 A4	3.1	11.3		密 (1cm以下の長石を含む)	良好程度	口縁部: 縦断コナテ 断面: 浅く風化した縦断ヘラケズリ 断面内面: 縦断コナテ後、不定方向テテ	内: 青白・茶褐色 外面: 黄褐色	3/4	出雲4期 TK309
2401-7	須山部 杯身 A4	5.6	14.2		密 (1cm以下の長石・石 炭等を含む)	不良	全体的に消滅しており調査不明	全面: 淡灰色	断片部は欠	出雲4期 TK309
2401-8	土師部 草鞋口縁部 A4	2.4	13.1		普通 (1.5cm以下の石英・ 長石を多く含む)	良好	口縁部: コナテ 断面内面: コナテ方向のヘラケズリ	内: 青白・茶褐色 外面: 黄褐色	口縁部1/5	
2401-9	土師部 草鞋口縁部 A4	8.1	14.5		やや粗 (3mm以下の石英・ 長石・赤色炭等を含む)	普通	口縁部: コナテ 断面内面: 断面のため調査不明 断面内面: コナテ方向のヘラケズリ	全面: 黄褐色	上半部1/2	外面及び 口縁内面 赤彩
2401-10	土師部 草鞋口縁部 A4	11.0	20.9		やや粗 (3mm以下の石英・ 長石等を多く含む)	普通	口縁部: コナテ 外面: 3条/cmのチチハク 断面内面: コナテ方向のヘラケズリ	内面: 淡茶褐色 外面: 黄褐色 断面: 黄褐色	口縁部1/3	
2401-11	土師部 草鞋口縁部 A4	5.0	26.6		やや粗 (2mm以下の石英・ 長石等を多く含む)	良好	口縁部: コナテ 断面内面: コナテ方向のヘラケズリ	内: 断面: 淡茶褐色 断面: 淡茶褐色 断面: 淡茶褐色	口縁部1/3	
2401-12	土師部 草鞋口縁部 A4	3.8	16.6		普通 (1cm以下の石英・ 長石・赤炭等を含む)	普通	口縁部: コナテ 内面: 7~8条/cmのチチハク 外面: 断面のため調査不明	内: 断面: 淡茶褐色 外面: 黄褐色	杯縁1/3	杯内面 赤彩
2401-13	土師部 草鞋口縁部 A4	2.8	15.5		粗 (2mm以下の石英・長 石を多く含む)	普通	口縁部: コナテ 内面: 断面のため調査不明	内: 断面: 淡茶褐色 外面: 黄褐色	口縁部1/4	
2401-14	土師部 草鞋口縁部 A4	7.5			普通 (2mm以下の石英・ 長石等を多く含む)	普通	杯内面: 断面のため調査不明 杯内面: コナテ方向のヘラケズリ 断面内面: コナテ後、ナテ面し 断面内面: コナテ	内面: 淡茶褐色 外面: 淡茶褐色 断面: 淡茶褐色	杯縁部	断面内面 赤彩
2401-15	土師部 草鞋口縁部 A4	7.9	15.0		普通 (1cm以下の石英・ 長石・赤炭等を含む)	普通	内面: 断面のため調査不明 断面内面: コナテ後、ナテ面し 断面内面: コナテ	内面: 淡茶褐色 外面: 黄褐色 断面: 淡茶褐色	杯縁5/6	断面内面 以外赤彩
2401-16	土師部 草鞋口縁部 A4	4.9	20.5		やや粗 (1.5cm以下の石英・ 長石・赤炭等を多く含む)	普通	内面: 断面のため調査不明	内面: 淡茶褐色 外面: 黄褐色 断面: 淡茶褐色	口縁部1/5	
2401-17	土師部 草鞋口縁部 A4	19.5	29.2	11.2	普通 (2mm以下の石英・ 長石・赤炭等を含む)	普通	口縁部: 断面: コナテ 断面内面: 6条/cmのチチハク 断面内面: コナテ方向のヘラケズリ 断面内面: コナテ後、ナテ面し 断面内面: コナテ	内面: 淡茶褐色 外面: 黄褐色 断面: 淡茶褐色	1/3	
2401-18	土師部 草鞋口縁部 A4	3.6	25.9		普通 (3mm以下の石英・ 長石・赤炭等を多く含む)	普通	断面: コナテ 内面: コナテ後、ナテ面し 断面内面: コナテ	内面: 淡茶褐色 外面: 黄褐色 断面: 淡茶褐色	1/4程度	

第40表 西1遺跡 A-1区 段状遺構5床面出土鉄製品観察表

拝訪番号	器種	寸法 (cm)			備考
		長さ	幅	最大巾	
2401-19	釘	2.3	0.4	0.9	

第41表 西I遺跡A-1区 段状遺構5覆土出土遺物観察表 (太字数字は確定値; 明朝体数字は復元値)

探検番号	遺構	寸法 (m)			土質	焼成	調整	色調	残存度	備考
		長さ	口幅	高さ						
2500-1	惣惣跡 軒高 A4	4.0	12.8		密 (1.0m以下の灰石・石英等を含む)	やや不良	天井部: 浅く厚さの小さい凹型ヘラケズリ 口縁部: 厚型ヨコナガ 天井内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	内面: 暗褐色 外: 断面: 暗褐色	1/2	出雲4期 TK309
2500-2	塚山跡 軒高 A4	4.1	13.1		密 (0.5m以下の灰石を 含む)	やや不良	天井部: 凹型ヨコナガ 口縁部: 厚型ヨコナガ 天井内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	内面: 淡褐色 外: 断面: 淡褐色 断面: 淡褐色	2/3	出雲4期 TK309
2500-3	塚山跡 軒高 A6	4.5	13.3		普通 (1.5m以下の灰石 等をやや多く含む)	普通	天井部: ヘラケコシのまじり 口縁部: 厚型ヨコナガ 天井内側: 凹型ヨコナガ 不定方向ナダ	全面: 暗褐色	2/5	出雲4期 TK309
2500-4	惣惣跡 軒高 A4	4.2	13.1		密 (1.0m以下の灰石・石 英を含む)	良好	口縁部: 厚型ヨコナガ 天井部: 凹型ヘラケズリ	内: 断面: 淡褐色 外側: 暗褐色	1/3	出雲4期 TK309
2500-5	塚山跡 軒高 A3c	4.4	12.5		密 (1.0m以下の灰石・灰 石を含む)	普通	天井部: 凹型ヘラケズリ 天井内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	全面: 暗褐色	90%	出雲4期 TK309
2500-6	惣惣跡 軒高 A5	4.3	12.3		密 (0.5m以下の石・石 英を含む)	不良	口縁部: 厚型ヨコナガ 天井部: 凹型ヘラケズリ 天井内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	全面: 淡褐色	4/5	出雲4期 TK309
2500-7	惣惣跡 軒高 A7	3.9	10.9		密 (1.3m以下の灰石・石 英を含む)	良好	口縁部: 凹型ヨコナガ 天井部: 凹型ヘラケズリ 天井内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	全面: 淡褐色	3/5	出雲3期 TK43
2500-8	土師器 早期口縁部	残高	3.6	18.4	やや粗 (2.0m以下の石・ 灰石・黒色灰を多く含む)	良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	全面: 淡褐色	上半部1/2	
2500-9	土師器 早期口縁部	残高	9.7	18.9	やや粗 (3.0m以下の石・ 灰石・黒色灰を多く含む)	良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	内面: 暗褐色 外側: 淡褐色 断面: 淡褐色	上半部1/2	
2500-10	土師器 早期口縁部	残高	4.6	18.0	やや粗 (1.5m以下の石・ 灰石等を多く含む)	良好	口縁部: ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	内面: 暗褐色 外側: 淡褐色 断面: 淡褐色	口縁部1/4	
2500-11	土師器 早期口縁部	残高	8.4	16.9	やや粗 (1.5m以下の石・ 灰石等を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナガ 断面: 4~5条/cmのチチナハナ 断面内側: 凹型ヨコナガ 断面内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	全面: 暗褐色	上半部1/3	
2500-12	土師器 早期口縁部	残高	6.6	21.8	やや粗 (3.0m以下の石・ 灰石等を多く含む)	普通	口縁部: 厚型ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: 凹型ヨコナガ 断面内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	内面: 淡褐色 外側: 淡褐色 断面: 淡褐色	口縁部1/4	
2500-13	土師器 早期口縁部	残高	6.8	17.4	粗 (3.0m以下の石・灰 石等を多く含む)	やや良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	内面: 淡褐色 外側: 断面: 淡褐色	上半部1/2	
2500-14	土師器 早期口縁部	残高	4.3	16.4	普通 (1.5m以下の石・ 灰石・黒色灰を含む)	普通	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	全面: 淡褐色	口縁部1/5	
2500-15	土師器 早期口縁部	基底	5.6	16.3	やや粗 (1.5m以下の石・ 灰石・黒色灰を多く含む)	やや良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	全面: 淡褐色	口縁部1/5	
2500-16	土師器 早期口縁部	残高	8.5	16.4	普通 (3.0m以下の石・ 灰石・黒色灰を含む)	やや不良	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	全面: 淡褐色	口縁部1/4	
2500-17	土師器 早期口縁部	残高	6.9	18.4	やや粗 (4.0m以下の石・ 灰石・黒色灰等を多く含む)	良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	内面: 淡褐色 外側: 断面: 淡褐色 断面: 淡褐色	上半部2/3	
2500-18	土師器 早期口縁部	残高	4.0	24.6	やや粗 (2.5m以下の石・ 灰石等を多く含む)	良好	口縁部: ヨコナガ	内: 断面: 淡褐色 外側: 断面: 淡褐色	口縁部1/4	
2500-19	土師器 早期口縁部	残高	26.3	16.6	普通 (2.0m以下の石・ 灰石・黒色灰等を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ 断面内側: 凹型ヨコナガ 断面内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	全面: 淡褐色	2/3	
2500-20	土師器 早期口縁部	残高	6.0	17.3	やや粗 (1.5m以下の石・ 灰石等を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	全面: 淡褐色	口縁部1/5	
2500-21	土師器 早期口縁部	残高	7.6	26.2	普通 (1.0m以下の石・ 灰石・黒色灰等を多く含む)	やや良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	内: 外側: 淡褐色 断面: 淡褐色	口縁部1/4	
2500-22	土師器 早期口縁部	残高	3.8	16.8	やや粗 (2.0m以下の石・ 灰石等を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	全面: 淡褐色	口縁部1/4	
2500-23	土師器 早期口縁部	残高	4.8	14.8	やや粗 (2.0m以下の石・ 灰石・黒色灰等を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	全面: 淡褐色	断面1/5	内外面 一部
2500-24	土師器 早期口縁部	残高	3.1	14.8	やや粗 (2.0m以下の石・ 灰石等を多く含む)	やや良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ 断面内側: 凹型ヨコナガ 断面内側: 凹型ヨコナガ後、不定方向ナダ	内: 外側: 淡褐色 断面: 淡褐色	断面4/5	内外面 一部
2500-25	土師器 早期口縁部	残高	5.1		やや粗 (2.0m以下の石・ 灰石等を多く含む)	良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	断面: 断面: 淡褐色 断面: 淡褐色	断面1/5	内外面 一部
2500-26	土師器 早期口縁部	残高	4.4		やや粗 (2.0m以下の石・ 灰石・黒色灰等を多く含む)	やや良好	口縁部: ヨコナガ 断面: 厚型ヨコナガ 断面内側: ヨコナガのヘラケズリ	全面: 淡褐色	口縁部1/5	



H=55.50m



第27図 西1遺跡 A-1区 下段小規模ビット群・A-2・3区 中段横列1実測図 (S=1/60)

第42表 西I遺跡A-1区 小規模ピット群ピット計測表

ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P1	P15	0.19	0.16	0.11	53.57	P16	P19	0.13	0.07	0.19	53.56
P2	P28	0.26	0.1	0.1	53.8	P17	P4	0.16	0.15	0.13	53.72
P3	P14	0.15	0.14	0.21	53.63	P18	P21	0.18	0.13	0.07	53.71
P4	P13	0.23	0.2	0.13	53.73	P19	P22	0.15	0.1	0.07	53.64
P5	P27	0.14	0.1	0.06	53.79	P20	P23	0.18	0.1	0.09	53.57
P6	P12	0.2	0.17	0.14	53.73	P21	P24	0.16	0.14	0.14	53.45
P7	P11	0.23	0.18	0.13	53.75	P22	P7	0.26	0.18	0.15	53.33
P8	P10	0.3	0.22	0.17	53.71	P23	P8	0.23	0.18	0.09	53.32
P9	P6	0.24	0.24	0.17	53.72	P24	P9	0.21	0.18	0.09	53.4
P10	P5	0.23	0.16	0.07	53.85	P25	P25	0.15	0.13	0.07	53.53
P11	P3	0.17	0.12	0.06	53.87	P26	P26	0.13	0.07	0.08	53.31
P12	P20	0.15	0.13	0.04	53.85	P27	P16	0.19	0.14	0.07	53.32
P13	P2	0.21	0.16	0.07	53.84	P28	P17	0.23	0.19	0.2	53.18
P14	P1	0.21	0.15	0.11	53.79	P29	P29	0.17	0.14	0.24	53.01
P15	P18	0.15	0.13	0.08	53.74	P30	P30	0.14	0.13	0.08	53.32

第43表 西I遺跡A-3区 構列1付近ピット計測表

ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P1	P3	0.26	0.26	0.26	54.95	P8	P7	0.25	0.24	0.2	54.94
P2	P4	0.22	0.22	0.15	55.08	P9	P8	0.23	0.18	0.16	54.94
P3	P5	0.22	0.19	0.17	55.15	P10	P9	0.3	0.3	0.11	54.95
P4	P13	0.23	0.2	0.15	55.11	P11	P10	0.33	0.31	0.29	54.89
P5	P14	0.21	0.18	0.17	55.16	P12	P2	0.2	0.14	0.27	55.15
P6	P11	0.25	0.2	0.15	55.16	P13	P1	0.29	0.23	0.37	55.14
P7	P6	0.22	0.21	0.31	54.85	P14	P12	0.32	0.22	0.26	55.53

第44表 西I遺跡A-3区 構列1計測表

規模(m)	往間5間(全長7.3m)				
柱間距離(m)	P1-P2	P2-P3	P3-P4	P4-P5	P5-P6
	1.05	1.29	1.78	1.58	1.5

A-1区下段・小規模ピット群

調査区の北西隅で確認したもので、直径0.2cm、深さ0.07~0.2cm程度の小ピットが群集するものである。平面的に見るとP2~P15に至る15個前後のピット群は緩やかな弧状のラインを取りながら不規則に並んでおり、その下方斜面に15個前後のピットが不規則に存在している。P2~P15間の距離は6.05mである。このピット群は南西部の確認面標高が53.95mであり、東部確認面標高が53.24mと、比高差が0.7mあり、床面がフラットではない。これらの条件から通常の掘立柱建物などは想定しがたく、簡易なテント状の構造を持つ建物の可能性が考えられる。

構列1

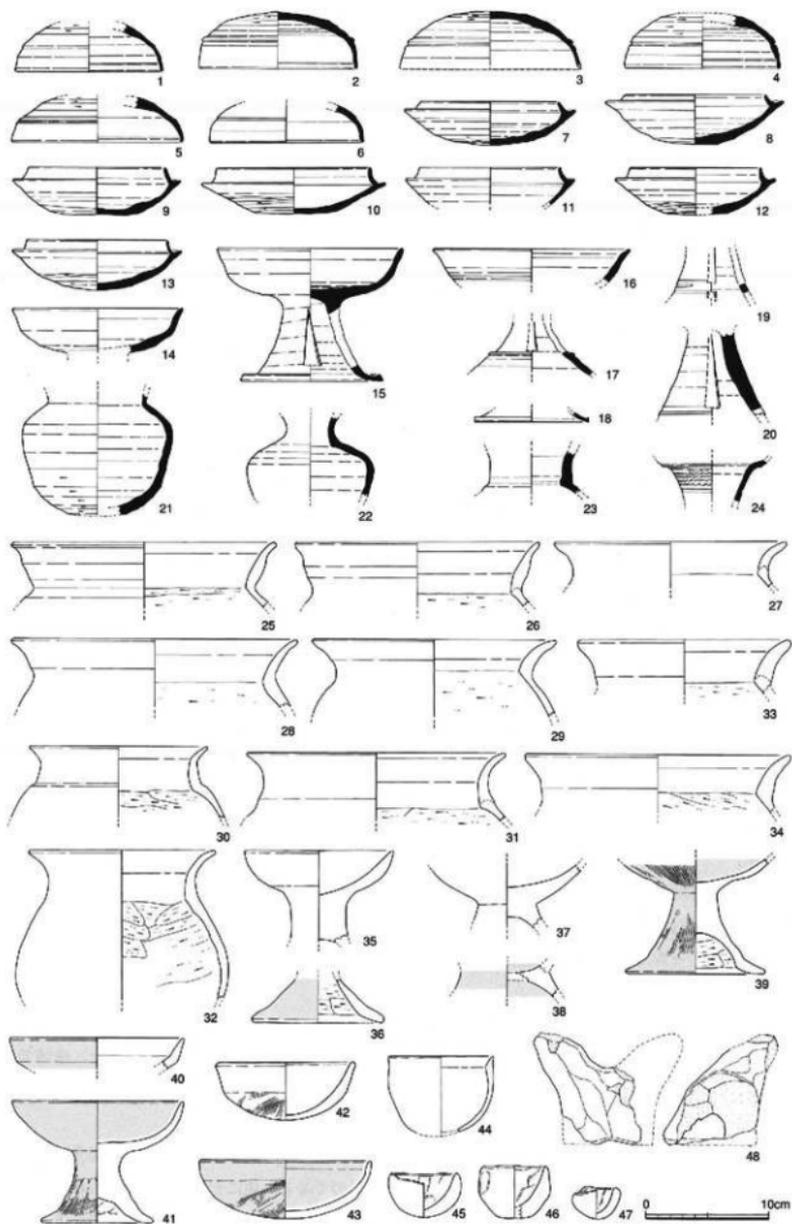
構列1は段状遺構1・掘立柱建物1と段状遺構3の中間の標高55.2m付近に位置する構列状遺構である。軸線は等高線とほぼ並行するN-78°-Wであるが、これは段状遺構1・掘立柱建物1の軸線N-77°-Wに値が近く、掘立柱建物1に付随する施設の可能性がある。構列のP1~P6間の全長は7.3mである。

A-1・2・3区下段・下段斜面出土遺物

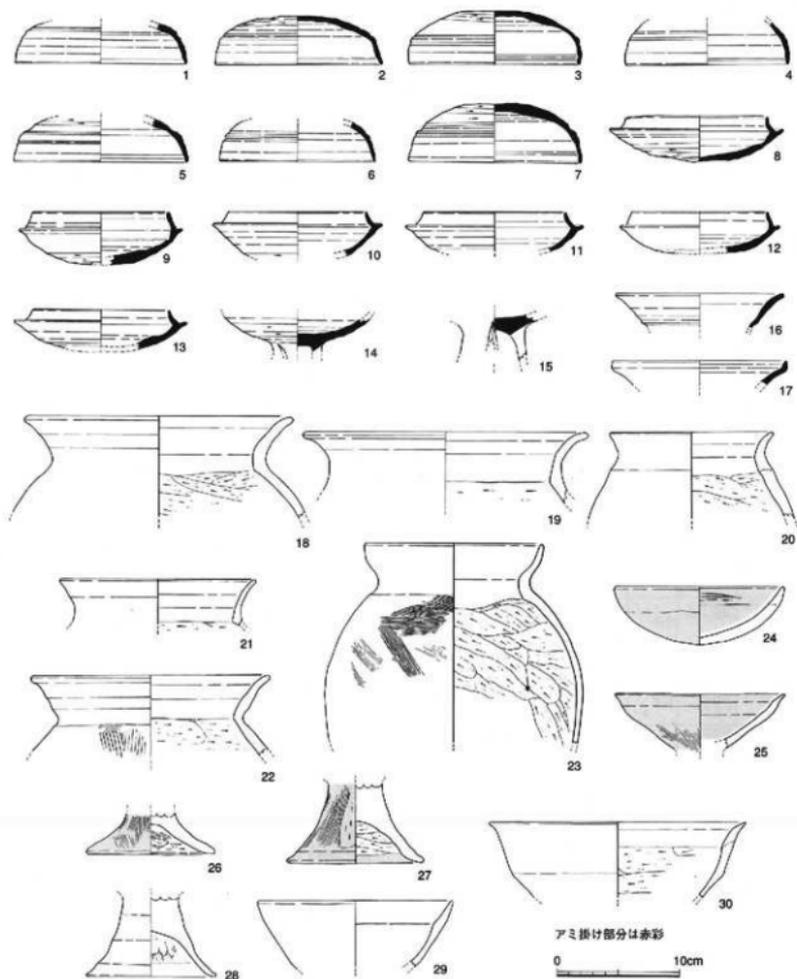
A区下段・下段斜面には多くの遺物が転落しており、最も遺物量の多い地域であった。確認できたものとして、須恵器杯身40個体、杯蓋39個体を数えたほか、土師器蓋(口縁部残存個体でカウント)は172個体にはのぼった。

第28図-48は土製支脚と考えられる土製品であるが、胴部が短い個体で、7世紀代に出雲地域平野部で盛行する胴部が長いタイプとは形状を異にするものである。他に土製支脚と考えられる個体が存在しないことから、土製支脚の初源と移動式竈とのセット関係などを探る上で重要である。

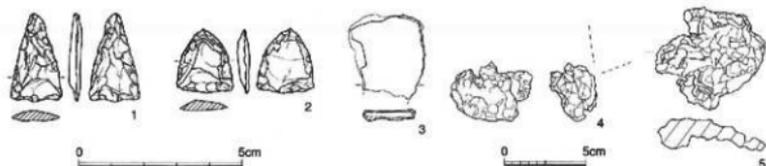
第30図-4・5は羽口端部と湾形滓である。4は鍛錬鍛冶炉に付属する羽口で、炉内の燃焼部に



第28图 西1遺跡A-1区 下段・下段斜面包含層出土遺物実測図 (S=1/4)



第29図 西I遺跡A-2・3区 下段・下段斜面包含層出土遺物実測図 (S=1/4)

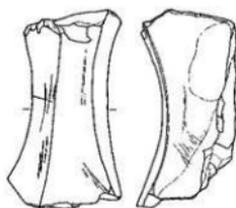


第30図 西I遺跡A-1・2・3区 下段・下段斜面包含層出土遺物実測図 (S=石製品2/3・鉄滓1/3)

接する下部部に付着した滓である。5は鍛錬鍛冶操作によって炉底に形成された碗形滓である。鍛冶炉遺構については調査区内では確認できなかった。

この包含層中においても大谷4・5期の遺物で占められており、集落本体も大谷5期のうちに廃絶したことがうかがわれる。

第31図-1は凝灰岩製の砥石である。よく使い込まれており、鎌・刀子などの研磨に用いられたものと考えられる。段状遺構もしくは4から転落したものと考えられる。



0 10cm

第31図 西I遺跡A-2区 下段包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

第45-1表 西I遺跡A-1区下段・下段斜面出土遺物観察表1 (太字数字は確定値; 明朝体数字は便宜値)

探検番号	器種	寸法 (cm)			出土	地層	調査	色調	残存率	備考
		高さ	口径	底径						
2204-1	須恵系 杯身 A3a	2.9	11.7		甕 (0.5cm以下の石炭・ 黒石等を含む)	良好	天部部外面: 甕転ヘラクスリ 口縁部; 甕転ヨコナテ 口縁部内面: 甕転を施す	内・外面: 濃灰色 断面: 暗灰色	1/2	出雲3期 TK43
2204-2	須恵系 杯身 A3a	4.7	12.6		甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	良好	天部部外面: 甕転ヘラクスリ 口縁部; 甕転ヨコナテ 内面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ	全面: 淡黄灰色	1/2	出雲3期 TK43
2204-3	須恵系 杯身 A4	4.5	11.4		甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	やや良好	天部部外面: 甕転ヘラクスリ 口縁部; 甕転ヨコナテ 内面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ	全面: 淡黄灰色	1/2	出雲4期 TK209
2204-4	須恵系 杯身 A3a	4.6	12.4		甕 (0.5cm以下の石炭を わずかに含む)	良好	天部部外面: 甕転ヘラクスリは 広い範囲を有する 口縁部; 甕転ヨコナテ 天部部内面: 甕転ヨコナテ後、不 定方向ナテ	内・外面: 濃灰色 断面: 灰白色	1/3	出雲3期 TK43
2204-5	須恵系 杯身 A4	3.7	13.6		甕 (0.5cm以下の石炭を わずかに含む)	良好	天部部外面: 甕転ヘラクスリ後、 口縁部; 甕転ヨコナテ 口縁部; 甕転ヨコナテ	内・外面: 濃灰色 断面: 濃灰色	1/3	出雲4期 TK209
2204-6	須恵系 杯身 A6	3.1	12.2		甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	良好	口縁部; 甕転ヨコナテ	内面: 淡黄灰色 外面: 灰白色 断面: 淡灰色	1/5	出雲4期 TK209
2204-7	須恵系 杯身 A3	3.6	11.1	13.4	甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	良好	口縁部; 甕転ヨコナテ 外周部底; 比較的1/4寸角転ヘラ クスリ 内面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ	内・外面: 明灰色 断面: 灰白色	1/4	出雲3期 TK43
2204-8	須恵系 杯身 A6	4.1	11.2		甕 (1cm以下の石炭を含む)	良好	外周部底; 甕転ヘラクスリ後、ナテ 口縁部; 甕転ヨコナテ 底面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ	内・外面: 淡灰色 断面: 淡灰色	90%	出雲4期 TK209
2204-9	須恵系 杯身 A3	3.9	10.9		甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	良好	外周部底: 甕転ヘラクスリ後、ナテ 口縁部; 甕転ヨコナテ 内面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ	内・外面: 淡灰色 断面: 淡灰色	1/2	出雲4期 TK209
2204-10	須恵系 杯身 A5	3.8	12.4		甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	良好	口縁部; 甕転ヨコナテ 外周部底; 良く磨かれた甕転ヘラ クスリ、磨かれた甕転ヘラクスリ 内面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ	全面: 淡黄灰色	1/3	出雲4期 TK209
2204-11	須恵系 杯身 A5	3.1	11.2		甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	普通	口縁部; 甕転ヨコナテ	内・外面: 淡灰色 断面: 淡灰色	1/5	出雲4期 TK209
2204-12	須恵系 杯身 A5	3.9	10.5		甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	良好	外面: 甕転ヨコナテ 表面部底; 良く磨かれた甕転ヘラ クスリ 内面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ	内・外面: 淡黄灰色 断面: 淡灰色	1/3	出雲4期 TK209
2204-13	須恵系 杯身 A5	4.2	11.3		甕 (1.5cm以下の石炭等 を含む)	良好	外面: 甕転ヨコナテ 内面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ 底面: 良く磨かれたヘラクスリ	内面: 淡灰色 外面: 淡灰色 断面: 淡灰色	1/2	出雲4期 TK209
2204-14	須恵系 杯身 A5	3.8	13.8		甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	良好	口縁部; 甕転ヨコナテ 外周部底; 良く磨かれた甕転ヘラ クスリ 内面: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ	内面: 淡灰色 外面: 淡灰色 断面: 淡灰色	1/4	出雲4期 TK209
2204-15	須恵系 杯身 A4	10.9	14.8	11.2	甕 (1cm以下の石炭等 を含む)	良好	杯底: 甕転ヨコナテ 杯底: 甕転ヨコナテ後、不定方向 ナテ 杯底: 良く磨かれたヘラクスリ	内面: 淡灰色 外面: 淡灰色 断面: 淡灰色	90%	出雲4期 TK209
2204-16	須恵系 杯身 A4	12.8	15.7		甕 (0.5cm以下の石炭・黒石 を含む)	やや不良	口縁部; 甕転ヨコナテ	内・外面: 淡灰白色 断面: 淡灰色	1/8	出雲4期 TK209
2204-17	須恵系 杯身 D2	4.4			甕 (1.0cm以下の石炭・黒石 を含む)	普通	杯底内外面: 甕転ヨコナテ	全面: 淡黄灰色	1/5	出雲4期 TK43
2204-18	須恵系 杯身 A4	0.8	9.2		甕 (0.5cm以下の石炭を 含む)	良好	杯底内外面: 甕転ヨコナテ	内面: 淡黄灰色 外面: 淡灰白色 断面: 淡灰色	1/5	出雲4期 TK43
2204-19	須恵系 杯身 A4	3.6			甕 (1cm以下の石炭・黒石 を含む)	良好	杯底内外面: 甕転ヨコナテ	内面: 淡黄灰色 外面: 淡灰白色 断面: 淡灰色	1/5	出雲5期 TK217

第45-2表 西I遺跡A-1区 下段・下段斜面出土土物観察表2 (太字数字は確定値；明朝体数字は復元値)

調査番号	器種	寸法 (cm)			胎土	発成	調整	色調	残存度	備考
		高さ	口径	底径						
28R0-20	灰冠型 底面平盤形 片蓋	残高	6.9		底1mm以下の石灰・炭石を含む	良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 外面：黄褐色	新装1/3	西京3期 TK43
28R0-21	灰冠型 底面平盤形	残高	10.1		胎壁 (1.5cm以下の石灰・炭石を含む)	やや不良	胎内：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ 胎底：黒鉛コゴナテ	全面：黄褐色	新装1/3	西京3期 TK43
28R0-22	灰冠型 小口径	残高	6.6	19.5	胎 (1mm以下の炭石を含む)	やや良好	胎内：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；炭石灰色 外面：炭石灰色	上半部1/2	
28R0-23	灰冠型 底面平盤形	残高	3.6		胎 (0.5cm以下の石灰等を含む)	良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；暗褐色 外面：黄褐色	新装1/3	西京4期 TK200
28R0-24	灰冠型 胎A5	残高	3.5		胎壁 (0.3cm以下の石灰等を含む)	良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ 胎底：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黒鉛コゴナテ	新装1/2	
28R0-25	土師器 平口門鉢	残高	5.3		胎壁 (1.5cm以下の石灰・炭石・金砂を含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁1/4	
28R0-26	土師器 平口門鉢	残高	5.3	20.9	胎壁 (1.5cm以下の石灰・炭石・金砂を含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁1/5	
28R0-27	土師器 平口門鉢	残高	3.8	18.5	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石等も多く含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	全面：黄褐色	胎縁1/6	
28R0-28	土師器 平口門鉢	残高	5.5	22.9	粗 (2mm以下の石灰・炭石等も多く含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁1/3	
28R0-29	土師器 平口門鉢	残高	6.3	19.5	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石等も多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	上半部1/3	
28R0-30	土師器 平口門鉢	残高	3.8	14.1	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石・金砂等を含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁1/3	
28R0-31	土師器 平口門鉢	残高	3.6	20.6	やや粗 (1.5cm以下の石灰・炭石・金砂等も多く含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁1/4	
28R0-32	土師器 平口門鉢	残高	12.3	14.8	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石・黒色粒を多く含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	上半部1/5	
28R0-33	土師器 平口門鉢	残高	4.5	16.8	やや粗 (2.5cm以下の石灰・炭石等も多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁1/6	
28R0-34	土師器 平口門鉢	残高	4.8	21.2	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石等も多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	内：黄褐色；黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁1/6	
28R0-35	土師器 片蓋	残高	7.5	11.9	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石等も多く含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	新装1/3	
28R0-36	土師器 赤銅丸形	残高	3.6	10.3	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石等も多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	新装1/3	胎外外面 赤銅
28R0-37	土師器 片蓋	残高	5.3		粗 (3mm以下の石灰・炭石等を多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁部	
28R0-38	土師器 赤銅丸形	残高	2.6		やや粗 (1.5cm以下の石灰・炭石等も多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁部1/2	全面赤銅
28R0-39	土師器 赤銅丸形	残高	0.5	11.0	やや粗 (2cm以下の石灰・炭石等も多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	2/3	胎内内面 以外は赤銅
28R0-40	土師器 赤銅丸形	残高	2.6	13.8	やや粗 (1.5cm以下の石灰・炭石等も含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	胎縁1/6	胎外赤銅
28R0-41	土師器 赤銅丸形	残高	10.0	13.6	やや粗 (1.5cm以下の石灰・炭石等を含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	2/3	胎内内面 以外は赤銅
28R0-42	土師器 片蓋	残高	4.8	10.3	粗 (3mm以下の石灰・炭石等を多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	1/6	
28R0-43	土師器 赤銅丸形	残高	4.8	13.7	やや粗 (3mm以下の石灰・炭石等も多く含む)	やや良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	1/4	全面赤銅
28R0-44	土師器 片蓋	残高	6.5	8.4	やや粗 (1.5cm以下の石灰・炭石等も含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	4/5	胎縁は赤銅
28R0-45	土師器 赤銅丸形	残高	3.6	5.3	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石等も含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	3/4	
28R0-46	土師器 赤銅丸形	残高	4.3	4.8	普通 (2mm以下の石灰・炭石等も含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	1/5	
28R0-47	土師器 赤銅丸形	残高	2.4	3.0	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石等も含む)	普通	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	1/2	
28R0-48	土師器 赤銅丸形	残高	9.1	6.8	やや粗 (2mm以下の石灰・炭石等も含む)	良好	胎内内面：黒鉛コゴナテ 胎外外面：黒鉛コゴナテ	胎内：黄褐色 胎外：黄褐色	1/2	

第46—1表 西I遺跡A—2・3区 下段・下段斜面出土遺物観察表1 (太子数字は確定値; 明朝体数字は復元値)

探検番号	器種	寸法 (cm)		胎土	焼成	調整	色調	保存度	備考
		高さ	口径						
2000-1	須恵器 杯蓋 A3a	残高	3.4	13.6	密 (1.5cm以下の石灰・ 石灰を多く含む)	良好	体部: 刷毛コナテ 内・外側: 褐色灰色 断面: 褐色灰色	1/5	出雲3期 TK45
2000-2	須恵器 杯蓋 A4	残高	4.1	13.3	密 (1.5cm以下の石灰・ 長石を含む)	良好	外側部: ヘウリ厚。ナテ 外側部: 刷毛コナテ 口縁部: 刷毛コナテ 内側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ後、不定方向 ナテ	4/5	出雲4期 TK209
2000-3	須恵器 杯蓋 A4	残高	3.4	13.5	普通 (2mm以下の石灰・ 長石を含む)	良好	外側部: やや微細な刷毛コナテ 外側部中央はナテ残す 口縁部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ後、不定方向 ナテ	2/3	出雲4期 TK209
2000-4	須恵器 杯蓋 A6	残高	3.5	13.0	やや密 (1.5cm以下の石灰・ 長石を含む)	良好	口縁部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ	1/5	出雲4期 TK209
2000-5	須恵器 杯蓋 A5	残高	3.6	13.8	密 (1cm以下の石灰・長石 を含む)	良好	体部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ	1/8	出雲4期 TK209
2000-6	須恵器 杯蓋 A5	残高	3.3	12.5	普通 (0.5cm以下の長石・ 長石をわずかに含む)	良好	体部: 刷毛コナテ 外側部: 自然釉が付着	1/5	出雲4期 TK209
2000-7	須恵器 杯蓋 A3a	残高	4.9	13.7	やや密 (2mm以下の石灰・ 長石を含む)	普通	外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 外側部: 自然釉が付着	1/2	出雲3期 TK45
2000-8	須恵器 杯蓋 A3	残高	3.8	11.4	普通 (1.5cm以下の石灰・ 石灰を多く含む)	良好	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/6	出雲3期 TK45
2000-9	須恵器 杯蓋 A3	残高	4.4	10.8	やや密 (1.5cm以下の石灰・ 石灰を多く含む)	良好	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/3	出雲3期 TK45
2000-10	須恵器 杯蓋 A3	残高	3.7	11.7	密 (1.5cm以下の石灰・ 長石を含む)	良好	体部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ	1/6	出雲3期 TK45
2000-11	須恵器 杯蓋 A5	残高	3.3	11.4	密 (1.5cm以下の石灰・ 石灰を多く含む)	良好	体部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ	1/5	出雲3期 TK45
2000-12	須恵器 杯蓋 A5	残高	3.5	10.9	密 (0.5cm以下の長石・ 石灰を含む)	良好	体部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/4	出雲3期 TK45
2000-13	須恵器 杯蓋 A5	残高	3.6	11.0	密 (0.5cm以下の長石等 を含む)	良好	体部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/6	出雲3期 TK209
2000-14	須恵器 杯蓋 A3	残高	2.8		密 (1cm以下の石灰・石 灰を含む)	やや不良	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ		刷毛のみ TK45
2000-15	須恵器 杯蓋 A4	残高	4.0		密 (1cm以下の長石・石 灰を含む)	やや不良	体部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ		刷毛のみ TK209
2000-16	須恵器 杯蓋 A7	残高	2.8	13.5	密 (0.5cm以下の長石・ 長石をわずかに含む)	不良	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ	1/5	出雲2期 TK247
2000-17	須恵器 杯蓋 A5	残高	2.1	13.9	密 (0.5cm以下の長石 を含む)	良好	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ	1/5	出雲2期 TK247
2000-18	須恵器 杯蓋 A5	残高	3.4	21.6	普通 (2mm以下の石灰・ 長石・赤色灰を含む)	やや良好	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/2	出雲2期 TK247
2000-19	須恵器 杯蓋 A5	残高	6.9	22.6	やや密 (2mm以下の長石・ 長石・黒色灰を多く含む)	普通	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/3	出雲2期 TK247
2000-20	須恵器 杯蓋 A5	残高	7.1	13.0	やや密 (2mm以下の長石・ 長石・黒色灰を多く含む)	普通	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/3	出雲2期 TK247
2000-21	須恵器 杯蓋 A5	残高	3.8	13.6	やや密 (2mm以下の石灰・ 長石を多く含む)	やや良好	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/4	出雲2期 TK247
2000-22	須恵器 杯蓋 A5	残高	6.7	18.0	やや密 (1.5cm以下の石灰・ 長石・赤色灰を含む)	普通	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/2	出雲2期 TK247
2000-23	須恵器 杯蓋 A5	残高	16.3	14.3	普通 (1.5cm以下の石灰・ 長石・赤色灰を含む)	良好	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/2	出雲2期 TK247
2000-24	須恵器 杯蓋 A5	残高	4.8	13.3	普通 (1.5cm以下の石灰・ 長石・赤色灰を含む)	やや良好	口縁部: 刷毛コナテ 外側部: 刷毛コナテ 内面: 刷毛コナテ 断面: 刷毛コナテ後、不定 方向ナテ	1/2	出雲2期 TK247

第46-2表 西I遺跡A-2・3区 下段・下段斜面出土遺物観察表2 (太字数字は確定値；明朝体数字は復元値)

発掘番号	器種	寸法 (cm)			胎土	焼成	調整	色調	残存度	備考
		高さ	口径	底径						
3001-25	土師器 赤彩高杯	残高 4.5	13.6		やや粗 (1.5cm以下の石英・長石等を含む)	普通	口縁部；口コナデにより細く仕上げられる 腹部外周；6条/cmのクアハナ内周中へ下位；ナデ	内面；復原色 外面；淡赤褐色 底面；灰褐色	断面1/3	全面赤彩
3004-30	土師器 赤彩高杯	残高 3.3		10.1	普通 (2cm以下の石英・長石等を含む)	普通	腹部外周；5条/cmのクアハナ 断面部；口コナデ 腹部内周；3.0cm以下のクアハナ 調整；粗いハケ調整	内面；暗褐色 外面；暗褐色 断面；灰褐色	断面5/6	断面外周赤彩
3002-27	土師器 赤彩高杯	残高 6.6		10.5	普通 (1.5cm以下の石英・長石・金文等を含む)	普通	腹部外周；6条/cmのクアハナ 断面部；口コナデより細く仕上げられる 腹部内周；3.0cm以下のクアハナ 調整；口コナデ	内面；復原色 外面；灰褐色	断面1/2	断面外周赤彩
3001-28	土師器 高杯	残高 6.5		10.2	やや粗 (1.5cm以下の石英・長石をやや多く含む)	普通	腹部外周；口コナデ 断面部；口コナデ 調整；口コナデで磨いた後、エビナデ	全面；淡褐色 断面の一部に黒斑	断面2/3	
3001-29	土師器 高杯	残高 5.5	15.7		やや粗 (1.5cm以下の石英・長石を多く含む)	普通	口縁部；唇部；やや粗いナデ 調整内周；ヘラタスリ?	内面；淡褐色 外面；淡赤褐色 断面；淡赤褐色	上半部1/6	
3001-30	土師器 高杯	残高 6.2	20.5		普通 (1.5cm以下の石英・長石等を含む)	普通	口縁部；口コナデ 断面部；口コナデ 調整内周；ヘラタスリ?のため一部不明 内面；3.0cm以下のクアハナ	内面；淡赤褐色 外周；淡赤褐色	上半部1/4	

第47表 西I遺跡A-2・3区 下段・下段斜面出土石器観察表

発掘番号	器種	寸法 (cm)			石材	重量 (g)	特徴	残存度	備考
		長さ	巾	最大厚					
3001-1	平ら無刃石器	2.75	1.55	0.300	安山岩	1.36	赤土ともに一次調整面を有す	先端欠損	
3001-2	平ら三角石器	2	1.75	0.33	安山岩	1.09	赤土ともに一次調整面を大きく残し、古い調整面	欠損	

第48表 西I遺跡A-2・3区 下段・下段斜面出土鉄製品観察表

発掘番号	器種	寸法 (cm)			特徴	残存度	備考
		長さ	巾	最大厚			
3001-3	不明鉄製品	3.2	4.7	0.6	刃部をもたず鋸歯状面をもっている		

第49表 西I遺跡A-2・3区 下段・下段斜面出土鉄鍔観察表

発掘番号	器種	寸法 (cm)			特徴	残存度	備考
		長さ	巾	最大厚			
3001-4	鍔口	4.8	2.9	3.6	刃口先端の下部に付着した溶け	刃口欠損	
3001-5	鍔形片	6.3	6.7	3.8	メタル層 なし		

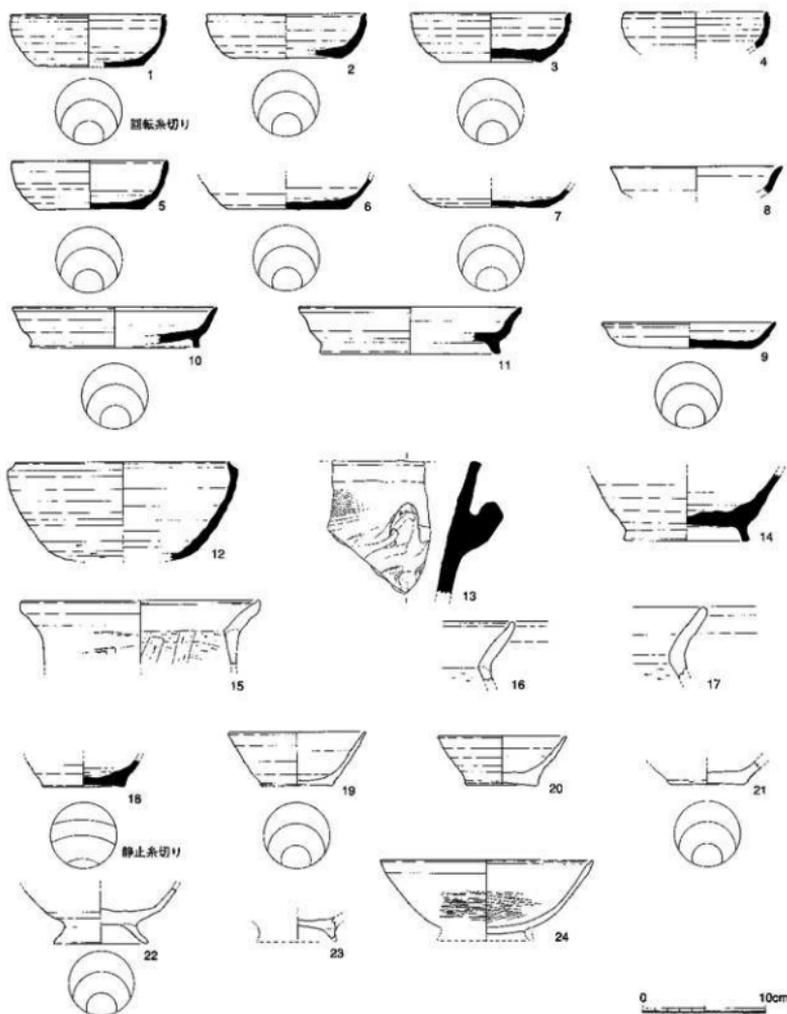
第50表 西I遺跡A-2・3区 下段・下段斜面出土土製品観察表

発掘番号	器種	寸法 (cm)			石材	重量 (g)	特徴	色調	残存度	備考
		長さ	最大幅	最小幅						
3101-1	磁石	12.2	6.9	3.4	赭灰岩	437	6面のうち4面は磨製に使用される	白褐色	定形	

第51表 西I遺跡A区 包含層出土遺物構成表

() は類層のみ残存の個体数

	A-1 上段	A-1 中段	A-1 下段	A-1 下段斜面	A-2 上段	A-2 中段	A-2 下段	A-2 下段斜面	A-3 上段	A-3 中段	A-3 下段	A-3 下段斜面
須虎器・杯身			17	23			11	9			4	2
須虎器・杯蓋			20	19		3	17	14			4	1
須虎器・高杯			4	13			4	4				1
須虎器・大壺		1		13		2	1					1
須虎器・袋瓶						1		2				1
須虎器・横瓶			2									
須虎器・尾		1			1		3	1				
須虎器・直口壺	1		5	2		2					1	
須虎器・長頸壺			1									
土師器・壺			66(84)	106(161)		18(33)	35(23)	37(43)		4(2)	2	9(7)
土師器・赤彩壺				3			1					
土師器・瓶			2	4			1					
土師器・赤彩瓶			3	2			2	4				
土師器・高杯	1	1	9	11			2	3			1	2
土師器・赤彩高杯			7	2		3	3	4				
土師器・瓶			13	10		4	4	3		2		
土師器・子控むろ器			4			2						
土師器・鉢		1	5	2			2	4				
土師支脚			1									
土師器・台付土器					1	6						
赤彩台付土器			1									
鉄滓			2	1				1				
鉄製品			2	2		1						1
石鏃			1	1						1		
スクレイパー								1				
磁石				1								
割片			1					1				

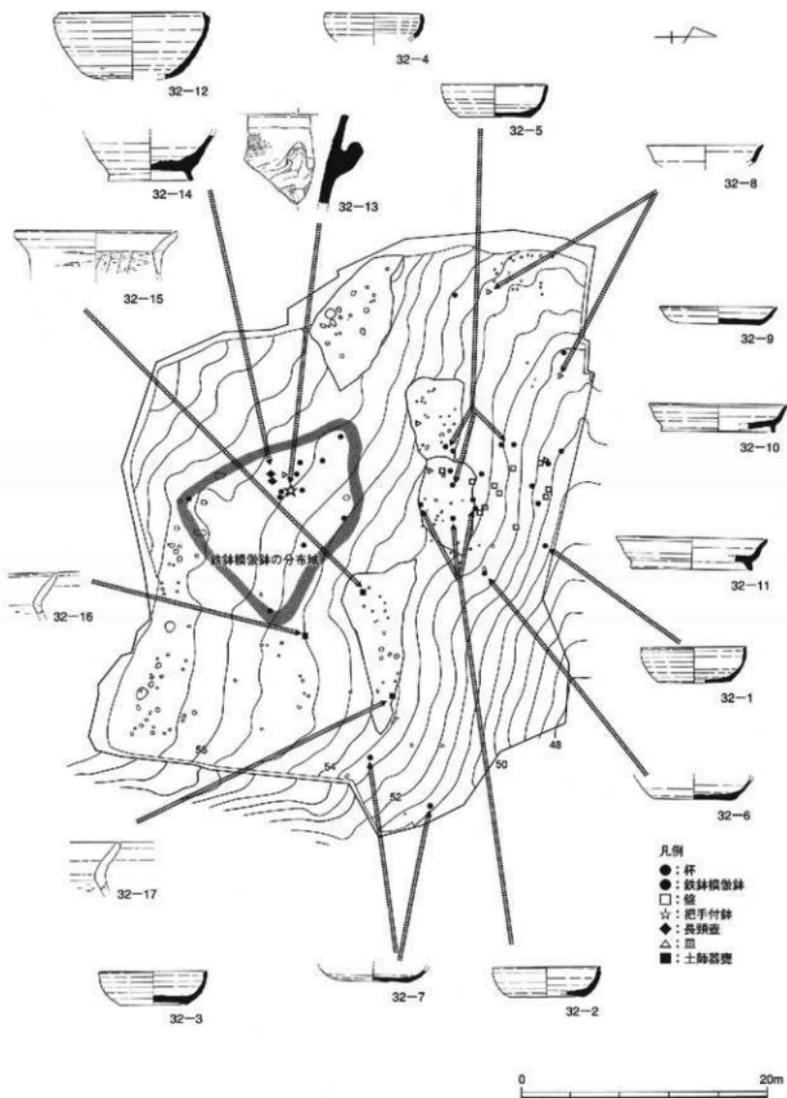


第32図 西I遺跡A区 奈良・平安時代遺物実測図 (S=1/4)

奈良・平安時代の遺物

A区包含層中からは8世紀後半～11世紀前半の須恵器・土師器・黒色土器などが出土している。8世紀の遺物は遺構に伴わないがA-2区中段～下段斜面にかけて分布している。杯身・壺・皿・把手付鉢・鉄鉢模倣鉢・土師器甕など多様な器種構成を示す。

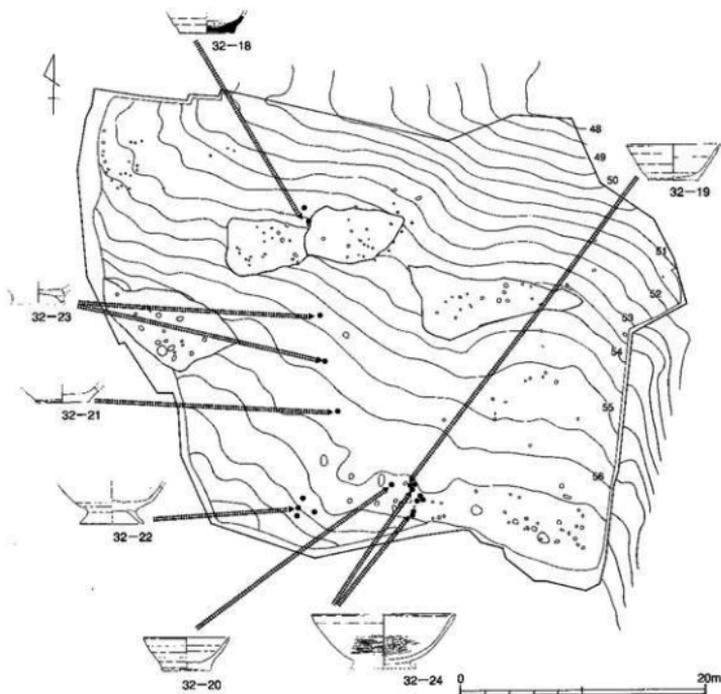
9世紀以降の遺物はA-2区上段包含層を中心に出土しており、須恵器杯身・土師器杯身・土



第33図 西I遺跡A区 奈良時代の遺物分布状況図 (S=1/400・土器1/6)

第52表 西 I 遺跡 A 区 奈良・平安時代の遺物観察表 (太字数字は確定値: 明細体数字は推定値)

調査番号	遺物種別	寸法 (cm)			胎土	焼成	調型	色調	残存度	備考
		器底	口径	底径						
3201-1	須恵器 杯	4.3	12.3		黄 (0.5mm以下の長石等を含む)	良好	体底: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同軸赤切り 底面内周: 同軸ヨコナダ後、不定方向ナリ 口縁縁部は外側に凸なり	内面: 黄褐色 外・外面: 灰褐色	1/5	
3201-2	須恵器 杯	3.6	12.7	8.9	黄 (1.5mm以下の長石を含む)	良好	体底: 同軸ヨコナダ 外周: リ線縁部を外側に凸の 造形外周: 同軸赤切り	内・外面: 黄褐色 外・外面: 灰褐色	1/4	底面は 傾あり
3201-3	須恵器 杯	4.1	12.7	8	黄 (0.5mm以下の長石、 赤色粒を含む)	やや良好	体底: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同軸赤切り 底面内周: 同軸ヨコナダ後、不定方向ナリ	内・外面: 黄褐色 外周: 灰褐色	3/4	外周中に 1.5cmの 欠あり
3201-4	須恵器 杯	3.1	11.4		黄 (0.5mm以下の長石・ 石灰をわずかに含む)	やや良好	口縁部: 同軸ヨコナダ、口縁縁部は 外側に凸	内面: 黄褐色 外周: 黄褐色 外面: 灰褐色	口縁部1/5	
3201-5	須恵器 杯	4.0	12.4	8.5	黄 (1mm以下の長石等を含む)	良好	体底: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同軸赤切り 底面内周: 同軸ヨコナダ後、不定方向ナリ 口縁縁部は外側に凸	内面: 黄褐色 外周: 黄褐色 外面: 灰褐色	1/5	外周に窪 みあり
3201-6	須恵器 杯	2.6	9.5		黄 (1.5mm以下の石灰・ 長石を含む)	普通	体底: 同軸ヨコナダ 底面内周: 同軸ヨコナダ後、不定方向ナリ 底面外周: 同軸赤切り	内・外面: 黄褐色 外周: 灰褐色	1/3	
3201-7	須恵器 杯	1.6	8.2		黄 (0.5mm以下の長石・ 石灰をわずかに含む)	普通	体底: 同軸ヨコナダ 底面内周: 同軸ヨコナダ後、不定方向ナリ 底面外周: 同軸赤切り	内面: 灰褐色 外周: 灰褐色 外面: 黄褐色	底面1/3	
3201-8	須恵器 杯	2.3	14.8		黄 (1mm以下の石灰・長石 を含む)	やや良好	口縁部: 同軸ヨコナダ、口縁縁部は 外側に凸	内・外面: 黄褐色 外周: 灰褐色	口縁部1/6	
3201-9	須恵器 杯	2.1	13.9	9.8	黄 (1.5mm以下の石灰・長石 を含む)	普通	口縁部: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同軸ヨコナダ後、不定方向ナリ 底面内周: 同軸赤切り	内面: 黄褐色 外周: 灰褐色 外面: 黄褐色	1/3	
3201-10	須恵器 高台付盤	3.4	16.4	13.4	やや黄 (1mm以下の長石 等を含む)	普通	体底: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同軸赤切り 底面内周: 同軸ヨコナダ後、不定方向ナリ 口縁縁部は外側に凸	内面: 黄褐色 外・外面: 黄褐色	1/2	内面に径 1.5cmの 窪みあり
3201-11	須恵器 高台付盤	3.9	17.8	14.3	黄 (0.5mm以下の長石等 を含む)	やや不良	体底: 同軸ヨコナダ 口縁縁部は外側に凸	全面: 黄褐色	1/3	
3201-12	須恵器 高台付盤	3.4	17.2	16.5	黄 (1.5mm以下の石灰・長石 を含む)	やや不良	体底: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同軸ヘラタズリ 口縁縁部は内側に凸	内・外面: 黄褐色 外周: 灰褐色	1/3	
3201-13	須恵器 高台付大皿	10.9			黄 (1.5mm以下の長石を 含む)	良好	外周: 他字状タテ 内面: 同心円状とズレ	内・外面: 黄褐色 外周: 灰褐色	口縁部の一 部	
3201-14	須恵器 高台付大皿	5.6			普通 (1mm以下の長石・ 石灰を含む)	良好	内・外面: 同軸ヨコナダ 底面外周: 赤切り後ナリ	内・外面: 黄褐色 外周: 灰褐色	底面のみ	
3201-15	土師器 単口鉢	3.3	19.0		やや黄 (2mm以下の長石・ 石灰・赤色粒を多く含む)	良好	口縁部: 同軸ヨコナダ 外周: タテ方向のイタナリ 底面内周: ヘラタズリ	全面: 黄褐色	口縁部1/8	口縁部は 内側に凹 みをもつ
3201-16	土師器 単口鉢	3.0			やや黄 (2mm以下の長石・ 石灰を多く含む)	普通	口縁部: ヨコナダ 底面内周: ヨコ方向のヘラタズリ	全面: 黄褐色	口縁部1/4	口縁部は 内側に凹 みをもつ
3201-17	土師器 単口鉢	3.9			やや黄 (3mm以下の長石・ 石灰を多く含む)	良好	口縁部: ヨコナダ 底面内周: ヨコ方向のヘラタズリ	内・外面: 黄褐色 外周: 黄褐色	口縁部1/12	
3201-18	土師器 杯	2.2	6.4		黄 (1.5mm以下の石灰・ 長石を含む)	良好	内・外面: 同軸ヨコナダ 底面: 赤切り	内・外面: 黄褐色 外周: 黄褐色	底面のみ	
3201-19	土師器 杯	4.4	11.0	5.7	黄 (0.5mm以下の赤色粒・ 赤色粒をわずかに含む)	普通	体底: 同軸ヨコナダ 外周: 同軸赤切り	全面: 黄褐色	1/3	
3201-20	土師器 杯	4.1	10.2	5.7	黄 (0.5mm以下の石灰・ 赤色粒をわずかに含む)	普通	体底: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同心円状とし、 1.5cm高切りあり	内・外面: 黄褐色 外周: 黄褐色	1/2	
3201-21	土師器 杯	1.9	5.8		黄 (0.5mm以下の赤色粒・ 赤色粒を含む)	普通	体底: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同軸赤切り	全面: 黄褐色	底面1/4	
3201-22	土師器 高台付鉢	4.6	7.3		黄 (0.5mm以下の赤色粒・ 赤色粒を含む)	普通	体底: 同軸ヨコナダ 底面外周: 同軸赤切り後、高台割 合のためヨコナダ	全面: 黄褐色	1/5	
3201-23	土師器 高台付鉢	1.9	5.3		黄 (1mm以下の石灰・長石・ 赤色粒を含む)	普通	全面: 同軸ヨコナダ	内・外面: 黄褐色 外周: 黄褐色	底面1/2	
3201-24	土師器 杯	3.6	17.0		やや黄 (1mm以下の石灰・ 長石・赤色粒・赤色粒を含む)	普通	外周: 同心円状のヨコ方向ヘラ タズリ 内面: 同軸縁部の、丁寧なヘラ タズリ	内面: 黄褐色 外周: 黄褐色 外面: 黄褐色	1/5高台は 欠あり	口縁部は 内側に凹 みをもつ



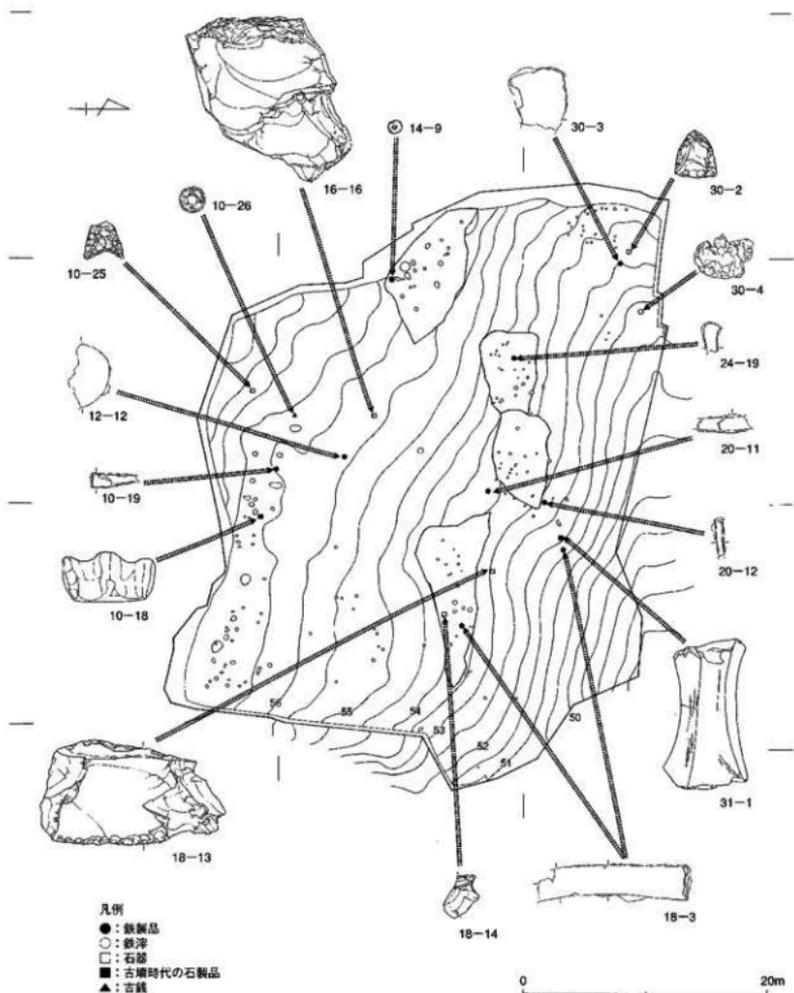
第34図 西1遺跡A区 平安時代の遺物分布状況図 (S=1/400・土器1/6)

第53表 西1遺跡A区 奈良時代の遺物構成表

	A-1 上段	A-1 中段	A-1 下段	A-1 下段斜面	A-2 上段	A-2 中段	A-2 下段	A-2 下段斜面	A-3 上段	A-3 中段	A-3 下段	A-3 下段斜面
土師器壺				1			2		1		1	
須臾器杯身		1	7	4		2	2					1
高台付盤			2			1						
鉄鉢椀蓋鉢						1						
高杯		1										
長瀬壺				1		1						
把手付き大型鉢						1						

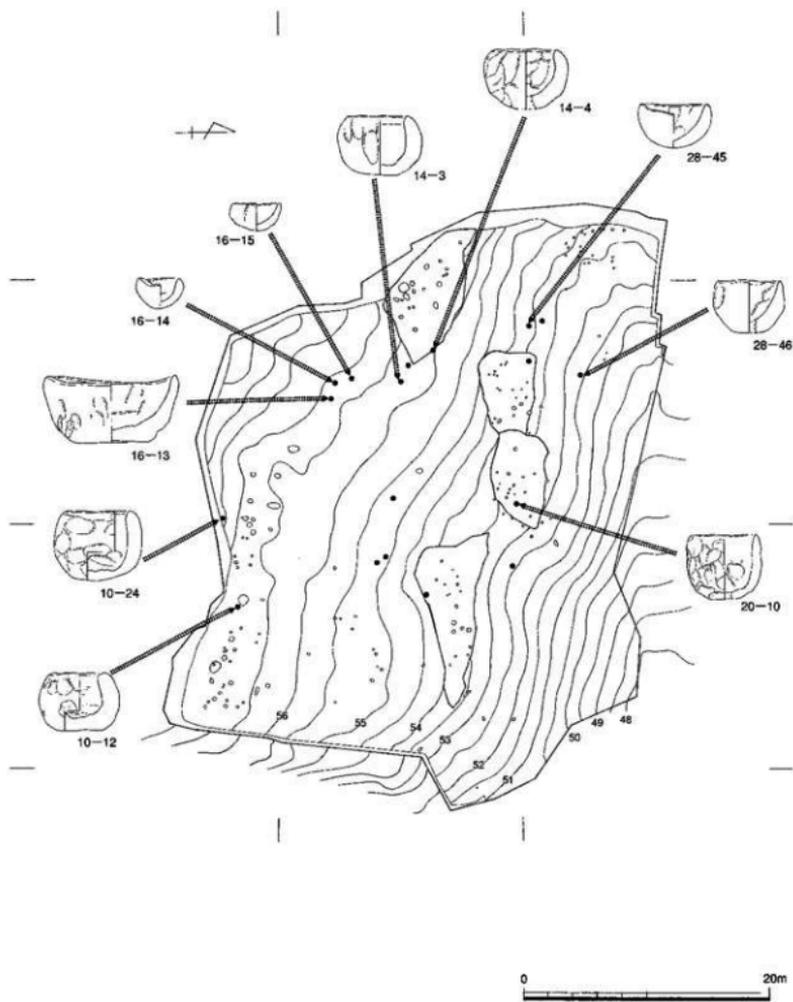
第54表 西1遺跡A区 平安時代の遺物構成表

	A-1 上段	A-1 中段	A-1 下段	A-1 下段斜面	A-2 上段	A-2 中段	A-2 下段	A-2 下段斜面	A-3 上段	A-3 中段	A-3 下段	A-3 下段斜面
須臾器杯身9C				3								
土師器杯身9C					2	2		1				
土師器杯身10-11C					1	2						
黒色土器					1							



第35図 西I遺跡A区 石製品・鉄製品分布状況図 (S=1/400・石製品1/2・金属製品 碇石1/4)

節器碗・黒色土器碗など供膳具が主体となっている。約200年間にわたり、断続的に土器が使用されているが短期的にはごく少数の土器が利用されているにすぎない。遺構に伴わないことから性格は判然としない。



第36図 西I遺跡A区 手捏ね土器分布状況図 (S=1/400・土器1/4)

手捏ね土器の出土状況

A区内では17個体の手捏ね土器が出土している。出土状況は比較的散在しているが、中でも段状遺構2とその周辺では6個体が集中している。その他の段状遺構では1~2個体出土しており、各建物ごとに保有している状況が確認できた。

第3節 B区の概要

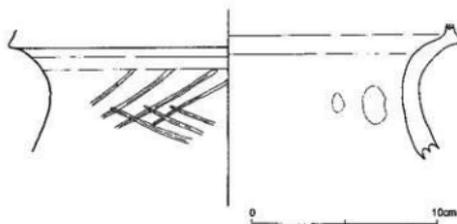
B区はA区より東側に一段落ちた谷に面する緩斜面に位置している。標高は51~53mであり、全体として播り鉢状の地形を呈している。B区は本来、中央部分に谷が貫入しており、その谷が堆積によって埋没して平坦面が形成されている。よって、中央部分は黒色土が堆積し、保水性が高く水気の多い土質である。

調査の結果、A区から転落したと思われる須恵器・土師器の小片が出土したが、遺構は検出できなかった。水分が多く、軟質な土質のため、居住等に適さないためと考えられる。

第55表 西I遺跡B区 遺物構成表

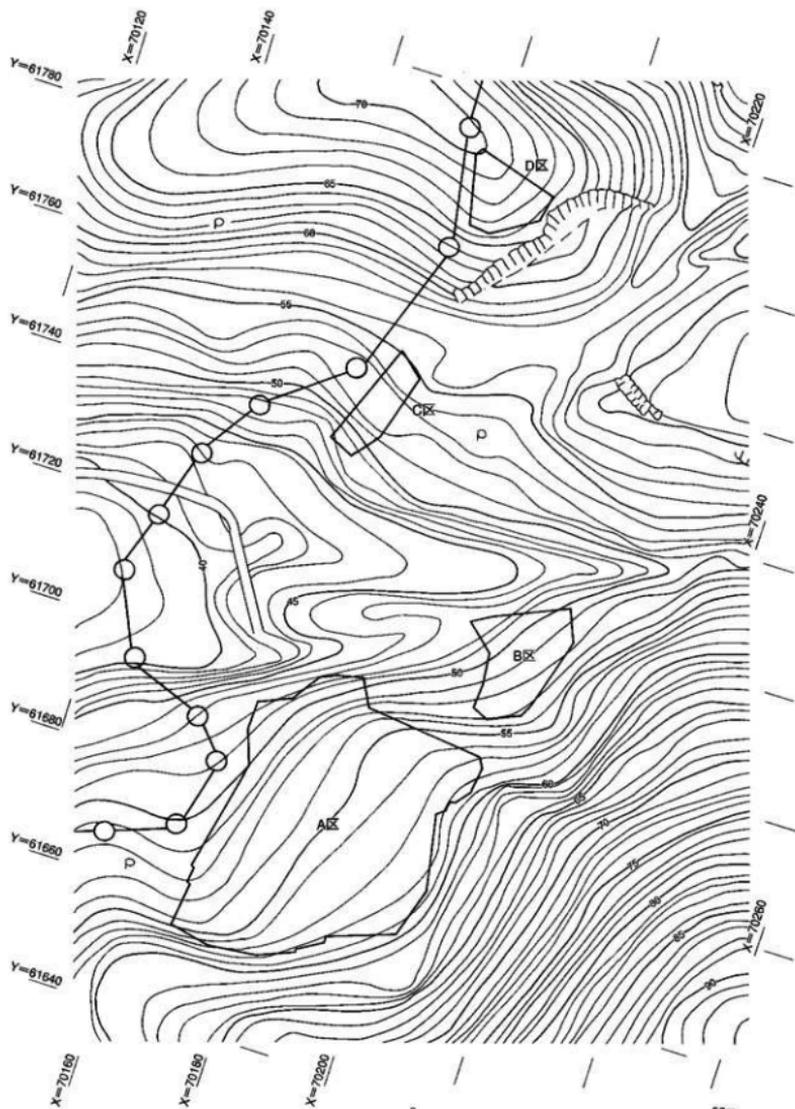
B-1区	須恵器・大甕	胴部破片	2		
	須恵器・杯蓋	口縁部1/8以下	1		
	土師器・甕	口縁部1/2以下	2	口縁部1/8以下	胴部1/8以下
	土師器・赤彩甕	胴部1/8以下	1		2
B-2区	須恵器・大甕	胴部破片	1		
	須恵器・高杯	脚部	1		
	土師器・甕	口縁部1/8以下	2		
	B-3区	須恵器・大甕	破片	1	

第4節 C区・D区の概要



第37図 西I遺跡C区 出土土師器実測図 (S=1/2)

この区域では、試掘の結果、土器片を含む暗灰色の遺物包含層が確認されたので、用地内で地形的に連続する斜面を西I遺跡C区・D区として本調査した。その結果、遺構は検出されなかったが、いずれの調査区からも土師器の破片が若干出土した。しかし、図化できたものは、C区から出土した古墳時代前期の壺形土器（第37図）のみであった。この壺形土器は、焼成良好で、色調は明黄褐色を呈する。胎土は密であり、1mm程度の石英を含む。残存する頸部外面には無軸の羽状文を施し、内面には指頭圧痕を残す。遺存は頸部から口縁部にかけての半周のみであった。



第38图 西I遗址C区·D区位置图(S=1/800)

第5節 まとめ

西I遺跡A区では出雲3期～5期（TK43～TK217）の集落跡の一角を確認することができた。集落跡は標高48～59mのやや小高い斜面に所在し、斐川町内で現在判明しているものでは最も高所に所在する古墳時代後期の集落といえる。町内で同時期の集落遺跡としては杉沢I遺跡などが確認されているが、調査例が少なく集落の実体については判然としない部分が多い。

西I遺跡には堅穴建物1棟も存在せず、削平段+掘立柱建物という建築構成になっている。これは6世紀末前後に建築様式が堅穴建物から掘立柱建物に移行するという山陰地方の海岸平野部に特徴的な現象に反するものではない。しかし、調査区内での同時期の遺構は2～3基程度であり、調査区外の平坦面に遺構があると想定しても同時期の遺構は3～4基と見込まれ、小規模な集落であったことが想定される。集落の性格としては標高の低い場所に立地する母村から派生した分村・子村の可能性が考えられる。それに関連して、西I遺跡の300m北方には石棺式石室を内部主体に持つ武部西古墳⁹⁾が存在するが、西I遺跡の集落存続時期とほぼ同時期の築造と思われ、西I遺跡の集落構成員もその傘下におく小地域首長が葬られていた可能性がある。西I遺跡の性格を考える上で看過できない古墳である。

また、鍛冶が3点余り出土しているが、鍛冶が遺構は明確でなく、羽口、金床石、鍛造剥片なども出土していないため、この集落内での操業実体は定かではない。農具などの修理・再加工など小規模な副業的で小規模な操業が想定できる。

なお、集落の存続期間が上器の3型式程度の間に取まるため、遺物の様式関係を捉えるのに良い資料になると考えられる。煮沸具・手捏ね土器の出土状況は一定の傾向を持ち、集落内の土器保有について貴重な資料を提供したといえる。

集落としては7世紀初頭で廃絶するが、その後8世紀後半から11世紀までの須恵器・土師器・黒色土器などが遺構に伴わない形で散見される。集落としての体裁を成さず、墓域として使用されている痕跡も見いだせないことから、その性格は判然としない。

遺構の時期

遺構の沓え替え状況や、出土遺物などから遺構の機能した時期を見ると以下の通りとなる。

時期	出雲 3 期		出雲 4 期	出雲 5 期	出雲 6 期
遺 構	段5古	段5新	段5新	段4	
	段3古	段3新 段2			
			段1	段1	段1

須恵器杯蓋の個体数は、出雲3期22個体、出雲4期77個体、出雲5期4個体を数えており、この数値を素直に読むと、出雲3期に集落が成立し、出雲4期に隆盛を迎え、出雲5期に入る時期に衰退・廃絶したことが読みとれる。特定器種による年代観ではあるが、大枠はとらえているものと考えられる。

第56表 西I遺跡A区 出土須恵器杯蓋構成表

時 期	杯蓋 型式	A1 中段 A2 中段 A3 中段 A1 下段 A2 下段 A1 下段斜面 A2 下段斜面 A3 下段斜面 段状遺構1 段状遺構2 段状遺構3新 段状遺構4 段状遺構5床面 段状遺構5覆土														
出雲3期:TK43	A3a		1		2	3	3					1				2
	A3b						2	6								
	A3c										1					1
出雲4期:TK209	A4	2	2	1	6	3	3	4			4			2	1	4
	A5	2		2	10	6	4	3	1	4				1	1	4
	A6			1	1	2	2									1
出雲5期:TK217	A7	1				1	1				1					
	不明					1	1			1				1		

三輪玉について

西I遺跡では段状遺構1・掘立柱建物跡1から水晶製三輪玉が1点出土している。県内では他に4遺跡で10個体が出土している。玉作遺跡である玉湯町平床Ⅱ遺跡⁹⁾・栄床遺跡¹⁰⁾で3個体出土しているほか、東出雲町島田池1区2号横穴墓¹¹⁾で5個体、同2号墳から1個体、松江市福富I遺跡¹²⁾では古墳の副葬品と思われるものが1個体出土している。なお、6世紀前半の築造とされる浜田市めんぐろ古墳¹³⁾では金銅製三輪玉1個体が、6世紀中葉の築造の鳥取県淀江町長者ヶ平古墳¹⁴⁾では金銅製三輪玉3個体が見つかっており、6世紀前半の築造と考えられる平田市の上島古墳¹⁵⁾からは倭風大刀の護手帯に取り付けられたと考えられる方形飾り金具が見ついている。

本来、三輪玉は5世紀後半から倭風大刀の系譜上にある楔形柄頭大刀・玉纏大刀などの柄飾りとして金銅製で製作されていたものを、水晶・石英などに置き換えたものであり、金銅製品に比較して、細部の加工が簡略化され退化していることは否めない。金銅製三輪玉を使用した楔形柄頭大刀は、大阪府峰ヶ塚古墳、奈良県藤ノ木古墳出土例や伊勢神宮古神宝などの例から装飾大刀の中でも格付けが高いとされるが¹⁶⁾、水晶製三輪玉は金銅製三輪玉のコピーであり、その産地を近隣に控え、供給を受ける機会の多い出雲地域では必ずしも高い格付けの大刀とはいえないのではなかろうか。また、地域首長は畿内などから最新式の龍鳳系環頭大刀や大陸系の大刀を下賜されているが⁹⁾¹⁰⁾、首長層より下位に属する横穴墓埋葬者層などにはその影響が及びきらず、倭風大刀の保有が継続していたものと考えられる¹²⁾。

島田池遺跡出土品は倭風楔形柄頭大刀としては末期に属すると考えられ、西I遺跡出土品も同時期のものである。この集落に楔形柄頭大刀を保持するような人物が居住した可能性もあるが、水晶製三輪玉1個体という出土状況のため性急な結論づけは見送りたい。

第57表 島根県内出土三輪玉一覧

遺跡名	所在地	時期	出土場所(遺構・層位)	寸法(全長×厚さ:mm)	材質	共存した繋系遺物	備考
西I遺跡	宍道町二橋	出雲4～5期	掘立柱建物2	37.6×19.55	水晶	手控ね土器	本書
			2号墳頂	42.1×23.1	水晶		文獻(2)
島田池遺跡	東出雲町雲葉	出雲4期	1区2号横穴墓	34.5×17.1	水晶	大刀	勾玉・管玉・丸玉・切了玉・小玉
			1区2号横穴墓	34.6×16.5	水晶	文室内反対側に勾玉・管玉・丸玉・切了玉・小玉	
			1区2号横穴墓	41.6×18.4	水晶		
			1区2号横穴墓	35.4×16.7	水晶		
			1区2号横穴墓	32.5×18.4	水晶		
平床Ⅱ遺跡	玉湯町平床	古墳後期	Ⅲ区遺構外	(28)×(22)	石英	勾玉・半玉・白玉・丸玉・小玉未製品	文獻(3)
					石英		
堂床遺跡	玉湯町林村	出雲3期	SD06(玉作工房)	34×15	水晶	勾玉・管玉・丸玉・切了玉・白玉未製品	文獻(4)
福富I遺跡	松江市乃水福富町	古墳後期	6区遺構外(古墳?)	45×27	水晶		文獻(5)
めんぐろ古墳	浜田市治和	6世紀中葉	石室内	35~40×3	金銅	鏡・切了玉・鈿調	文獻(7)

鉄製鎌について

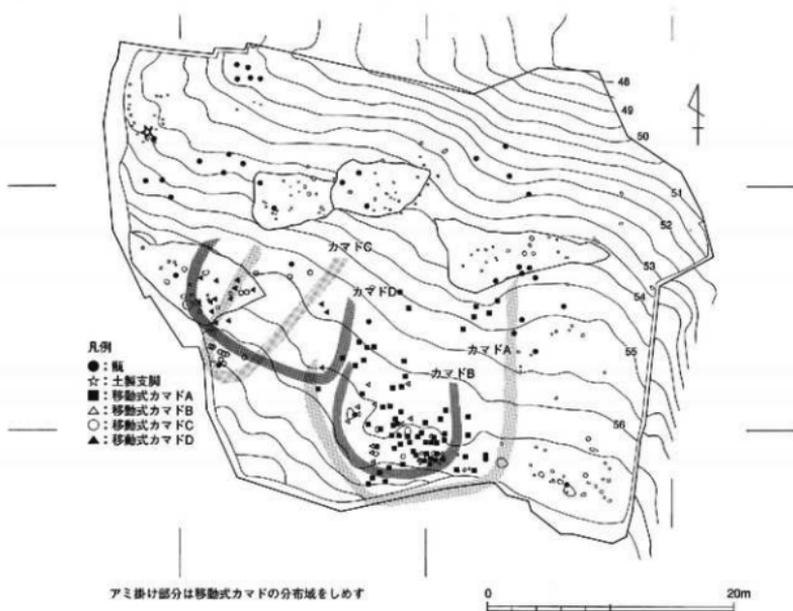
段状遺構3古段階の遺構面からは中型の曲刃鎌が出土している。鳥根県内では約40例出土しているとされ¹³⁾、約半数は古墳時代後期に属することが明らかにされている。

煮沸具類の分布状況

煮沸具類のうち、移動式竈・甌・土製支脚の分布状況について表示したものが、第39図である。

このうち、移動式竈は破片の胎土・色調・調整・厚さなどを手掛かりに分類作業を進めると5～6個体に絞り込めることが確認できた。そして、下段・下段斜面に転落している破片は個体の口縁部や突口部など上半部が細片化したものが大半なのに対して、上段で確認される破片は大きな基底部片が卓越している状況が看取された。このような破片の散布状況から移動式竈は段状遺構1・掘立柱建物1付近に2個体、段状遺構2及びその南隣に3個体が存在したことが推察され、段状遺構3・4・5では遺構の利用が中止された時点で移動式竈は存在しなかったと考えられる。この現象が段状遺構1・2と段状遺構3・4・5の性格差を反映しているのか、にわかに判じがたい。しかし、段状遺構1・2では明確な掘立柱建物が存在し、それに対して段状遺構3・4・5では明確な掘立柱建物が確認できない点など、遺構の性格差は明らかである。

煮沸具類のうち移動式竈が一定量存在するのに対して、土製支脚は1点と少ない。出雲地域の平野部では6世紀末～7世紀初頭に移動式竈・土製支脚・甌・甕が煮沸具の4点セットとなる¹⁴⁾が、



第39図 西1遺跡A区 煮沸具類分布状況図 (S=1/400)

それ以前に系譜が測れない土製支脚についてはその出現時期や系譜が注目される。移動式竈は5世紀後半から6世紀の間は数例の出土例が確認されている¹²⁵⁾が、土製支脚に先行して煮沸具セットに定着するのか、斐川南部の地域性として土製支脚の定着が他地域より若干遅れるのか興味深い。

以上のように、西I遺跡は斐川町内では調査例の少ない古墳時代後期の集落跡であることが確認された。調査例が多く資料の蓄積されている近隣の旧神門郡・旧意宇郡域などの同時期の集落遺跡との比較検討が課題となるが、現状では旧出雲郡域での集落調査例が少なく、西I遺跡が一般的な集落例だという実証も困難なため、しばらく類例の増加を待って検討されるべきと考えている。検討課題としては以下のことが考えられる。

- ①集落の構造（建物の配置・規模・棟数など・堅穴建物から掘立柱建物への移行形態とその時期）
- ②一家族の保有する建物構成（：家族単位の建物所有数）
- ③土器様式の変遷（須恵器・土師器を含めた様式変遷）
- ④土器様式の地域差（大井窯産須恵器の流通と他窯との関係・土師器の地域差）
- ⑤移動式竈・土製支脚・瓶などの導入時期
- ⑥集落内祭祀の実体（玉類・手捏ね土器・赤塗土器などの出土状況）
- ⑦集落とその墓域の関係
- ⑧鍛冶操業など集落内での手工業生産の実体
- ⑨耕作地とその形態の把握

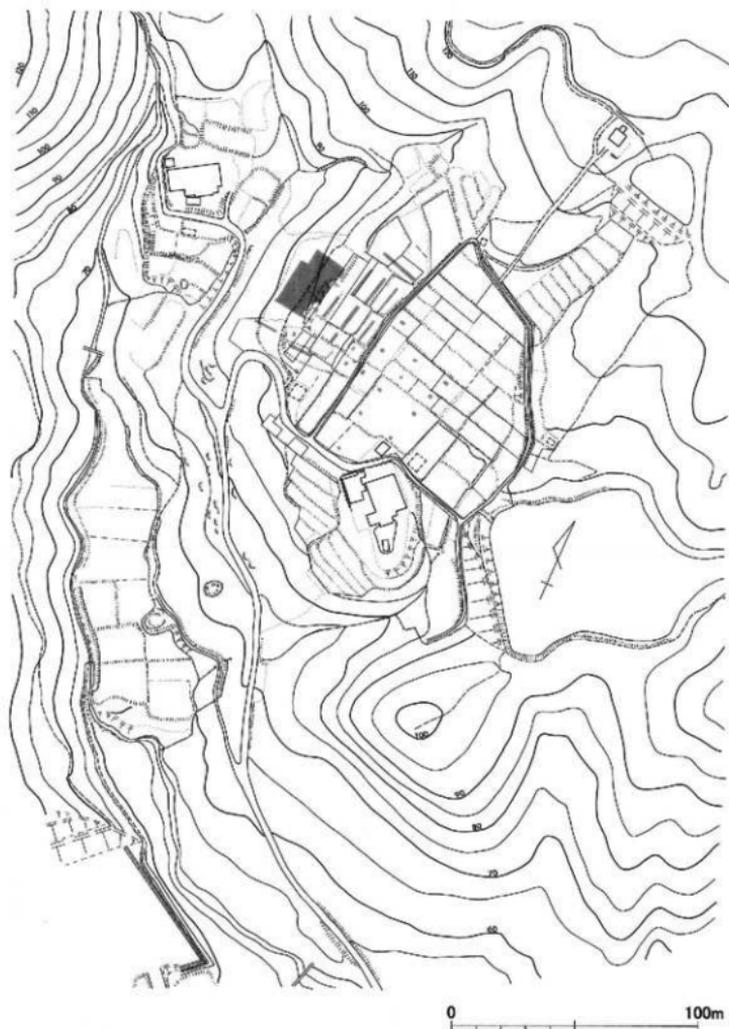
参考文献

- (1) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 1994
- (2) 原田敏照・中川 寧「高田池遺跡・鶴宮遺跡」建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1997
- (3) 宮本正保・林 健亮「若所遺跡・平床Ⅱ遺跡」日本道路公園中国支社・島根県教育委員会 2001
- (4) 是田 敦・橋 弘章「堂床遺跡」日本道路公園中国支社・島根県教育委員会 2001
- (5) 柳浦俊一「福富Ⅰ遺跡・屋形Ⅰ号墳」島根県教育委員会 1997
- (6) 出雲考古学研究会「古代の出雲を考える6 石棺式石室の研究」1987
- (7) 山本 清「浜田市めんぐろ古墳遺物について」『山陰古墳文化の研究』1971
- (8) 中原 斉・角田徳幸「鳥取県・長ヶ平古墳の研究」『島根考古学会誌』第7集 島根考古学会 1990
- (9) 松尾充品「第6章 装飾付大刀の評價と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター 2001
- (10) 白石太一郎「玉纏大刀考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 1993/小林義孝・有井宏子「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀」『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』第7号 1996/高島 徹「装飾付大刀を出土した古墳」『金の大刀と銀の大刀 一古墳・飛鳥の貴人と階層一』大阪府立近つ飛鳥博物館 1996/濱口和弘「推古朝前後に造られた双塚墳一奈良県植山古墳一」『季刊考古学』第74号 藤山開 2001
推古天皇（敏達天皇妃）とその子である竹田皇子の合葬墓と想定される榎原市植山古墳でも東石室（6世紀末）から、水晶製三輪玉が出土している。6世紀末以降は大王家や畿内の有力氏族でも水晶製三輪玉を使用した可能性がある。
- (11) 大谷晃二「出雲の地域政權と大和政權 一金銀装大刀にみる出雲の東西一」『土塩治紫山古墳の研究』島根県古代文化センター 1999
- (12) 松尾充品（島根県埋蔵文化財調査センター）の教示による。
- (13) 林 健亮「第5章第1節 出雲地方出土の古墳時代の鎌について」『熊谷遺跡・要害遺跡』日本道路公園・島根県教育委員会 2001
- (14) 広江耕史「山陰の炊飯具」『古代の土器研究一律令の上層階級の東西4 炊飯具一』古代の土器研究会 1996/岩橋孝典「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の煮沸具について」『古代文化研究』第11号 島根県古代文化

- (15) 5世紀末～6世紀(TK43期まで)の移動式竈出上遺跡については以下の例が知られている。安来市山ノ神遺跡、東出雲町勝負遺跡、松江市堤廻遺跡・米坂遺跡・西川津遺跡、玉湯町堂床遺跡、出雲市井原遺跡・三田谷I遺跡。鳥根県教育委員会「山ノ神遺跡・五反出遺跡」1998/鳥根県教育委員会「勝負遺跡・堂床遺跡」1998/松江市教育委員会「堤廻遺跡」1986/松江市教育委員会脚松江市教育文化振興事業団「運食横穴墓群・米坂古墳群」1999/鳥根県教育委員会「西川津遺跡VI」1999/鳥根県教育委員会「堂床遺跡」2000/出雲市教育委員会「井原遺跡発掘調査報告書」2002/鳥根県教育委員会「三田谷I遺跡 (Vol.1)」1999

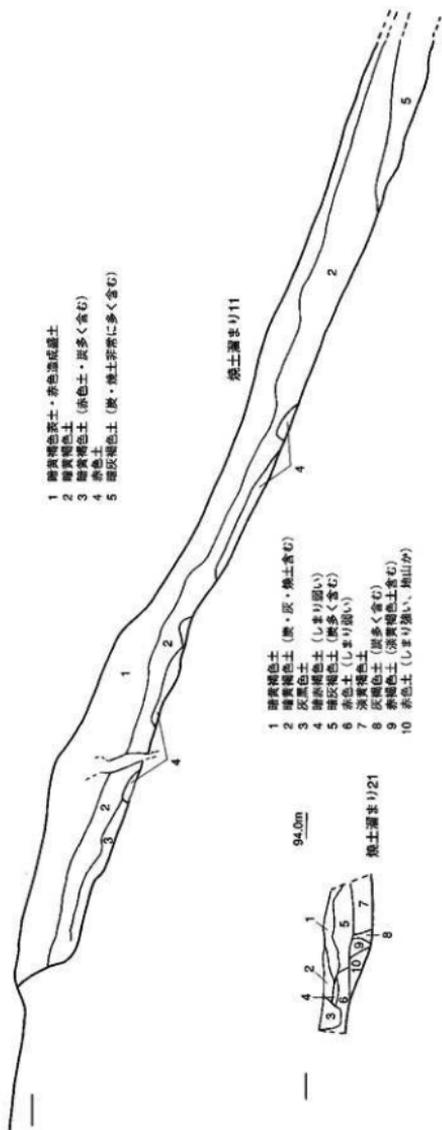
第4章 祇園原I遺跡の調査

仏経山（標高366m）の東麓に位置するこの遺跡では、調査対象区域として18,500㎡を見込んでいた。トレンチを39地点、合計202㎡設定して確認調査したところ、北に向かって下る深い谷筋の東斜面（標高90m～95m）で遺構・遺物が確認されたので、この区域について350㎡の調査区を設

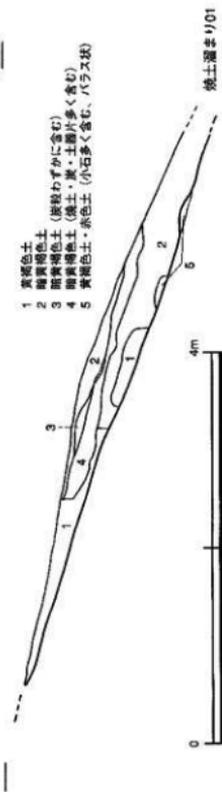


第40図 祇園原I遺跡 調査区位置図 (S=1/2,000)

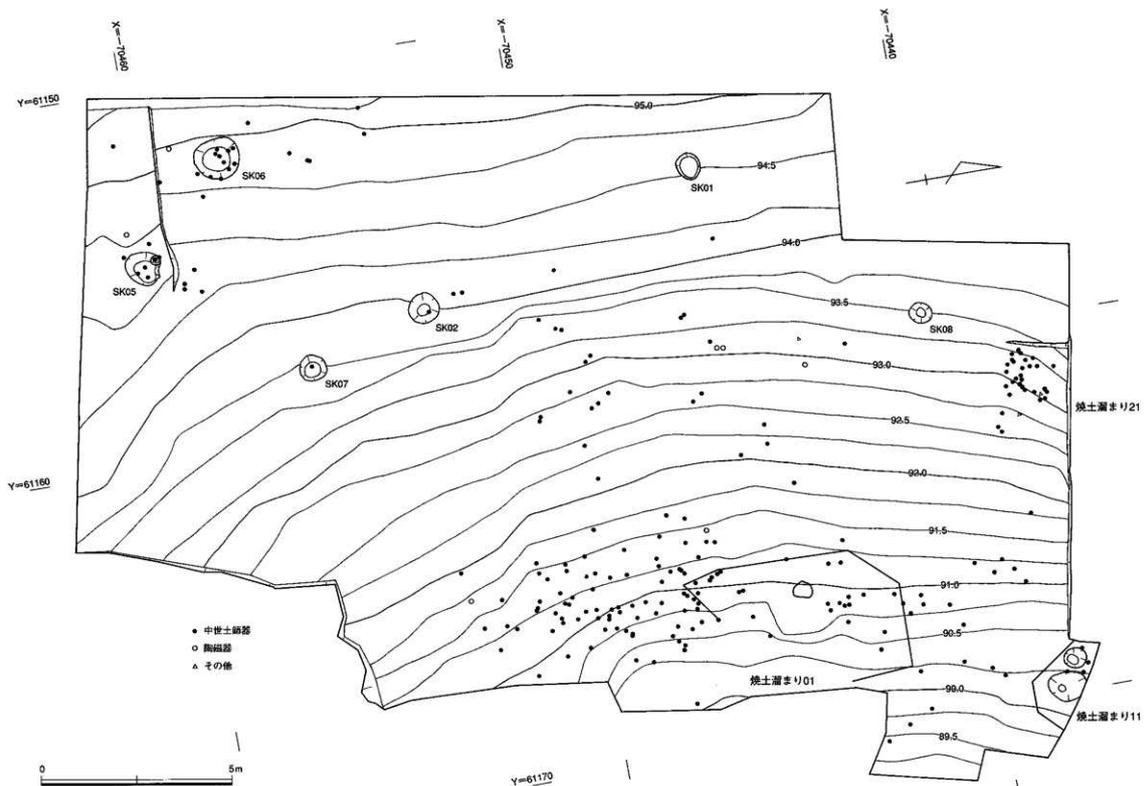
94.0m



92.0m



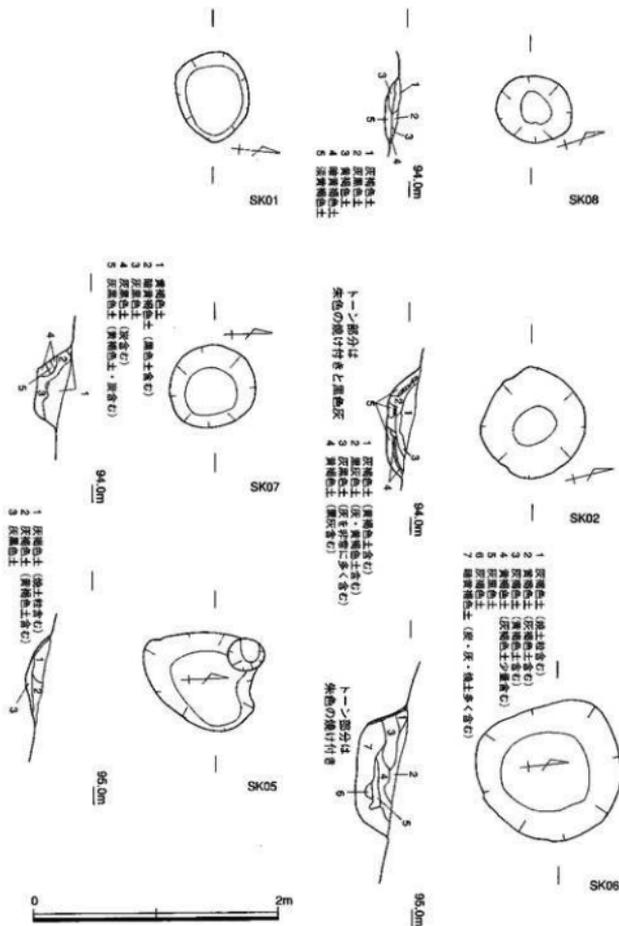
第41図 祇園原 I 遺跡 焼土溜まり土層断面図 (S=1/50)



第42図 祇園原Ⅰ遺跡 遺構及び遺物分布平面図 (S=1/100)

第58表 祇園原 I 遺跡 土坑規模計測表

遺構名	検出場所	平面形	断面形	測 値				出土遺物	遺構の性格
				長軸 (cm)	短軸 (cm)	深 (cm)	深さ (cm)		
SK01	縁斜面	楕円形	逆台形状	74	58	-	23.5	土質品	小炭窯
SK02	縁斜面	円形	逆台形状	86	80	-	23.0	土師質土器	土師土器
SK05	縁斜面	不整形	逆台形状	110	88	-	13.0	土師質土器	土師土器
SK06	縁斜面	円形	逆台形状	120	116	-	38.9	土師質土器	土師土器
SK07	縁斜面	円形	逆台形状	-	-	70	27.0	土師質土器	土師土器
SK08	縁斜面	円形	逆台形状	60	54	-	11.0	なし	小炭窯



第43図 祇園原 I 遺跡 土坑実測図 (S=1/40)

るいは断面が浅い逆台形状を呈しており、内面は一部赤く焼けているが、内容物は細かく炭が多く目立ち、遺物は伴わない。この2基は時期不明の小炭窯(製炭窯)である可能性が高いと思われる。また、焼土溜まりの内容物は、土師質土器も含めて前者の土坑の内容物と同様と思われる。これ

けて、平成13年10月30日から平成13年11月28日まで本調査を行なった。

発掘調査の結果6基の土坑と3か所の焼土溜まりが検出された。これらの遺構や遺物包含層から土師質土器や陶磁器が出土した。

検出した6基の土坑のうち4基は、地中構造が半球状から深い桶状あるいは断面が逆台形状を呈し、内壁面は赤く焼け付いていた。これらは土師質土器を若干ながら伴っており、焼土(内壁面が焼け付いた残骸とみられる)・灰・炭・土が詰まっていた。何かを生産したと考えられる残滓は内容物の中にも、周囲の土中からも検出されていない。6基の土坑のうち残る2基(SK01・SK08)は、



第44図 祇園原 I 遺跡
出土遺物実測図
(S=土師質土器1/4
黒曜石割片2/3)

らの遺物の中には龍泉窯系青磁の破片と見られるものも含まれており、土師質土器についても顕著な型式差は認められないので、祇園原 I 遺跡から出土したこれらの遺構、遺物については、概ね13世紀代の年代観が得られるものと思われる。2基の小炭窯と思われる遺構については時期不明と言わざるを得ないが、比較的浅い部分から検出したことや、人家に近い区域で検出したことなどから、近年に

における使用の可能性も考えてよいのではないかとと思われる。他の4基の焼土坑は、生産に関わる可能性は低いと考えられるので、墓坑や何かの祭祀に関わる遺構である可能性が考えられる。これらの焼土坑に伴って出土した土師質土器の器種は碗皿類であり、その他の供膳具、調理器具、貯蔵容器など集落から通常出土してしるべき生活用具が欠落している。また、周囲にはこの焼土坑群を包含する同時代の集落は確認されておらず、このような現状では、集落から数百メートル以上あるいは数キロメートル以上隔離された施設であったと考えざるを得ない。

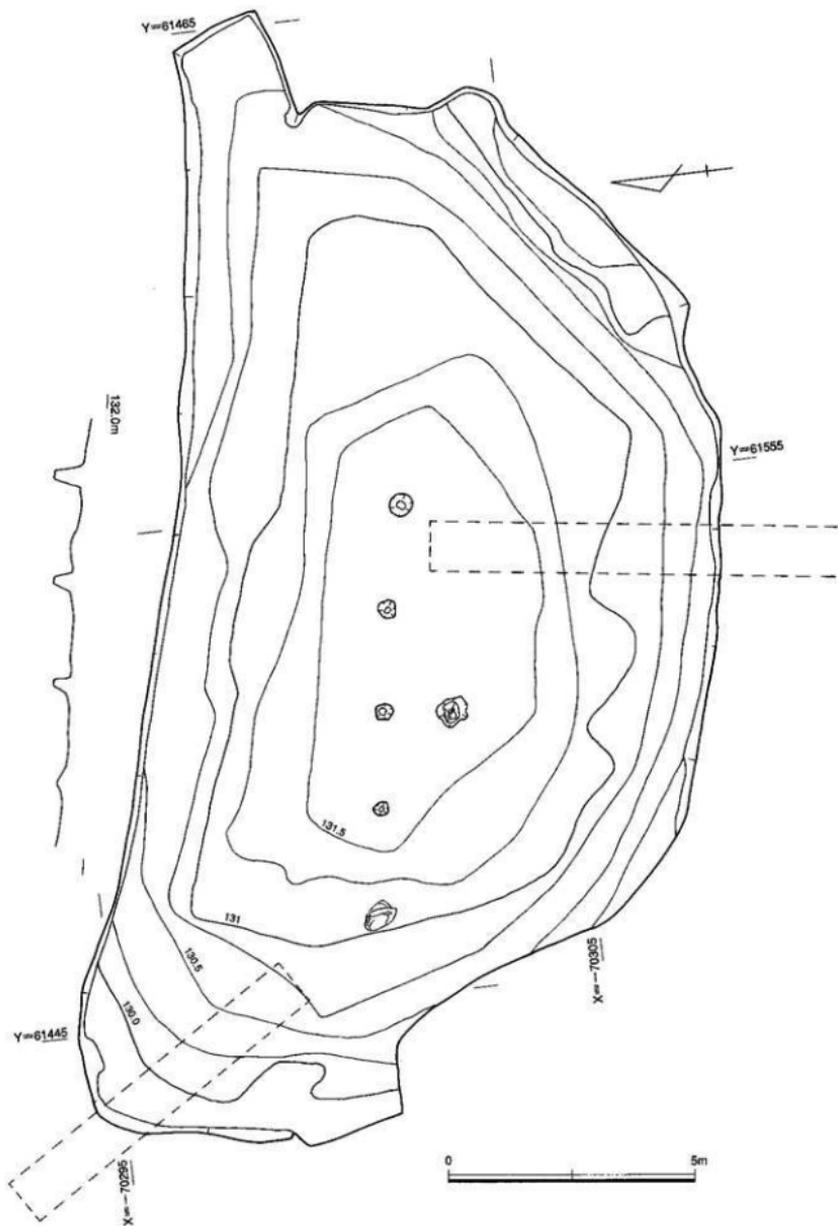
第59表 祇園原 I 遺跡 出土遺物観察表

検出番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)	胎土	色調	構成	手法などの特徴	遺存度
44-1	焼土窯さき11	土師質土器	碗	器高残存2.3底径6.0	密	赤褐色	白	外面同輪ヨコナデ	1/2以下
44-2	焼土窯さき21	土師質土器	碗	器高残存3.0腹心径5.4	密	赤褐色	白	基部同輪さきり外面同輪ヨコナデ	1/2以上
44-3	包火燗	土師質土器	碗	器高残存2.9底径4.8	密、1mm以下砂多し	赤褐色	良好	内外面ヨコナデ外面同輪さきり	1/2以下
44-4	包火燗	土師質土器	碗	器高残存3.0底径残5.4	密、1mm以下砂多し	明褐色	良好	内外面ヨコナデ外面同輪さきり	1/2以下
44-5	焼土窯さき11	土師質土器	皿	径径残11.6	密、1mm以下砂多し	黄褐色	良好	内外面ヨコナデ	1/2以下
44-6	焼土窯さき21	土師質土器	皿	径径残8.6器高2.15底径4.2	密、1mm砂粒僅少	赤褐色	良好	基部同輪さきり外面同輪ヨコナデ	1/2以上
44-7	焼土窯さき21	土師質土器	皿	径径残7.8器高1.4底径4.0	密	灰白色-赤褐色	白	基部同輪さきり?	1/2以上
44-8	包火燗	土師質土器	鉢高台付	器高残存3.2底径5.2	密	黄褐色	良好	外面ヨコナデ外面同輪さきり	1/2以下
検出番号	出土位置	種別	器種	重量 (g)	材質	備 考			
44-9	包火燗	石器	割片	4.53	黒曜石	裏面にヒンジフラスチャーの残像面を伴つ。			

第5章 石橋 I 遺跡の調査

石橋 I 遺跡は仏経山 (標高366m) の東、高瀬城跡 (高瀬山標高314m) の西に位置している。出雲平野に面した標高131.7mの山頂部を中心として5,100m²を調査の対象とした。確認調査として12地点、合計130m²を発掘調査したところ、遺物は出土しなかったが、山頂部から柱穴が検出された。この部分を中心として250m²の調査区を設定して平成13年9月19日から同年10月24日まで本調査を実施した。

発掘調査の結果、山頂部には30m²ほどの平坦面があり、これを東西に貫くように3穴あるいは4穴からなる柱穴列1条が検出された。これらの柱穴は、ほぼ2m間隔で並んでいる。本調査においても遺物は出土しなかったので時期は特定できないが、立木などと組み合わせた建物跡の可能性が高いと思われる。石橋 I 遺跡と名付けられたこの山頂は、高瀬城からは見えにくい出雲平野の西側を広く見通すことができるので、見張り台的な役割を担っていたことも考えられる。



第45図 石橋 I 遺跡 遺構実測図 (S=1/100)

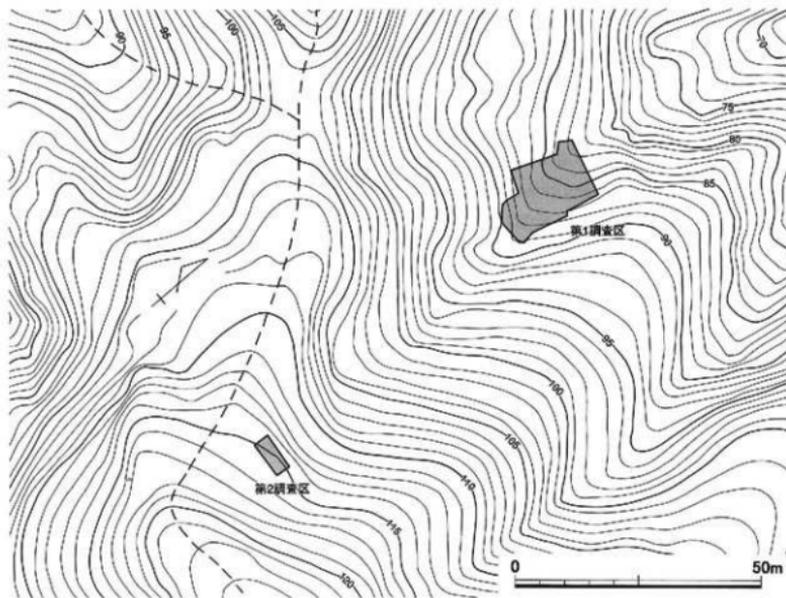
第6章 高瀬城北遺跡の調査

1. 位置と調査の概要

高瀬城北遺跡は、箆川郡斐川町大字神庭1558-2番地他に所在する。ここは箆川平野の南側に連なる丘陵地にあたり、青銅器出土地として著名な荒神谷遺跡の東側約1kmに位置している。南側には米原氏居城の高瀬城が存在するが、この遺跡はそこから北側の宇屋谷に向かって伸びる尾根の東側斜面に広がっている。

宇屋谷付近には数多くの遺跡が知られているが、その中でも特に中期～後期にかけての古墳及び中世の遺跡は注目される。古墳では、全長約58mの前方後円墳である神庭岩船山古墳が谷の入り口の微高地に、そしてこれに続く規模を持つ径32m、高さ5.3mの小丸子山古墳（円墳）が谷の平地にそれぞれ築かれている。さらにこの谷の西側に伸びる丘陵地には神庭古墳群をはじめ小規模な方墳や円墳が数多く造られている。以上のように大小さまざまな古墳が所在しているこの地域は、当時の身分階層の実態や社会情勢を知る上に重要な地域である。また、谷の平地部には須恵器等の土器片が散布しており、大規模な集落が営まれていたものと思われる。中世の遺跡では高瀬城が存在した関係で多くの城跡がある。谷の東側の丘陵地には鷹の巣城、錦田原城、宇屋谷城等が築かれ、比較的低い丘陵地に位置する宇屋谷城は高瀬城関連の館跡になる可能性を持っており注目される。

平成13年6月4日から7月3日にかけて遺跡の範囲、性格等を把握するための確認調査を行った。その結果、縄文時代の落とし穴と思われる遺構や焼土と土器片を検出したため10月10日から11月27日にかけて本調査を実施した。斜面下方部に第1調査区、上方部に第2調査区を設けて調査し



第47図 高瀬城北遺跡 遺跡周辺の地形図 (S=1/1,000)

たが、古墳時代中期以降の土師器、須恵器、中世の土器等の遺物が出土したのみで明確な遺構は検出することができなかった。

2. 第1調査区

標高84~89mの緩やかな谷部にあたるところで、確認調査の結果、トレンチから多量の焼土と少量の上器片を検出したため、それらが出土した230㎡あまりを調査対象として本調査を実施した。

焼土の堆積状況

焼土は調査区の上方に2か所、下方に1か所まとまって出土した。それらはいずれも谷の主軸方向にゴルフ場のフェアウェイに似た細長い形状を呈しており、谷の上方から滑り落ちて堆積したものである。上方にある二つの焼土溜まりは、第2焼土溜まりの上に第1焼土溜まりが載った状態で検出されたことから、谷の西側→東側の順で焼土が堆積したものと考えられる。ただ、下方の第3焼土溜まりとの前後関係を明らかにすることはできなかった。遺構については第1焼土溜まりの上部から大形の土坑を1基検出したのみである。出土遺物としては焼土中から古墳時代の土師器片及び7世紀代の坏1点が完形の状態で検出された。

第1土坑

第1焼土溜まりの上部から検出された落ち込みである。谷のやや西側によった斜面に掘られていたもので、北側がトレンチにより破壊をうけたため全体の形態は明らかでないが、不整形な長円形になるものと思われ、横口を持つ穴状の構造である可能性も否定できない。現存する規模は長さ2.83m、幅1.95mあまりで、深さは斜面上方部の縁から0.85mを測り、主軸は谷の中央線とほぼ並行している。底は縦方向がほぼ水平で、その幅は南壁から少し前の部分が最も広く1.16mを測るが、北側に行くにしたがって狭くなっている。底の横断は、中央部分は緩やかに窪み、両端は垂直ぎみに20cmあまり立ち上って壁にいたっている。また、壁面にはピット状の落ち込みが4か所あまり存在していた。この土坑は発見当初、焼土や炭の発生源となる炭焼き窯等の遺構になるものと期待したが、底や壁に焼けた痕跡が認められず、明確な性格を把握することはできなかった。

完形土器の出土状況

第1焼土溜まりの下方の端から見つかった土器は須恵器の坏である。一部、口縁端部を欠くところがあるがほぼ完形で、焼土中から伏せた状態で検出した。原位置からさほど動いていないものと思われ、第1調査区ではこの上器以外に同時期のものが1点も出土していないことから、何らかの理由で単独に使用されたものと考えられる。焼土との関係が推測されるが、出土地点が屋屋谷を流れる河川の支流の水源地にあたっていることも看過できない事実である。

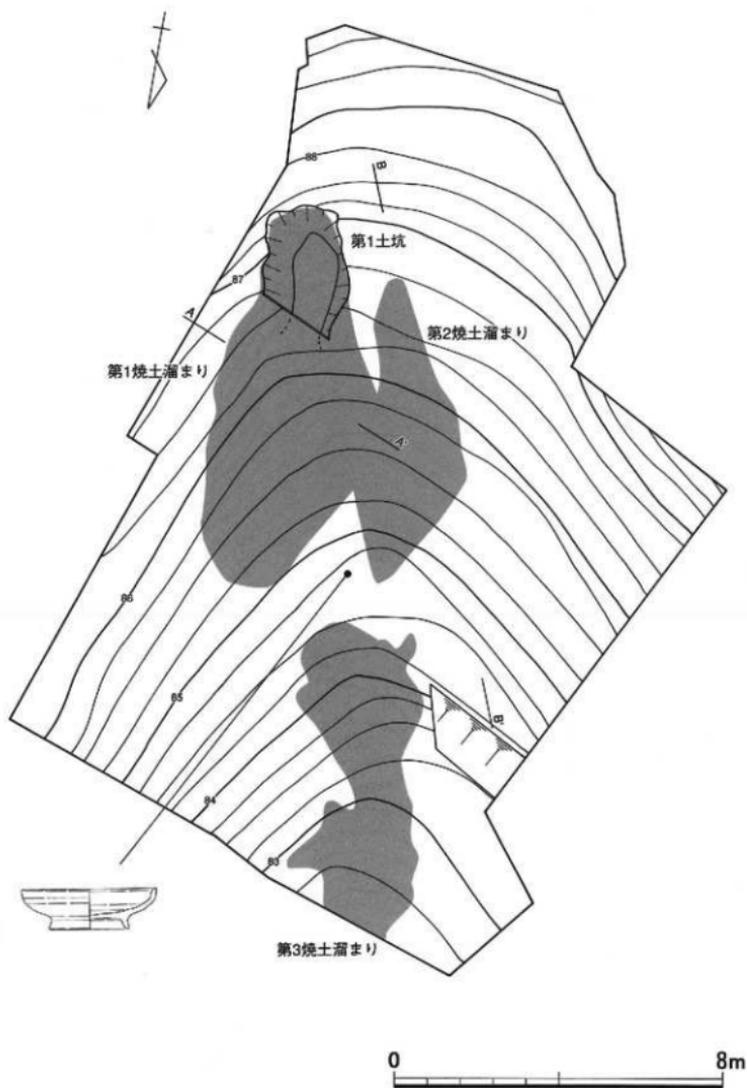
出土土器

第1調査区から出土した土器は古墳時代の須恵器、土師器と中世の備前焼が大半を占め、前者は焼土中、後者は表土から検出されている。以下、土器の概要を述べる。

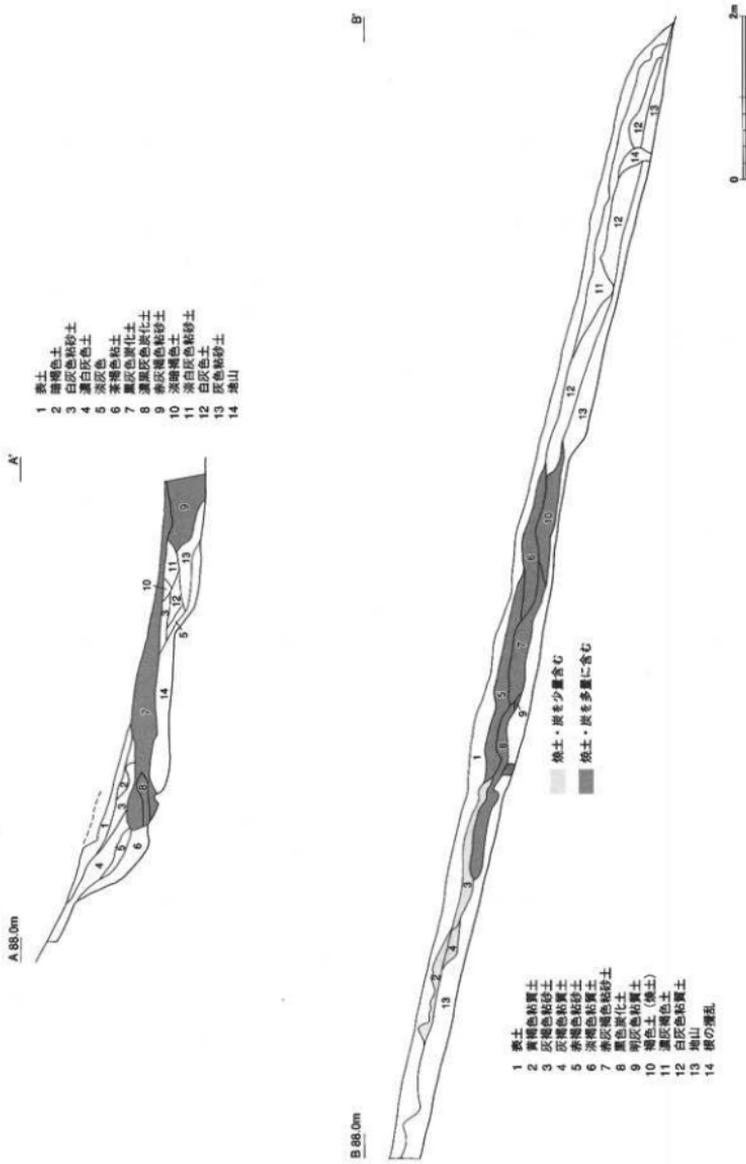
第52図1~3は古墳時代中期前後の土師器の口縁部片である。1は頸部から口縁部にかけての破片で、口縁端部を欠く寛である。形状は、「く」の字形を呈しており、口縁部の器壁はやや厚い。形状を詳しく見てみると、頸部からやや内湾して上がり、短く外反して端部にいたっている。調整は頸部から肩部にかけて外面にやや幅広い縦方向の刷毛目があり、また内面には横方向にケズリがそれぞれ施されている。焼成は充分で、胎土に雲母を含む。2は推定口径14.7cmあまりの寛である。形状は1に近いが端部下方の外反している部分の器壁は薄く、口唇部内側に平坦面を持つ。調整は全面に横ナデが施されているものと思われ、胎土は砂粒を多く含み、雲母も混ざっている。外面灰褐



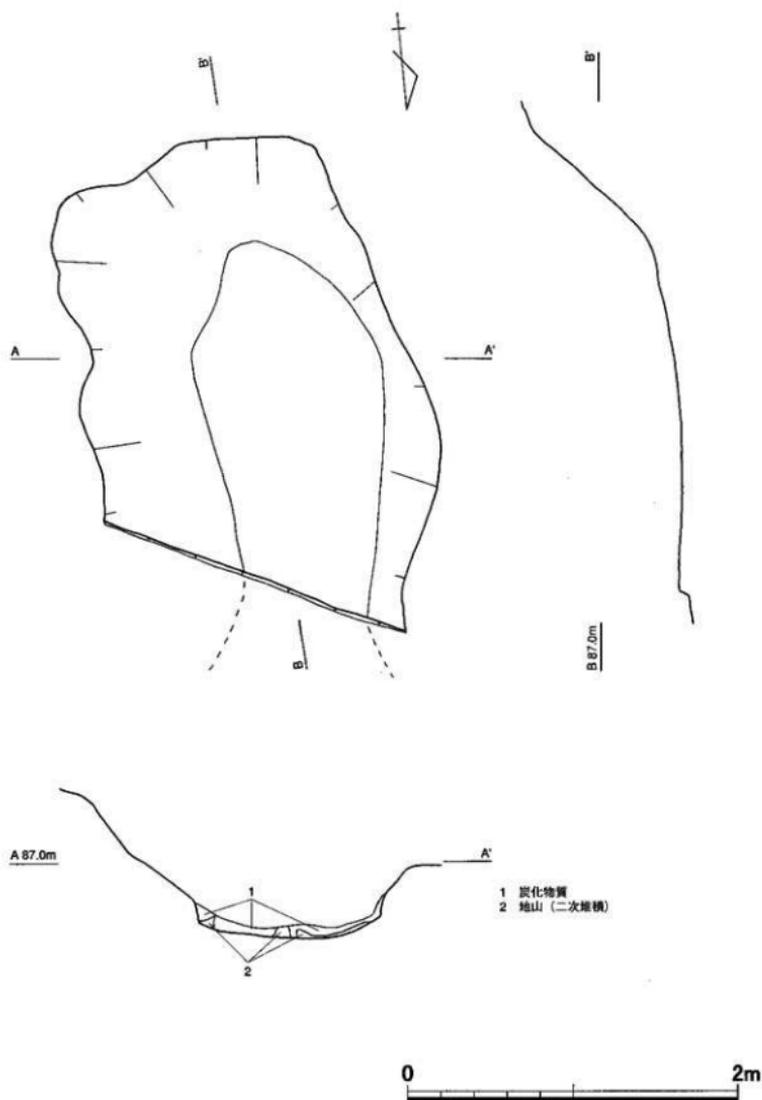
第48図 高瀬城北遺跡第1調査区 調査前地形測量図 (S=1/200)



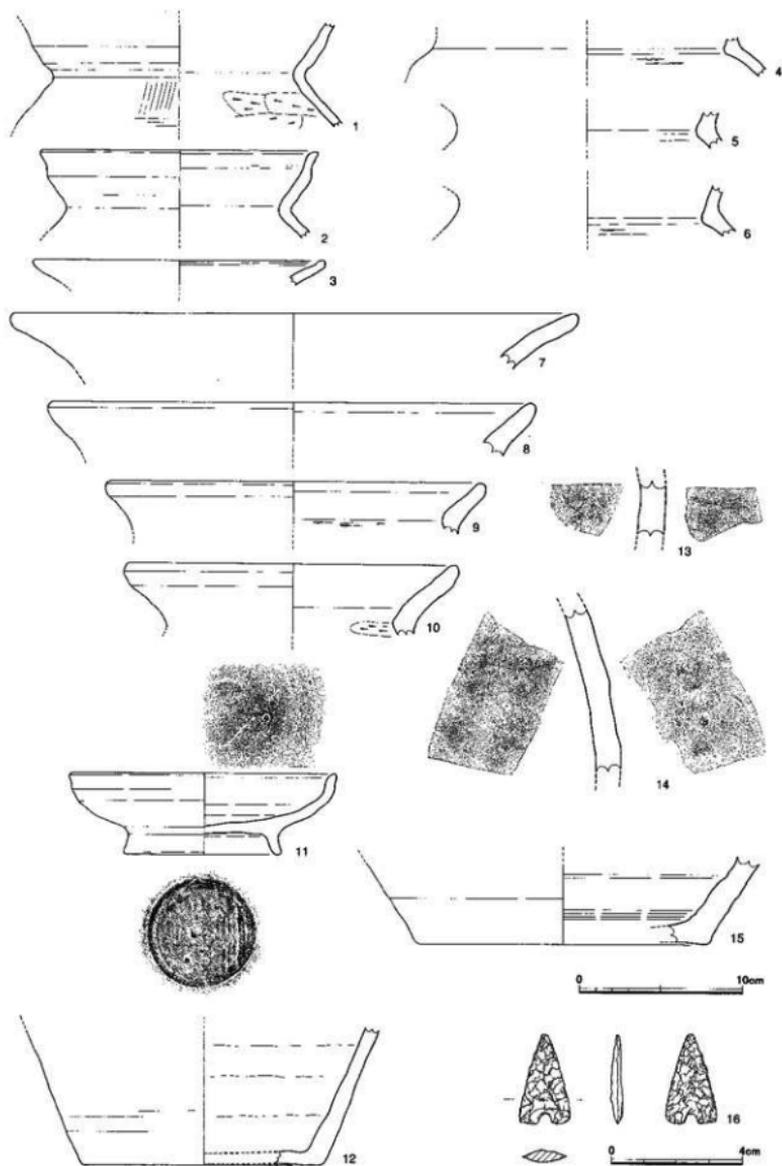
第49図 高瀬城北遺跡第1調査区 調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1/120)



第50図 高瀬城北道路第1調査区 土層図 (S=1/60)



第51図 高瀨城北邊跡第1調査区 第1土坑実測図 (S=1/30)



第52図 高瀬城北遺跡第1調査区 出土遺物実測図 (S=1/3・16のみ2/3)

色、内面黄褐色を呈し、焼成は良好である。3は推定口径17.7cmあまりの甕壺類の口縁部片で、端部付近の小破片である。形状は大きく外傾して開いており、端部は丸い。口唇部内側に浅い凹み線が通っている。調整は横ナデが施され、砂粒を多く含んでいる。色調は外面が黄褐色、内面が暗黄褐色である。4～6は頸部の土師器片である。いずれも「く」の字形に屈曲しており、内面に横ケズリ、外面に横ナデを施している。焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。7～10は外側に大きく開いている土師器の口縁部片である。推定口径は7が最も大きく34.8cmで8が29.9cm、そして9が28cmあまりで、最も小さい10が20cmである。いずれも造りがやや粗雑で、器壁は厚く、1～3の土器より新しいものと思われる。なお、10は内面にケズリの痕跡がわずかに残っている。11は口径16.3cm、器高5.0cm、底径9.4cmを測る須恵器の坏で、底部には高さ1.1cmあまりの高台が付いている。外形はやや内傾した高台から外側に大きく外反して上がり、それからやや内湾して短く外反して口縁部にいたっている。口唇部の内側は外傾した半直面を持つ。外面の底部には糸切りした後にナデを施した痕跡が残っている。焼成は良好で、色調は淡い灰色。なお、坏部の内側に1か所ではあるが径0.4cmの竹管文が施されている。12は須恵器の壺か甕の底部片で、推定底径14.5cmあまりを測る平底である。外面は底部から約3cm上方まで横方向のケズリが施されており、内面には粘土紐を巻き上げた痕跡が一部に残っている。13～15は備前焼の甕の破片で、13、14は胴部片、15は推定底径18.2cmあまりの底部片である。16は第1調査区の上方のトレンチから出土した安山岩製の石鏃で長さ2.7cmあまりのやや細長い三角形を呈した抉りの小さい鏃である。

3. 第2調査区

尾根から東側に少し下がった斜面に設けた調査区で、第1調査区の上方に位置する。トレンチ調査で縄文時代の落とし穴状の遺構を検出したため30㎡あまりを調査した。

第1土坑

この土坑は調査区のはほぼ中央の斜面から検出されたもので、1.34m×1.13mの長円形を呈し、深さは1.09mあまりを測る。上端から0.9mあまり下がったところで径が小さくなり、底は15cm×20cmあまりの不整な円形をしている。この坑は表土下にある灰褐色粘質土の下層から掘りこまれており、中には茶褐色粘質土が詰まっていた。中から遺物を検出することはできなかったが、掘りこまれた面の位置や堆積した土等から古い時期のものと思われ、獣の捕獲用の落とし穴と推測される。

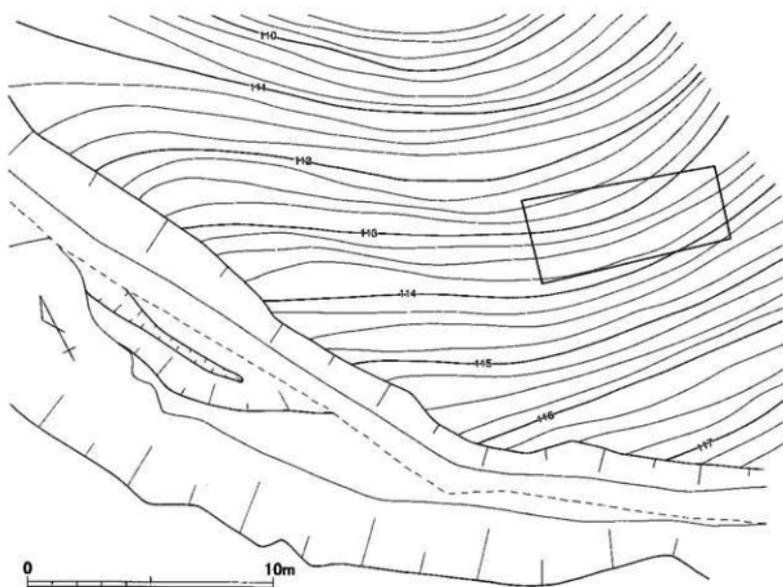
第2土坑

第1土坑の東側にあたる調査区の壁面付近から、径1.24m、深さ0.85cmあまりを測る土坑が見つかった。全形は不明であるが長円形を呈しているものと思われ、底はやや丸みを持ち、淡茶褐色粘質土と茶褐色粘質土が堆積していた。遺物は見つからなかったが、第1土坑と同様に下層から掘りこまれていることから同時期のものと推測される。

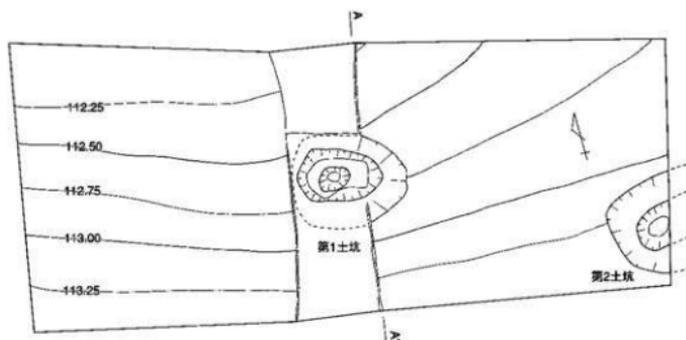
4. まとめ

今回の調査では明確な遺構を検出することはできなかった。焼土や遺物が出土したのは、調査地が谷地形であったため土砂が上方から堆積していることに起因しているものと思われる。ただ、ほぼ全形で見つかった須恵器の坏は、原位置からさほど動いていないものと考えられる。このような出土状況は出雲市芦波町の廻山V遺跡でも確認されており、今後類例の増加を待って検討が必要である。また、表土から備前焼の破片が出土していることから、調査区周辺は高瀬城関連の施設等が本来存在していたものと推測される。

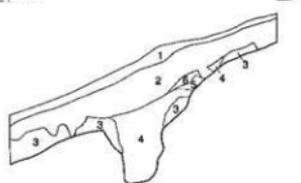
参考文献 『鳥根県斐川町遺跡分布調査報告書』 斐川町教育委員会 1992



第53图 高瀬城北遺跡第2調査区 調査前地形測量図 (S=1/200)



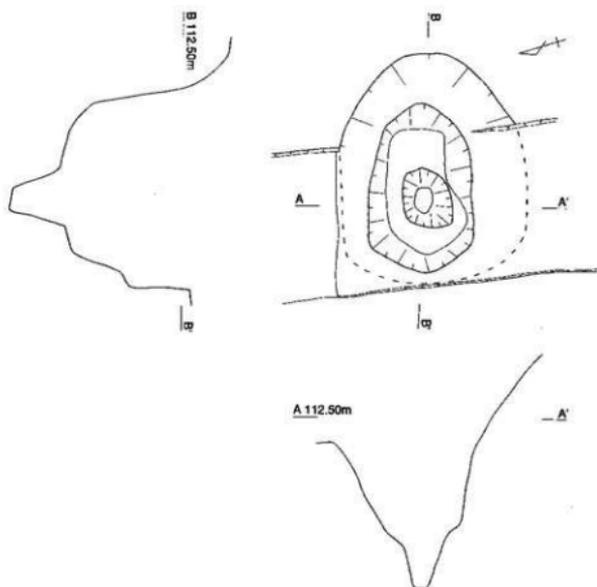
A 114.00m



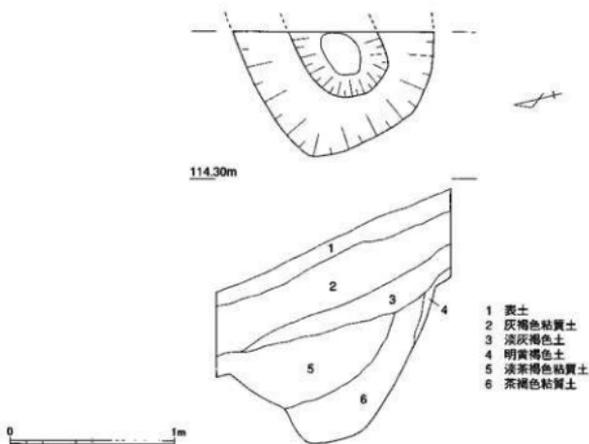
- 1 表土
- 2 灰褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 茶褐色粘質土
- 5 淡黄褐色粘質土
- 6 黄灰色粘質土

0 2m

第54图 高瀬城北遺跡第2調査区 調査後地形測量図・遺構配置図・土層図 (S=1/60)



第55图 高潮城北遺跡第2調査区 第1土坑実測図 (S=1/30)



第56图 高潮城北遺跡第2調査区 第2土坑実測図 (S=1/30)

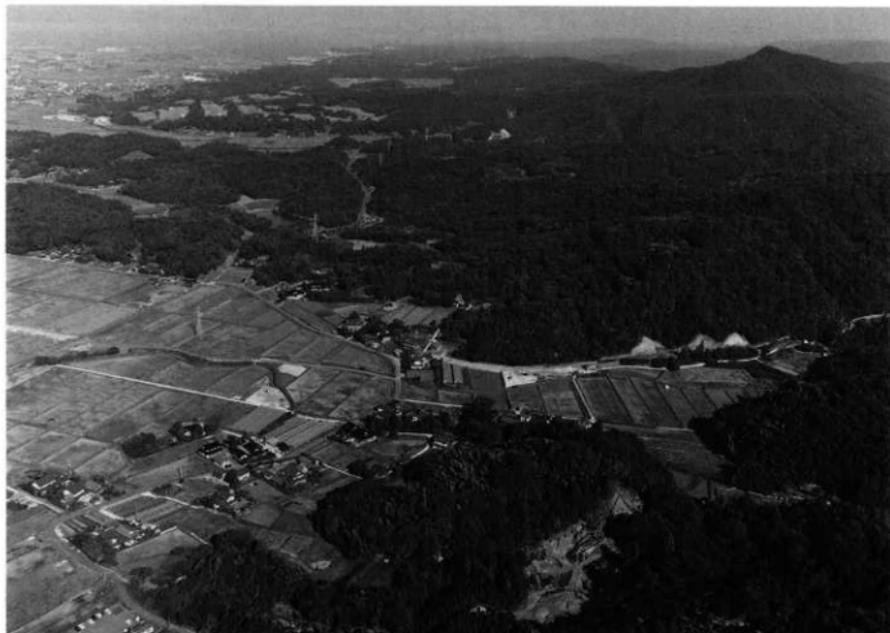
圖 版



西 I 遺跡 全景(南東上空より)



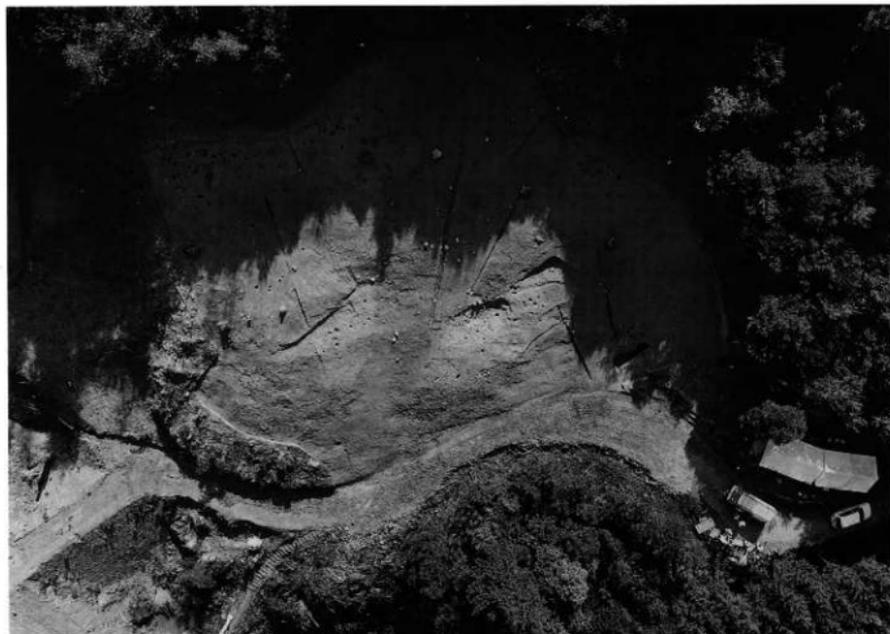
西 I 遺跡(中央)・石橋 I 遺跡(左上) 遠景



西 1 遺跡 遠景(西側上空より)



西 1 遺跡 全景(東側上空より)



西 I 遺跡 A 区 全景(上空より)



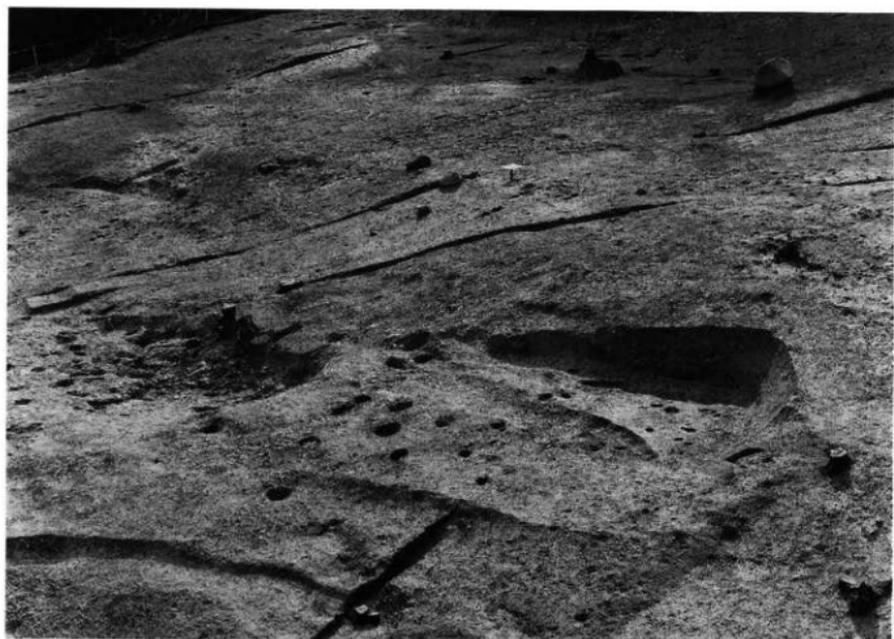
西 I 遺跡 A 区 段状遺構 1・3・4・5 (北側より)



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 2 (北西側より)



西I遺跡A区 段状遺構1・3・4(北西側より)



西I遺跡A区 段状遺構1・3・4・5(北西側より)



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 1・掘立柱建物 1



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 1・掘立柱建物 2



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 2・掘立柱建物 3



西 I 遺跡 A 区 小規模ピット群



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 3 (西側より)



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 3 (東側より)



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 3 新段階・遺物出土状況



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 3 新段階・遺構検出状況(南西側より)



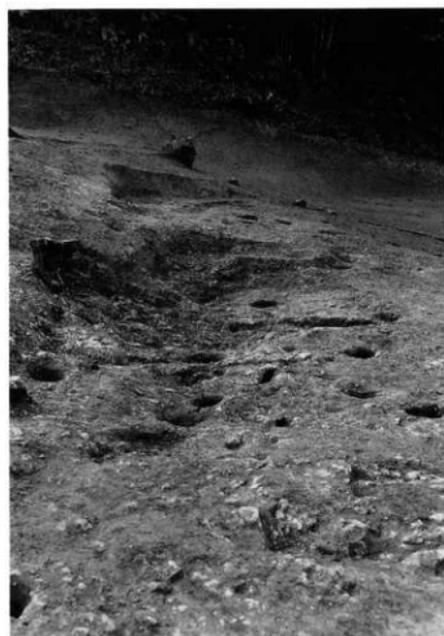
西 I 遺跡 A 区 段状遺構 3 新段階・遺構完掘状況(北東側より)



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 5・床面検出状況(北東側より)



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 4・遺構完掘状況(北西側より)



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 4・遺構完掘状況(東側より)



西 I 遺跡 A 区 段状遺構 3(西側より)